

い れい ぼる

伊礼原E遺跡

—桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査（平成16・17年度）—

（第一分冊）



2010（平成22）年2月

沖縄県 北谷町教育委員会

第一分冊本文目次

はじめに		
例言		
巻首図版		
第I章	調査に至る経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査体制	1
第II章	位置と環境	3
第III章	調査の方法と成果	5
第1節	調査の方法	5
第2節	調査の経過	5
第3節	層序	9
第4節	遺構	21
第IV章	理化学的分析	37
第1節	南九州からみた伊礼原E遺跡出土土器の位置づけ	37
第2節	伊礼原E遺跡から得られた貝類遺体	41
第3節	伊礼原E遺跡出土の脊椎動物遺体	57
第4節	伊礼原E遺跡出土の人骨	80
第5節	キャンブ桑江北側遺跡群における古汀線を指示するビーチロックと甌穴	87
第6節	放射性炭素年代測定	94
第7節	伊礼原E遺跡出土土器の自然科学分析	100
第8節	伊礼原E遺跡の自然科学分析	105
第V章	総括	110
報告書抄録		

第二分冊本文目次

巻首図版

第III章 調査の方法と成果

第5節	出土遺物	1
1	土器	5
2	石器	142
3	土製品	244
4	骨製品	245
5	貝製品	261
6	カムイヤキ	324
7	青磁	324
8	白磁	326
9	天目茶碗	326
10	染付	327
11	三彩	329
12	褐釉陶器	330
13	タイ産褐釉陶器	330
14	沖縄産施釉陶器	332
15	沖縄産無釉陶器	339
16	陶質土器	348
17	近世磁器	352
18	近代磁器	353
19	円盤状製品	356
20	瓦	358
21	青銅製品	359
22	銭貨	361
23	鉄製品	361

挿 図 目 次

第1図	北谷町の遺跡分布と伊礼原E遺跡の位置	4	第23図	伊礼原E遺跡から出土した脊椎動物遺体の層別最62小個体数(MNI)と組成	
第2図	グリッド設定	8	第24図	伊礼原E遺跡Vs層(3区F7・5区・6区)とV層から出土した魚類遺体の組成(MNUI比)	
第3図	Gライン基本層序	9	第25図	北谷町域の遺跡における脊椎動物遺体群(ピックアップ資料)の組成の変遷(1):MNI比	
第4図	層序(1) 8ライン東壁(I~IV層まで)	13	第26図	北谷町域の遺跡における脊椎動物遺体群(ピックアップ資料)の組成の変遷(2):NISPI比	
第5図	層序(2) E・Gライン北壁	15	第27図	北谷町域の遺跡における魚類組成(ピックアップ資料)の変遷(1):MNI比	
第6図	層序(3) 8ライン(4区)西壁	17	第28図	北谷町域における魚類組成(ピックアップ資料)の変遷(2):NISPI比	
第7図	時代別地形の推移	20	第29図	SX014 人骨検出状況	80
第8図	縄文中期の欄列状遺構平面・断面(SC003)	22	第30図	SX008 人骨の出土部位	81
第9図	SX007 舟址平面・断面	24	第31図	SX014 人骨の出土部位	81
第10図	SX008平面・断面	26	第32図	散乱人骨片の部位	83
第11図	SX014人骨検出状況平面・見通し断面	27	第33図	旧江線の復元と試掘検出箇所	90
第12図	一括土器(船元系土器)出土状況(G8)	28	第34図	各粒度階における鉱物・岩石出現率(%)	104
第13図	SX005・SX006平面・断面	30	第35図	胎土中の砂の粒徑組成	104
第14図	SX001 石組遺構の位置	31	第36図	砕屑物・基質・孔隙の割合	104
第15図	SX001 石組遺構平面・断面	32	第37図	型式別凸帯文幅・肥厚幅比較	115
第16図	SX002 石列遺構(遺物分布)平面・側面	34	第38図	型式別胴部文様構図比較	115
第17図	遺構配置と石器・チャートの関係	36	第39図	本遺跡出土の土器変遷	116
第18図	縄文時代前期末~中期後葉における九州の編年模式図	39			
第19図	伊礼原E遺跡関連資料	40			
第20図	伊礼原E遺跡の優占種組成	51			
第21図	伊礼原E遺跡の貝類生息場所類型組成	51			
第22図	波浪の変化に基づく海洋地形の3タイプ	56			

図 版 目 次

巻首図版1	伊礼原E遺跡航空写真		図版12	下顎骨	27
巻首図版2	層序(1)		図版13	人骨取上げ作業状況	27
巻首図版3	層序(2)		図版14	石籬出土	28
巻首図版4	層序(3)		図版15	船元系土器一括出土	28
巻首図版5	上:5・6区礫面検出状況 中:作業風景 下:3・5区冠水状況		図版16	SX005検出状況	30
巻首図版6	上:5区・6区全景 下:6区舟址検出状況		図版17	SX005掘削状況	30
巻首図版7	遺物出土状況		図版18	SX006検出状況	30
巻首図版8	土器胎土薄片		図版19	SX006掘削状況	30
巻首図版9	平面分布(1群土器・II群土器)		図版20	戦前の集落と調査区・遺構の位置	31
巻首図版10	平面分布(貝・骨製品・脊椎動物遺体)		図版21	SX001石組遺構	32
巻首図版11	平面分布(石器・チャート)		図版22	SX001石組検出状況	32
巻首図版12	土器平面分布(型式別・重量別)		図版23	SX001石組検出状況	32
巻首図版13	遺物の高さ別平面分布		図版24	石組遺構と木杭検出状況(C7-43)	33
巻首図版14	土器型式別垂直分布		図版25	石組遺構と木杭検出状況(C7-52)	33
図版1	層剥ぎ取り作業	12	図版26	木杭検出状況(D7-02)	33
図版2	Gライン北壁	15	図版27	木杭検出状況(D7-02西壁)	33
図版3	4区西壁 E-50、F8-00・10・20・30・40・50	17	図版28	SX002 石列遺構と下層の状況	34
図版4	欄列状遺構検出状況	22	図版29	下顎骨(ブタ)検出状況	34
図版5	上部礫除去後状況	24	図版30	SX002 石列遺構検出状況と作業風景	35
図版6	石散き検出状況	24	図版31	貝類遺体1	52
図版7	頭骨検出状況	26	図版32	貝類遺体2	53
図版8	SX008掘削状況	26	図版33	貝類遺体3	54
図版9	人骨取上げ作業状況	26	図版34	貝類遺体4	55
図版10	人骨検出状況	27	図版35	貝類遺体5	56
図版11	石大腸骨	27	図版36	脊椎動物遺体1	76
			図版37	脊椎動物遺体2	77
			図版38	脊椎動物遺体3	78
			図版39	脊椎動物遺体4	79

図版 40	SX008人骨	84	図版 44	現世ビーチロック	91
図版 41	SX014人骨	84	図版 45	キャンプ桑江址地ビーチロック	92
図版 42	頭蓋骨片	85	図版 46	庵穴群(ポットホール)	93
図版 43	四肢骨片	86	図版 47	分析試料・炭化材	109

表 目 次

第 1 表	種別状遺構 各ピットの計測値	21	第 16 表	伊礼原E遺跡から出土したイノシシ・ブタ上顎骨の詳細	72
第 2 表	集積遺構計測値	29	第 17 表	伊礼原E遺跡から出土したウシ・ウマ遺体一覧	72
第 3 表	石器・チャート一覧	36	第 18 表	伊礼原E遺跡から出土したウシ顎骨・歯の詳細	72
第 4 表	伊礼原E遺跡出土貝類とその生息場所類型	45	第 19 表	伊礼原E遺跡から出土したイノシシ・ブタの歯の集計表	73
第 5 表	伊礼原E遺跡における優占種の頻度(%)	47	第 20 表	伊礼原E遺跡から出土した脊椎動物遺体の組成	74
第 6 表	伊礼原E遺跡から得られた貝類遺体の詳細	48	第 21 表	伊礼原E遺跡から出土したジュゴン遺体一覧	75
第 7 表	沖繩における貝類の生息場所類型	56	第 22 表	伊礼原E遺跡から出土したクジラ・イルカ類遺体一覧	75
第 8 表	伊礼原E遺跡から採集された脊椎動物遺体の種名一覧	65	第 23 表	伊礼原E遺跡から出土したカニ類遺体一覧	75
第 9 表	伊礼原E遺跡から出土したウミガメ類遺体一覧	65	第 24 表	伊礼原E遺跡 SX014人骨の大腿骨計測値	81
第 10 表	伊礼原E遺跡から出土した魚類遺体一覧	66	第 25 表	伊礼原E遺跡出土散乱人骨の最小個体数推定	82
第 11 表	伊礼原E遺跡から出土したリクガメ類遺体一覧	67	第 26 表	薄片観察結果	103
第 12 表	伊礼原E遺跡から出土した鳥類・ネズミ・ヤギ遺体一覧	67	第 27 表	放射性炭素年代測定結果	106
第 13 表	伊礼原E遺跡から出土したイヌ遺体一覧	67	第 28 表	暦年校正結果	106
第 14 表	伊礼原E遺跡から出土したイノシシ・ブタ遺体	68	第 29 表	土壌試料識別・分類結果	107
第 15 表	伊礼原E遺跡から出土したイノシシ・ブタ下顎骨の詳細	70			

例 言

1. 本報告書は、北谷町教育委員会が桑江伊平土地区画整理事業に伴い、平成 16 年度～17 年度に実施した『伊礼原 E 遺跡』発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/2,500 地形図(昭和 54 年測量)を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告の方位は磁北をさす。
3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。(敬称略)記して感謝申し上げます。

土 器	相美伊久雄 (鹿児島県志布志市教育委員会)
石 質	大城 逸朗 (北谷町文化財審議委員 理学博士)
貝 類	黒住 耐二 (千葉県立中央博物館 上席研究員)
獸 骨	樋泉 岳二 (早稲田大学)
人 骨	土肥 直美 (琉球大学医学部 准教授)
	藤田 祐樹 (沖縄県立博物館・美術館)

堆 積 学 松田順一郎 (大阪府 (財) 東大阪市施設利用サービス協会)

4. 相美伊久雄氏・大城逸朗氏・黒住耐二氏・樋泉岳二氏・土肥直美氏・藤田祐樹氏には玉稿を賜った。記して謝意を表します。
5. 放射性炭素分析 パリノ・サーヴェイ (株)・地球科学研究所
土器胎土分析 パリノ・サーヴェイ (株)
6. 本報告書の編集は、山城安生、島袋春美が行い執筆分担は下記のとおりである。

第 I 章	東門 研治
第 II 章	山城 安生
第 III 章 第 3 節	山城 安生
第 III 章 第 4 節 1・2	松原 哲志
第 III 章 第 4 節 3	山城 安生
第 III 章 第 5 節 1 (I)・4・5	島袋 春美
第 III 章 第 5 節 1 (II)	松原 哲志
第 III 章 第 5 節 2	上地千賀子
第 III 章 第 5 節 3・14・15・21～23	呉屋 広江
第 III 章 第 5 節 6～13・16～20	山城 安生
第 V 章	山城 安生・他

7. 本遺跡の遺物の注記は下記のとおりである。

・注記凡例

遺物(Dot)番号	グリッド	日付	遺構名
1869	F7	20050317	SX002



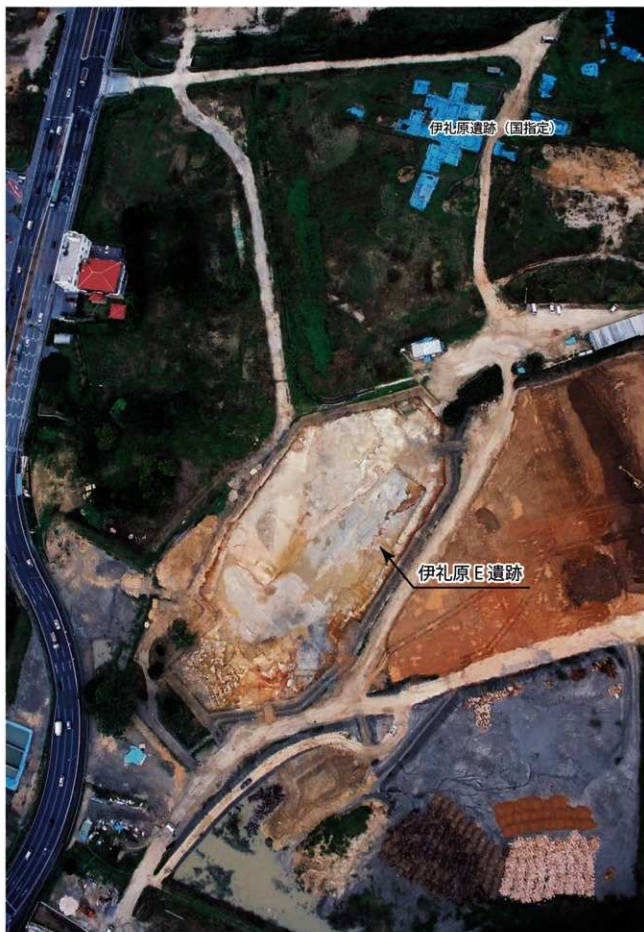
伊 E Dot 20050317 F7-1869 SX002

袋番号	グリッド	細分	日付	遺構名
0001	F7	53	20050317	SX002



伊 E 0001 20050317 F7-53 SX002

8. 本報告書の編年表記は沖縄編年 (前 I・II・III・IV、後期) を基本とするが、時間的都合上、報告書全編で統一には至らなかった。編年の対象については「報告書抄録」を参考されたい。
9. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会に保管している。



卷首図版 1 伊礼原 E 遺跡航空写真



3区 Eライン (E7-00・01) 北壁



3区 Eライン (E7-00・01) 北壁の下層確認 (Ⅵ層とⅦ層)



3区 Eライン (E7-00) 畦内 (Ⅴ層) 出土状況



3区 Eライン (E7-01) で検出された (Ⅵ層) 堆積のズレ跡



巻首図版 2 層序 (1)

1区 Dライン (D50～55) 南壁



6区 G8-42～45 南壁 (Hライン) [手前]・50～55 南壁 [奥] と H8・9 南側の地山検出状況



4区 F7-50～54 南壁 [手前]、5・6区 G7・8 南壁 [奥]



4区 F8-50～55・F9-50～52 南壁 (Ⅷ層面)



4区 F9-50～52 南壁・F9-42・52 東壁
地山 [奥] 周辺の堆積状況



6区 G8-13・14・23・24 下層確認試掘坑
(Ⅷ層と地山)



Gライン 5・6区 北壁 (上段:G7~C8 下段:C8~C9)



巻首図版 5 上：5・6区礫面検出状況（北から）
中：作業風景（南から）
下：3・5区冠水状況（東から）



巻首図版 6 上：5区・6区 全景（Vs層面とV層（炉跡）、東側から）
下：6区 炉址検出状況（G8-53、南側から）



3区 E7-55 IV層 抉入石斧 (第96図37・第93図17)



3区 F7-11 IV層攪乱 SX002周辺 貝輪 (第137図3)



3区 E7-42 Vs層 台付皿形土器 (第81図83)



5区 Vs層 G7-34 貝輪 (第138図10・11)



6区 G8-14 V層 輝緑岩石鍬 (第127図21)



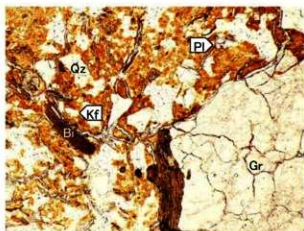
6区 G8-51 Vs層 骨製品 (第132図15)



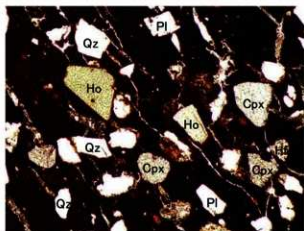
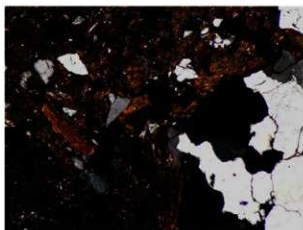
6区 G8-14 V層 船元系土器 (第47図15)



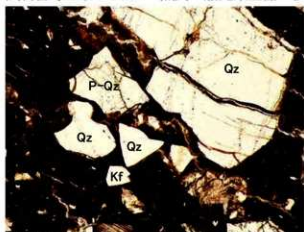
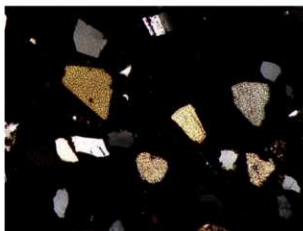
6区 G9-40 V層 仲泊a式土器 (第62図53)



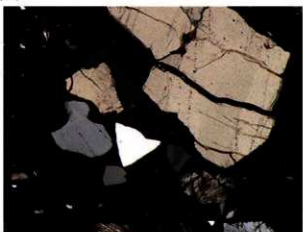
試料番号 1 (C24 有文 室川下層式 伊礼原砂丘区)



試料番号 2 (G7-9304 無文 船元系土器 伊礼原E)

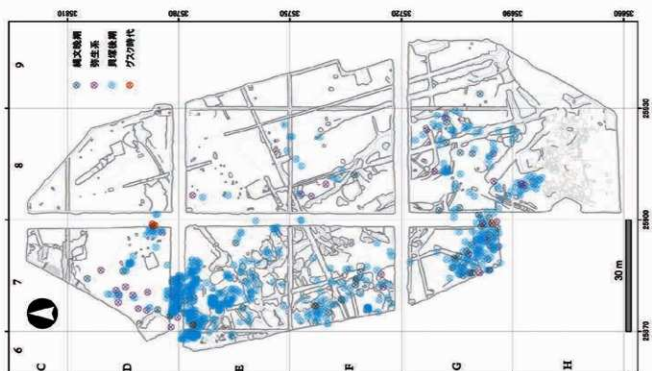
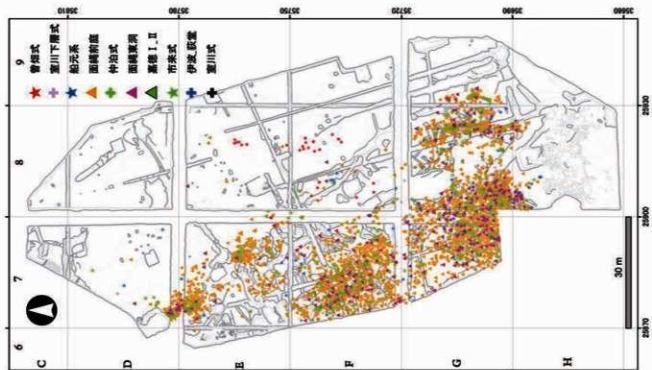


試料番号 3 (G8-1555 船元系土器 伊礼原E)

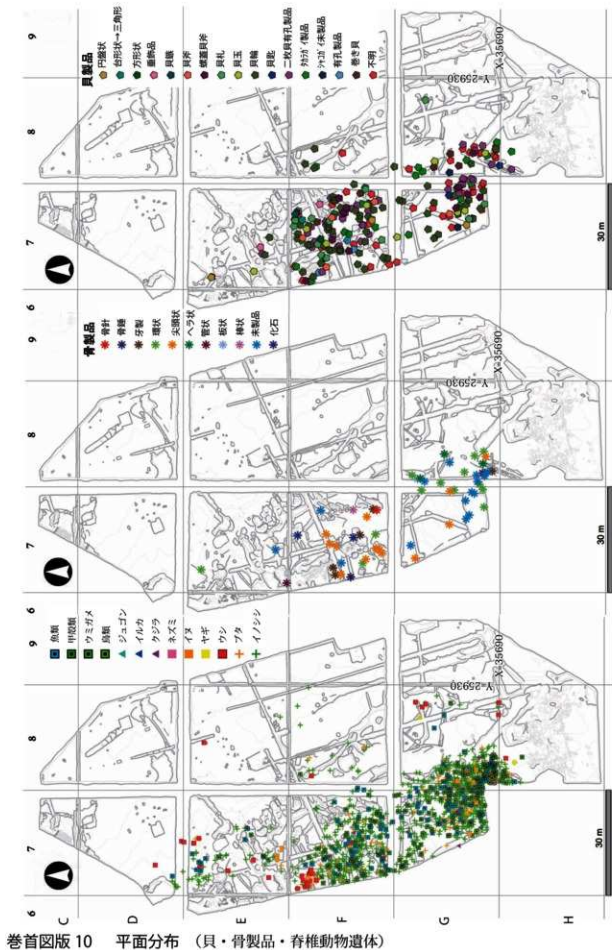


Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Cpx:単斜輝石,
Ho:角閃石, P-Qz:多結晶石英,
Gr:花崗岩, Hf:ホルンフェルス.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



卷首図版 9 平面分布 (I 群土器・II 群土器)

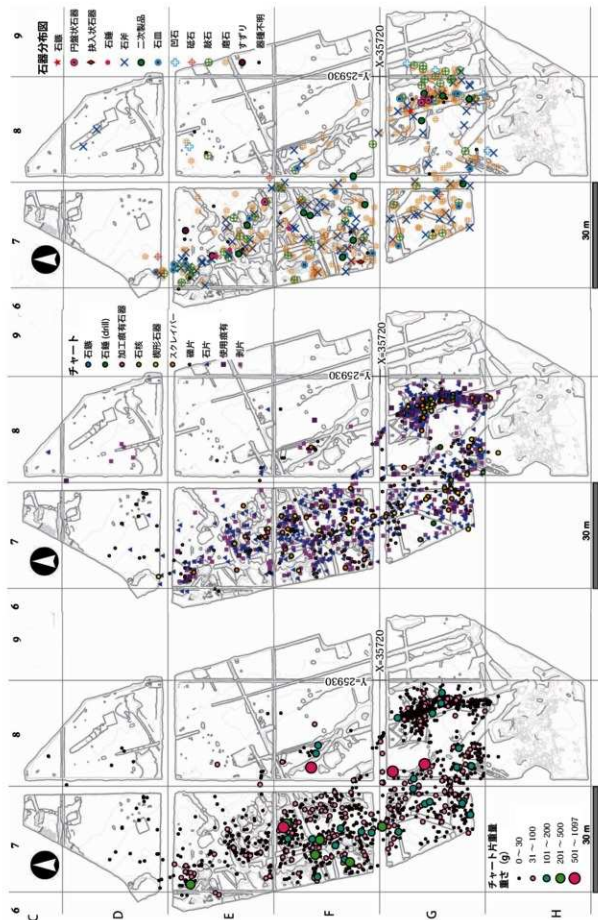


貝製品の平面分布

骨製品の平面分布

脊椎動物遺体の平面分布

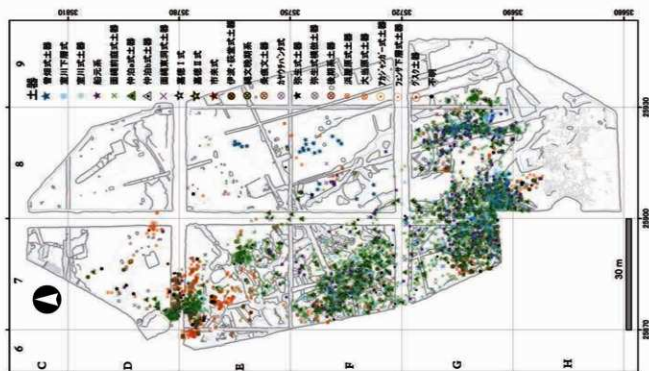
巻首図版 11 平面分布 (石器・チャート)



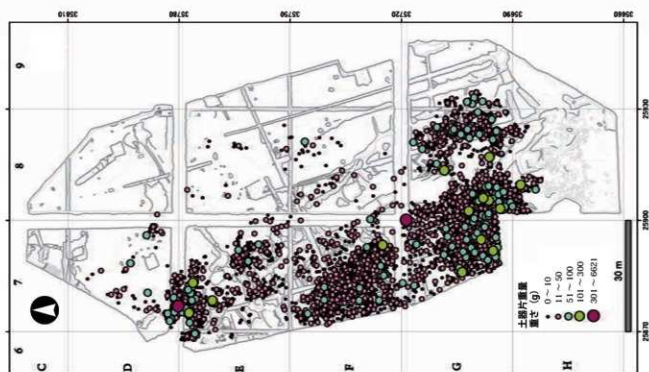
石器の平面分布

チャート器種別平面分布

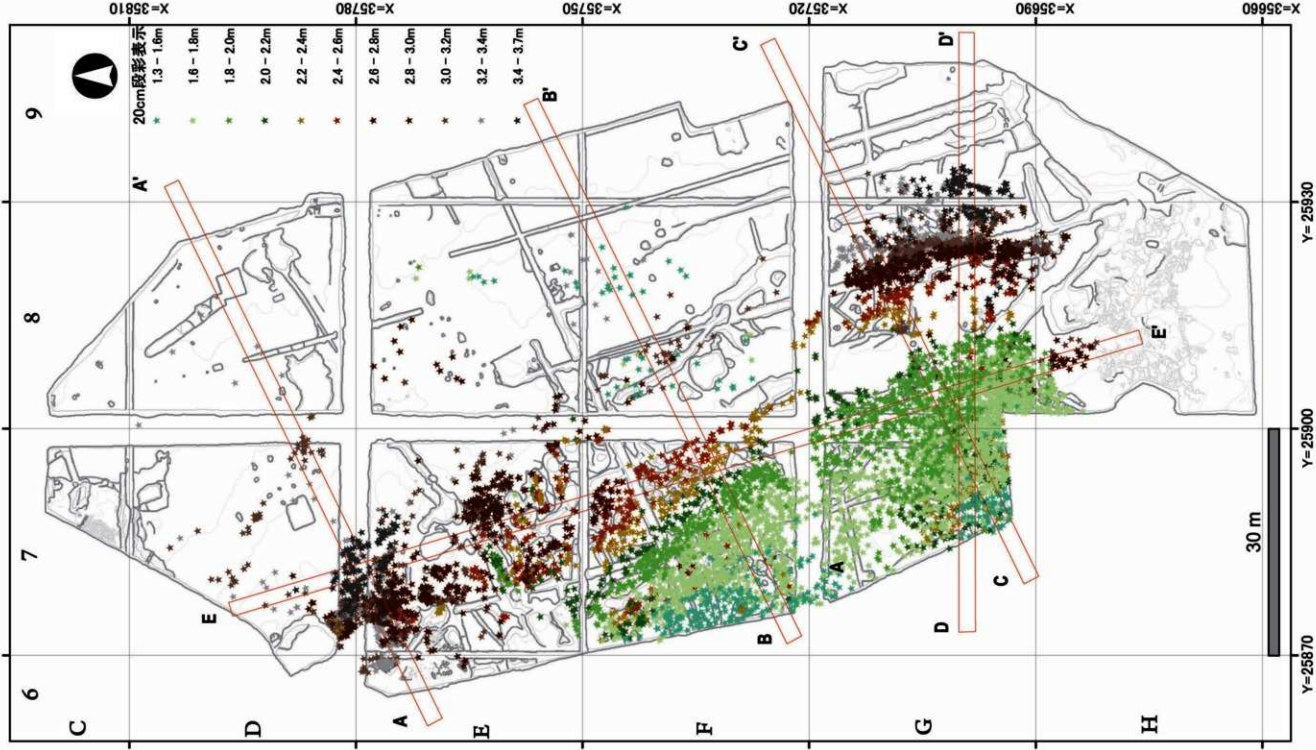
チャート片重量別平面分布



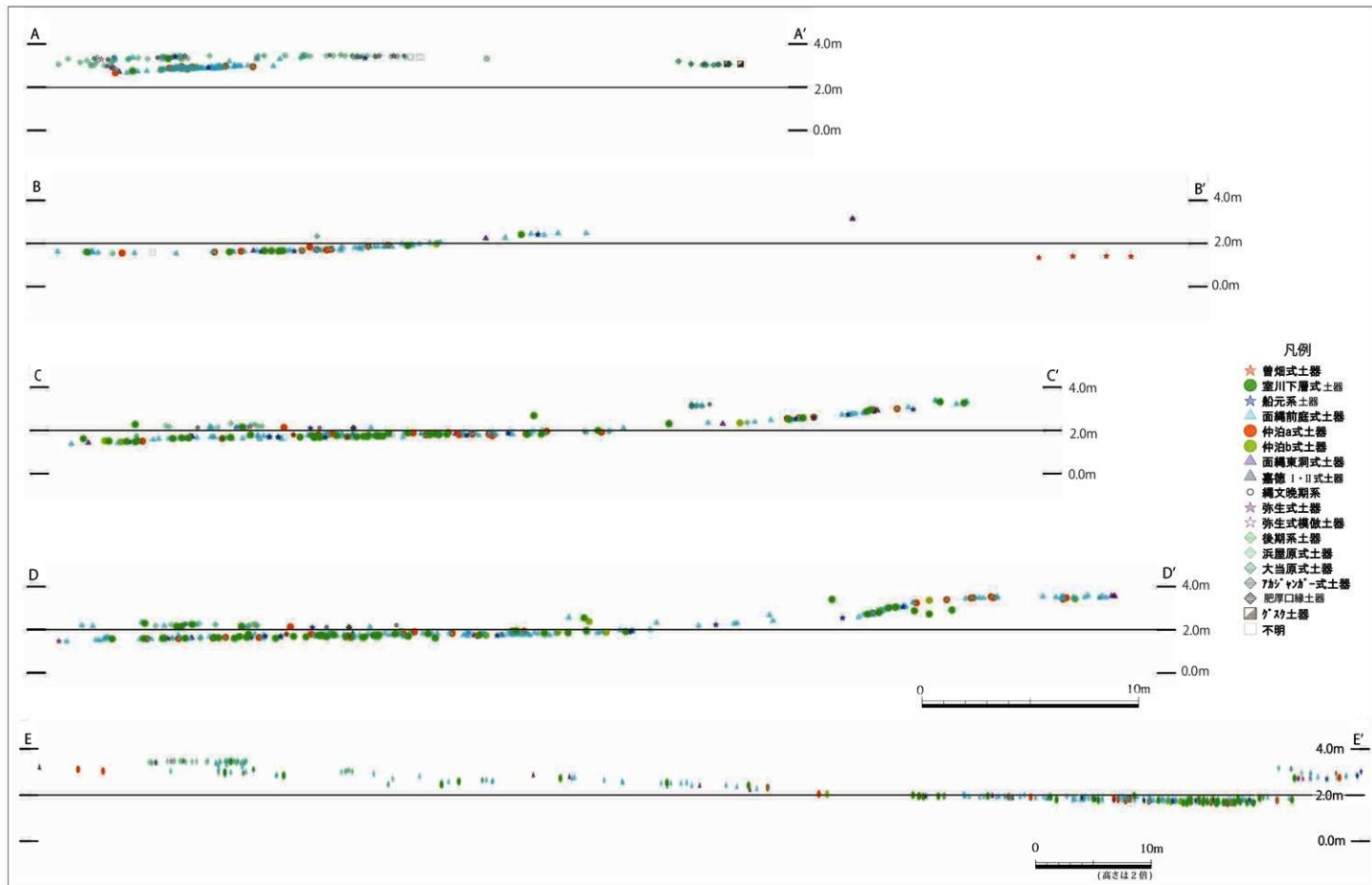
土器型式別平面分布



土器重量別平面分布



巻首図版 13 遺物の高さ別平面分布



卷首図版 14 土器型式別垂直分布

第 I 章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経緯

本調査は、桑江伊平土地区画整理事業に係る記録保存の為の発掘調査である。

本遺跡が所在する北谷町字伊平小字伊礼原(旧キャンプ桑江北側地区)は、平成15年3月に基地が返還された地域の一部である。北谷町教育委員会では、基地の返還に先立ち、その跡地利用のための諸開発が増大する事が確実に見込まれる事から、跡地利用計画を円滑に進める目的で、当該地における埋蔵文化財の有無を確認する為の試掘調査を1995(平成7)年度から1997(平成9)年度にかけて実施した。その結果、字伊平小字伊礼原284番地一帯の約9,000㎡に、貝塚時代早期・前期(縄文時代前期～後期)の遺跡が包蔵されている事が確認され、伊礼原E遺跡と命名した(註1)。

試掘調査後、遺跡の性格及びその範囲をより詳細に把握するため、2001(平成13)年度には確認調査を行い、その結果、貝塚時代前期から近代に亘る息の長い遺跡である事が判明した(但し、貝塚時代早期は二次堆積の様相であった)(註2)。

返還跡地では区画整理事業が実施される事となり、予備調査の結果に基づいて施行者である北谷町と遺跡の取扱について協議を行い、本遺跡は記録保存の対象となった。

その後、町教育委員会は「桑江伊平土地区画整理事業」の施行者である北谷町と、桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査に関する協定を平成16年度10月27日に締結した。発掘調査は北谷町から委託を受け、町教育委員会が2004(平成16)年度から2005(平成17)年度にかけて実施する事となった。しかし、町教育委員会においては、他事業との関係により専門員の配属が著しく困難である事から、発掘調査に係る諸々の準備作業の軽減をはかるため、現地調査の測量、発掘作業員の手配及び安全管理を委託する事にした。

平成16年12月21日に株式会社バスコと契約を締結し、平成17年12月28日まで現地調査を行った。

註1 北谷町教育委員会 2005 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—』

註2 北谷町教育委員会 2008 『伊礼原B遺跡 伊礼原E遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10年～14年度)—』

第2節 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

発掘調査及び資料整理の体制

事業主体 北谷町教育委員会

教育長	瑞慶覽 朝宏(平成16年度～平成19年度)
同	比嘉 秀夫(平成20年度～平成21年度)

事業総括	教育次長	伊礼 喜正(平成16年度)
	同	阿波根 進(平成17・18年度)
	教育次長	謝花 良継(平成19～20年度)
	社会教育課長	幸地 清(平成16年度)
調査総括	同	大城 操(平成17～21年度)
	文化係長	中村 慇(平成16～19年度)
調査員	同	嘉陽田 朝栄(平成19～21年度)
	主任主事	山城 安生(平成19～21年度)
	同	東門 研治(平成16～21年度)
	主 事	松原 哲志(平成18～21年度)

資料整理作業員

(平成17年度)

嘱 託	上間真寿美	佐久間クリエ	豊里 初江	仲田 浩二	八田 夕香
	東 順子	山城小百合			
臨 時	大城 俊	知念 真衣	山田 裕二		

(平成18年度)

嘱 託	上間真寿美	佐久間クリエ	島袋 保	照屋 元子	豊里 初江
	仲田 浩二	東 順子	細川 愛	山城小百合	
臨 時	新城とよ子	大城 俊	知念 栄子	知念 真衣	山田 裕二
	前田 武士	古謝かなえ			

(平成19年度)

嘱 託	新城とよ子	上間真寿美	佐久間クリエ	島袋 春美	曾木 菊枝
	照屋 元子	豊里 初江	知念 栄子	西原 美草	東 順子
	細川 愛				
臨 時	池原絵利香	喜友名香織			

(平成20年度)

嘱 託	佐久間クリエ	曾木 菊枝	照屋 元子	豊里 初江	西原 美草
	東 順子				
臨 時	朝岡利恵子	石川 千恵	石川 由華	稲嶺 律子	金城 綾乃
	當山 美希	知念 栄子	宮里美也子		

(平成21年度)

嘱 託	上地千賀子	佐久間クリエ	曾木 菊枝	照屋 元子	豊里 初江
	西原 美草				
臨 時	朝岡利恵子	石川 早季	石川 千恵	石川 由華	稲嶺 律子
	川南 百代	岸本 里子	金城 綾乃	照屋 朝子	當山 美希
	豊川 頼子	仲村渠恵子			

第 2 章 位置と環境

伊礼原 E 遺跡は、旧キャンプ桑江北側の返還に伴う試掘調査によって発見された 9 つの遺跡の 1 つで、返還地域のほぼ中央部にあたる北谷町字伊平小字伊礼原に所在する。

本遺跡が所在する北谷町は、沖繩島の中部西海岸側にあり、県庁所在地の那覇から約 16km 北東に位置する。海岸低地には主要幹線道路の国道 58 号が通る。南北約 6km、東西約 4.3km、総面積 13.77km²、人口約 27,000 人の町である。

北谷町は、現在も約 52.9% が米軍基地となっており、町域北側には嘉手納飛行場、南側にはキャンプ瑞慶覧、中央部には海軍病院の移転が進むキャンプ桑江がある。

太平洋戦争において 1945 年 4 月 1 日の米軍沖繩上陸地点となった後、北谷村全域が占領地となり旧集落や耕作地は米軍基地に姿を変えた。村から町への戦後の暮らしは丘陵地から始まっている。

戦後の居住地となった町域東側の狭隘な丘陵地は宅地造成され、返還された海浜部は公有水面の埋立て等による新たな街づくりが行われ第三次産業を主とした賑わいを見せている。

平成 15 年 3 月末に返還された約 38ha の旧キャンプ桑江北側地区では、基地に姿を変えた旧集落や耕作地であった海岸低地は、跡地利用の区画整理事業によって現代の町並みへと変わりつつある。

本町の地勢は、東高西低の地勢である。町域の北側ではカルスト残丘が見られる石灰岩段丘下位面・中位面、東側は狭隘な山間部であった丘陵地上を刻む浅い谷や小起伏丘陵、石灰岩段丘中位面、南側は小起伏丘陵、石灰岩段丘下位面となっており、東シナ海に面した海岸低地は完新世に堆積した沖積層の低地である。海岸低地は、西海岸へ舌状に延びる標高約 50m の北谷城が所在する石灰岩堤が町域の海岸低地の広がりをも 2 分する様相を呈している。

本遺跡の立地は、北側約 200m に国指定史跡伊礼原遺跡（巻首図版 1）があり、同遺跡の南側で舌状に迫り出す台地に沿うように流れるクシヌカーラ（後ろの川）と南東側にあるナルカー（奈留川）の 2 つ小川に挟まれた範囲に広がる沖積低地の標高約 3.8m～4.8m に立地する。面積は約 9,000m² である。一帯には陸生シルトや海浜堆積物で形成された沖積層の海岸低地となっており、本遺跡で見られた堆積は、遺跡東側で確認された赤土土壌の地山や石灰岩の基盤の露頭が飛び石状に見られ、その周辺や間を埋めるように陸生シルトや海浜堆積物、砂層等が互層をなして堆積し陸地となった様相が見られる。

本町内には 48 遺跡が確認されており、返還となった旧キャンプ桑江北側の海岸低地では、本遺跡に隣接する貝塚時代早期～近世までの伊礼原遺跡、北側の砂地にはグスク時代の千原遺跡、平安山原 A 遺跡、平安山原 C 遺跡、伊礼原 D 遺跡、丘陵の麓に平安山原 B 遺跡、本遺跡より南東側に貝塚時代後期の小堀原遺跡、グスク時代から近世の後兼久原遺跡が所在する。

町域北側の旧集落の様相をかわらうじて残す砂辺には、集落背後の小丘陵上に形成された貝塚時代前・中期、グスク時代の砂辺貝塚、陥没ドリーネの洞穴に形成された貝塚時代前期からグスク時代のクマヤー洞穴遺跡、砂地に形成された貝塚時代後期の砂辺サークバル遺跡、石灰岩段丘低位面にある貝塚時代後期の砂辺サークバル遺跡などがある。

北谷城の周辺には貝塚時代後期から近世の遺跡が多く、町域南側の海岸低地には貝塚時代早期から近世の新城下原第 2 遺跡、石灰岩段丘下位面や小起伏丘陵には貝塚時代後期の遺跡が比較的多く確認されている。新たな遺跡の発見は丘陵地においても見られるが、その多くは海岸低地で確認される。

<参考文献>

北谷町教育委員会 2007 『北谷町史第 1 巻 通史編』

北谷町教育委員会 2008 『伊礼原 B 遺跡 伊礼原 E 遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 27 集

- 1 砂辺サーク原貝塚 (前期)
- 2 砂辺サーク原遺跡 (後期～近世)
- 3 砂辺貝塚 (後期～グスク)
- 4 砂辺ウガン遺跡 (後期～グスク)
- 5 カーシーノボントン遺物散布地 (グスク)
- 6 クマヤー洞穴遺跡 (前期～グスク)
- 7 浜川千原岩山遺物散布地 (後期)
- 8 浜川ウガン遺跡 (後期)
- 9 上・下勢頭区古墓群 (近世)
- 10 伊礼原遺跡 (前期～近世)
- 11 伊礼原B遺跡 (近世・近代)
- 12 桑江ノ殿遺物散布地 (後期～近世)
- 13 桑江遺物散布地 (後期)
- 14 鹿化石出土地 (旧石器)
- 15 前原古島A遺跡 (近世)
- 16 前原古島B遺跡 (近世)
- 17 伊地差久原古墓 (近世)
- 18 前原古墓群 (近世)
- 19 桃原洞穴遺跡 (旧石器)
- 20 インディアン・オーク号の産磁地 (近世)
- 21 池グスク (後期)
- 22 白比川河口遺物散布地 (グスク)
- 23 北谷城遺跡群 (後期～近世)
- 24 北谷城第7遺跡 (後期～近世)



第1図 北谷町の遺跡分布と伊礼原E遺跡の位置

- 25 北谷番所址 (後期～近世)
- 26 吉原東角双原遺物散布地 (グスク)
- 27 山川原古墓群 (近世)
- 28 玉代勢原遺跡 (後期～近世)
- 29 長老山遺物散布地 (後期～グスク)
- 30 大道原A遺跡 (後期)
- 31 大道原B遺跡 (後期)
- 32 新城下原遺跡 (早期～近世)
- 33 後兼久原遺跡 (グスク～近世)
- 34 塩川原遺跡 (後期)
- 35 稲千原遺跡 (前期)
- 36 伊波川原遺跡
- 37 伊礼伊森原遺跡 (後期)
- 38 東表原遺跡
- 39 安仁屋原遺跡
- 40 千原遺跡 (後期)
- 41 平安山原A遺跡 (後期)
- 42 平安山原B遺跡 (後期)
- 43 平安山原C遺跡
- 44 伊礼原D遺跡 (後期)
- 45 伊礼原E遺跡 (縄文後期～近世)
- 46 小堀原遺跡 (後期)
- 47 大作原古墓群 (前期～近世)
- 48 横高原遺跡 (後期)

* 番号は位置図に付随

第 3 章 調査の方法と経過

第 1 節 調査の方法

本遺跡の範囲は、南北を長軸とする長楕円形になることが予備調査の結果から確認されており、発掘調査区は、長軸約 160m、短軸約 60m で、調査面積は約 8,850㎡であった。調査範囲が広大のためグリッドの名称は 3 段階に分け、一番大きな区画として公共座標の X 軸と Y 軸を 60m 毎に区分けし、1 地区～6 地区とした。更にそれぞれの地区を 30m 毎に区画し、大グリッドを設けた。

大グリッドは、南北方向を大文字のアルファベットで、東西方向をアラビア数字で表記した。断面観察用のベルトは、基本的に大グリッドの境に設定した。大グリッドは更に 5m 毎に区画し、小グリッドを設けた。小グリッドは、北西側から北東側に向けて 00～05 と 1 の位を、北西側から南西側に向けて 00～50 と 10 の位を増やし表記した。グリッドの名称は、大・小グリッドとも北西隅のグリッド杭を当てることとした（第 2 図）。

調査はまず、調査対象範囲の草刈を行い、基準点測量を実施した。その後、磁気探査を行い、探査終了箇所から順に重機による表土掘削を行った。表土掘削後は人力に切り替え、順次文化層の調査を行った。途中、部分的に中間層（無遺物層）が厚く堆積していた箇所は重機により掘削し、再び人力による掘削を行った。調査終了間際には、下層確認のため重機により深掘りを行い、無遺物層を確認し調査を終了した。

第 2 節 調査経過

以下に調査経過を 1 週間毎に略述する。

平成 16 年度

12 月第 4 週：草刈、基準点測量、磁気探査。

1 月第 1 週：年始により現場休止。

1 月第 2 週：磁気探査、調査区設定、表土掘削。

1 月第 3 週：表土掘削、壁面精査、トレンチ掘削、グスク時代包含層掘削、遺物取上げ。

1 月第 4 週：表土・攪乱部掘削、グスク時代包含層掘削、遺構検出・実測・掘削、遺物取上げ。

1 月第 5 週：グリッド杭標高設置、全景写真撮影、1・2 地区：攪乱掘削、壁面実測、遺構検出・実測・掘削、遺物取上げ、写真撮影、3 地区：弥生時代包含層掘削、攪乱掘削。4 地区：グスク時代包含層掘削、攪乱掘削、壁面精査。

2 月第 1 週：1.2 地区：壁面実測、遺構掘削、遺構写真撮影、3 地区：弥生時代包含層掘削、攪乱掘削、遺物取上げ、4 地区：グスク時代包含層精査、攪乱掘削、6 地区：包含層精査。

2 月第 2 週：1.2 地区：壁面実測、3 地区：弥生時代包含層掘削、攪乱掘削、写真撮影、実測、遺物取上げ、4 地区：グスク時代包含層掘削、攪乱掘削、遺物取上げ、写真撮影、5.6 地区：グスク時代包含層掘削、遺構検出、攪乱掘削。

2 月第 3 週：3.4 地区：雨水排水、グスク時代包含層掘削、遺構検出、5 地区：北面・東面トレンチ掘削、6 地区：グスク時代包含層精査、攪乱掘削。

2 月第 4 週：1 地区：壁面精査、写真撮影、2 地区：壁面精査、実測、写真撮影、3 地区：弥生時代包含層掘削、遺構掘削、検出、雨水排水、写真撮影、実測、4 地区：グスク時代包含層掘削、遺構検出、遺物取上げ、雨水排水、6 地区：グスク時代包含層掘削、遺構検出、写真撮影。

平成17年度

- 4月第1週：空撮、1.2地区：南側ベルト掘削、3～6地区：写真撮影、壁面精査、実測。
- 4月第2週：1地区：西南側ベルト下掘削、完掘撮影、2地区：北側ベルト下掘削、完掘撮影、3地区：西側ベルト掘削、遺構検出、3.4地区：重機により間層掘削、壁面精査、実測、写真撮影、5地区：東壁ベルト掘削、ベルト下遺構掘削、写真撮影、6地区：遺構掘削、写真撮影、実測。
- 4月第3週：2地区：遺物取上げ、3地区：西側ベルト掘削、遺構掘削、遺構検出、遺物取上げ、4地区：重機により間層掘削、5地区：遺構掘削、写真撮影、6地区：ベルト清掃、写真撮影。
- 4月第4週：4地区：包含層掘削、実測、遺物取上げ、6地区：弥生層掘削、遺構検出。
- 4月第5週：4地区：包含層掘削、6地区：弥生層掘削、遺構検出、実測、遺物取上げ。
- 5月第1週：4地区：包含層掘削、壁面精査、6地区：弥生層掘削、遺構検出、実測、遺物取上げ。
- 5月第2週：4地区：包含層掘削、壁面精査、分層、写真撮影、実測。
- 5月第3週：4地区：包含層掘削、壁面精査、分層、写真撮影、実測、遺物取上げ、6地区：包含層掘削、SX005 断面実測、写真撮影、6地区：包含層掘削、遺物取上げ。
- 5月第4週：3地区：弥生層～縄文後期上面間層掘削、縄文後期層精査、4地区：壁面崩壊部養生、6地区：礫群測量用写真撮影、弥生間層掘削、礫取り外し、礫群上層の平面実測、遺物取上げ。
- 6月第1週：3地区：弥生層～縄文後期上面間層掘削、縄文後期層精査、重機掘削、遺物取り上げ、6地区：弥生間層掘削、礫取り外し、写真撮影。
- 6月第2週：3地区：縄文後期層精査、弥生層～縄文後期上面間層掘削、5地区：弥生層～縄文後期上面間層重機掘削、北面壁面精査、6地区：炉跡平面図作成。
- 6月第3週：3地区：遺物取上げ、写真撮影、5地区：包含層掘削、壁面修繕。
- 6月第4週：3地区：排水処理。
- 7月第1週：3～5地区：排水処理、5.6地区：土出し。
- 7月第2週：3.5.6地区：土出し、4地区：排水、6地区：遺構再検出。
- 7月第3週：3.5.6地区：土出し、4地区：排水、6地区：遺構検出・掘削(SX005～007)。
- 7月第4週：3.5.6地区：土出し、4地区：排水、6地区：遺構検出・掘削(SX005～007,SK033～035)。
- 7月第5週：3地区：遺構検出、4地区：排水、5地区：遺構検出・掘削(SK038～045)、遺物取上げ、6地区：遺構検出・掘削(SX007,008)、遺物取上げ。
- 8月第1週：3地区：遺構検出、遺物取上げ、壁面清掃、4地区：排水、5地区：遺構検出・掘削(SK040～044)、遺物取上げ、6地区：遺構検出・掘削(SX007,008) 遺物取上げ、壁面清掃。
- 8月第2週：3地区：遺物取上げ、壁面清掃、礫面サンプリング、SX002 実測、4地区：排水、5地区：遺構検出・掘削(SK040～044)、遺物取上げ、壁面清掃、礫面サンプリング、6地区：遺構検出・掘削(SX007～011)、遺物取上げ、壁面清掃。
- 8月第3週：3.5.6地区：壁面実測、遺構検出、遺物取上げ、6地区：遺構掘削(SX007,008)。
- 8月第4週：3.5.6地区：壁面実測、遺構検出、遺物取上げ、6地区：遺構掘削(SX007,008)。
- 9月第1週：3.5.6地区：遺構検出・掘削、遺物取上げ。
- 9月第2週：3.5.6地区：遺構検出・掘削、遺物取上げ。
- 9月第3週：3.5.6地区：遺物取上げ、6地区：遺構検出。
- 9月第4週：3.5.6地区：遺構検出・掘削、遺物取上げ。
- 10月第1週：3.5.6地区：遺構検出、遺物取上げ、6地区：遺構掘削。
- 10月第2週：3.5.6地区：遺構検出、遺物取上げ、6地区：遺構掘削。
- 10月第3週：3地区：F7グリッド縄文後期礫層(礫面下)掘り下げ、5地区：G7グリッド縄文後

期礫層（礫面下）精査、掘り下げ、6 地区：G8 グリッド縄文後期砂層精査。

10 月第 4 週：1.3 地区：縄文中期グリッド設定、3 地区：縄文後期層（礫面下）掘り下げ、完掘清掃、5 地区：縄文後期層遺物 dot 上げ、6 地区：縄文後期層掘削・精査、完掘清掃、写真撮影、SK049 完掘、写真撮影。

10 月第 5 週：1 地区：黄褐色砂質土掘削、2 地区：黄褐色粗砂・茶褐色砂掘削（礫検出）、3 地区：縄文中期遺構確認面精査、遺構検出、写真撮影、6 地区：G8.G9 グリッド縄文後期砂層完掘清掃、写真撮影、SK049 完掘、写真撮影。

11 月第 1 週：1 地区：D7 グリッド縄文中期層掘削、中期包含層一括土器の検出、3 地区：E7 グリッド遺構調査、SC003 掘削、SC004・SK066・071・072・074・075・081～084・090 土層写真撮影。

11 月第 2 週：3 地区：縄文中期層遺構調査、SK098 完掘平面図作成、SK100.101 掘削、SC003 床面精査、SK116 写真撮影、SC001 精査。

11 月第 3 週：1.3 地区：縄文中期層調査、SC001 写真撮影、D7.E7 グリッド黒色土精査、サブトレッチ設定・掘削。

11 月第 4 週：1.3 区：縄文中期層調査、D7.E7 グリッド縄文中期面（完掘状況）平面測量、暗灰褐色シルト掘削、遺物取上げ、一括土器写真撮影、E ライン壁面清掃、写真撮影。

12 月第 1 週：1.3 区：中期面測量、E7 グリッド縄文中期層の炭化物、イノシシ骨サンプリング

12 月第 2 週：1.3 区：中期下面精査、E7.D7 グリッド黄褐色粘質土掘削・灰黄色シルト上面精査、縄文中期層地形測量、5.6 地区：G ラインベルト精査、縄文前期層までトレンチ掘削まで掘削。

12 月第 3 週：4 地区：西壁・南壁精査、5.6 地区：縄文後期から前期層までの間層掘削、北壁・東壁精査、土層写真撮影、土層図作成。

12 月第 4 週：4 地区：土層写真撮影、床面清掃、縄文前期完掘状況写真撮影、5.6 地区：北壁精査、土層写真撮影、土層図作成、ベルト部分調査、遺物 dot 上げ。

12 月第 5 週：1.3 地区：縄文中期調査完了面下層の確認作業、5.6 地区：ベルト部分調査、遺物 dot 上げ、完掘、調査終了。

・資料整理の方法

資料整理は層、遺構図などは発掘調査に関する資料、出土遺物の注記作業、石器の一部を実測及び写真撮影については(株)パスコに業務委託した。

注記作業は整理作業を円滑且つ、正確にするため、遺物取り上げ番号、グリッド、遺構、取り上げ日時を表記した。（表記は例言に示した。）

資料整理は基本的には遺構・遺物の関係を確認し、関係が明瞭でないものは遺物の種類ごとに分類・集計を行い、主な遺物は図化した。

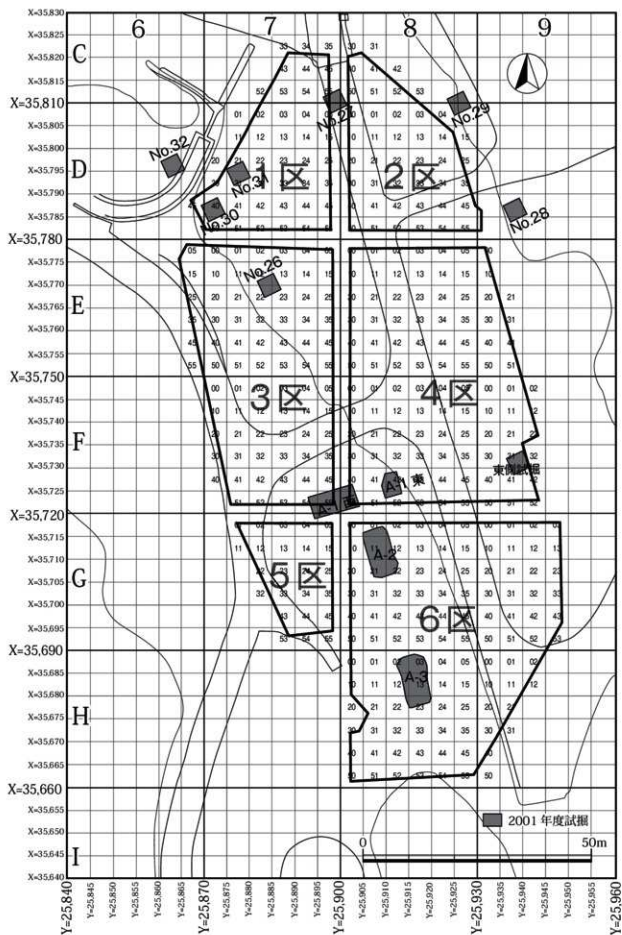
自然遺物のうち、脊椎動物遺体、貝類遺体、人骨については量が多いため、あらかじめ分類し、最終的にはそれぞれ専門の分野の先生方に同定及び原稿を依頼した。

土器は搬入土器も見られたので特徴を示す 3 点について胎土分析を試みた。

遺跡の年代を特定するため、炉址などの遺構や流木など ^{14}C 年代測定を行った。また、調査時に計測した出土遺物の座標値（約 1 万 3000 点）についても種類ごとに分布図を作成し、図示した遺物については観察一覧に座標値を示した。また、堆積学の観点からの遺跡の分析を依頼した。

出土遺物のうち土器は出土地を中心に接合を行い、その後、型式ごとに分類し、主なものは図化した。また、文様を主眼に、個数と重量を計測したが、破片の 2cm 以下はカウントから除外した。

チャートの破片も多く、グリッドごとに点数と重量を計測した。石器も多数で器種と石質、骨・貝製品については利用部位も意識し、模式図を加えた。



第2図 グリッド設定

第3節 層序

本遺跡の層序は、I～IV、Vs、V～X層の概ね11枚に分層される。

I層以外を概観すると、地上上やその周辺に東から西側へ厚さを減じて堆積する陸成シルト層(V・VI・IX)は、それとは逆の西側で厚く東側で薄い海成堆積層(Vs、VIII)によって失われるとみられ、さらに両者の上位に海成堆積層(IV)、陸成堆積層(II・III)が堆積する。陸成堆積層と海成堆積層が互層をなす様相が窺える。第3図にGライン基本層序略図、第4～6図にE・Gライン、8ラインの層序、第40図(第2分冊)に層序別遺物分布状況、巻首図版2・3・4に堆積状況を示す。以下、Gラインを基本層序として述べる。

I層：現表土、米軍基地建設・整備の造成客土。層厚約60～130cm。

II層：旧表土、旧耕作土(近世～近代)。総体的にはオリブ褐色混砂土層。層厚約20～80cm。

III層：暗褐色オリブシルト層や淡褐色混土砂層。層厚約14～40cm、窪み部分で厚い。ガスク時代以降。

IV層：海成砂層で、淡褐色や燈褐色や黄褐色、明黄褐色を呈する。層厚は約20～70cmと南西側に厚い。貝塚時代後期の文化層。

Vs層：枝サンゴ層。明黄褐色を呈する。層厚は約10～30cmで西側に厚い。V層の遺物を多量に含むがIV層の遺物も見られる二次堆積の遺物包含層(巻首図版6上)。

V層：陸成シルト細砂で、暗褐色、灰褐色、褐色または黄褐色を呈し東側でやや淡くなる。層厚は約20～30cmであるが、略レンズ状の厚い部分は約50～60cm。縄文時代中～後期の文化層。

VI層：上・下部に分けられ、Vs層とV層の下部にある粒子の細かい陸成シルト。やや平坦な部分では約40・60cm、地山付近では約70・80cmである。Vs層堆積範囲の東側下部にわずかに見られる部分で約9cm。

VII層：上・下部に分けられ、上部では淡黄白色粗砂から細かい貝殻破片や白色サンゴ砂利となり、下部では明黄褐色を呈し大量の枝サンゴ砂利に拳大や大型の礫が含まれる。細分される堆積は西側で約80cm、東側では約10～16cm。

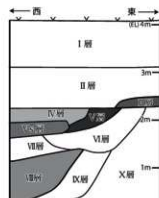
VIII層：青灰色枝サンゴ粗砂層。確認される層厚は約14～56cm。さらに下部へ続くと見られる。曾畑式土器が出土。

IX層：シルト層。上・下部に分けられ、上部の灰色、暗灰色を呈する流木を含むものと下部の灰色や黄灰色を呈するものに分かれる。4・6区東側のみで確認され、層厚は約25～60cm。

X層：地山。国頭マージと石灰岩岩盤。

I層は、赤土や旧表土による造成土で、暗褐色土、赤土、路盤材などに用いられるコーラルクラッシャーなどで整地を行った様子が窺える。赤土は、調査範囲の大半に見られるが6区南側で薄く、1区北西側、2区中央付近では旧表土による造成が目立つ。

基地建設・整備の様子を1945年8月撮影の米軍上陸後の写真資料でみると、集落の一部やその背後の耕作地は造成され軍用車両や物資などが並んでいる。1948年の地形図では、一帯に道路や建物等が整備されている。後者の頃の建物と見られるコンクリート製基礎杭や鉄製管の埋設溝などの掘削深度の深いものはV層に達している。2003年の基地返還以前は、米軍施設周辺の道路や芝生による緑地などが整備されていた。



第3図 Gライン基本層序

II層は、シルトや砂質的な様相も見られ細分可能である。細分される層面がやや不安定で、1・3・5区の西側に厚い。5・6区南側では薄い。1・2区ではV層に達する落込みやII層期と見られる攪乱があり、粗砂、炭、粒状粘質土などを含み北側ではカワニナを含む傾向がある。

3・5・6区では、IV層に達する溝状遺構などは、農耕に伴うと見られ、土地改変の様相が窺える。17世紀以降の遺物の出土範囲は、近世～近代の遺構や攪乱とほぼ重なり、戦前の民家近くの5・6区では、沖縄産陶器や赤瓦などが出土(第40図㉔)。

III層は、1・2・4区で標高約3.3m～3.5mで安定した水平堆積の様相を呈し、北西から南東方向にまたがる浅い窪みでは3枚に細分され、土色から上下の暗褐色の間に灰褐色の堆積が見られ北側でカワニナが目立つ。4区から続く6区北東隅で、地山が平坦に削平された直上の標高約3.5mの部分にも広がるが、4区南西側や5区には見られない。

1・2区北側でカワニナが目立つ様相は、II層にも見られるものでクシヌカーラ(河川)や農耕などに起因する可能性が想起される。本層出土遺物のうち15世紀以降の遺物の出土状況は、II層の遺物の出土範囲とほぼ重なる(第40図㉕)。

IV層は、Vs・V層の上位にまたがって堆積する海成砂層で、調査範囲内の大半に見られ、5・6区では標高約1.8m～2.3m、3・4区は2.4m～2.8m、1区では標高約3.1m～3.3mに堆積しており、1・2区北側や6区北東部では次第に薄くなる。1区では明黄褐色、5・6区南側の地山周辺では黄白色、5区の礫面周辺では黄褐色、淡褐色や燈褐色、3区では浅い黄色を呈し、浜屋原式土器、大当原式土器等が出土(第40図㉖)。弥生時代相当期(貝塚時代後期の文化層)。

3区で検出された土坑や溝状遺構に見られる切り合いには、複数の埋土(茶褐色混砂土や暗褐色混砂土)から人為的または自然現象を要因とする攪乱が生じたことが考えられる。本遺跡を北西から南東に縦断するように検出された溝状の窪みでは、茶褐色を呈する埋土の輪郭が不明瞭なものと、主に3区東側で検出された埋土の輪郭が明瞭で遺構下部の堆積がマール状土塊と砂が見られるものがあり、後者はII層期と考えられる。3区西側のIV層は、II層期の攪乱を受けている。

Vs層は、枝サンゴ、礫、粗砂の堆積で、主にV層の遺物を多量に含むがIV層の遺物も見られる二次堆積の遺物包含層。標高約1.6～2.2mで西側から東側に標高を増して堆積するが、5区南側では約1.4mと低くなる。堆積範囲は、第40図㉗に示したように3・5・6区、4区南西側に堆積し、V層が失われている。この堆積はV層が津波によって抉られた際のもものと見られている(註2)。

類似する陸地(砂丘)が失われるという様相が、本遺跡北側の伊礼原遺跡(註1)において縄文時代後期の住居址を巻き込んだと見られるものや貝塚時代後期の砂丘の消失は暴浪または高波などによって形成されたと見られており(註2)、出土遺物から前者の頃が想定される。

V層は、縄文時代中～後期の文化層。出土遺物は、室川下層式、面縄前庭式、船元Ⅱ式c類、仲泊式、面縄東洞式、嘉徳式土器等や石器、チャート、赤褐色を呈する礫等が出土し(第40図㉘)、1区南西側や3区北西側、6区中央部付近に遺物の集中部があり、6区では礫面が見られる。

堆積範囲は、Vs層堆積範囲の北・東側で標高約2～3.4mにかけて堆積し、6区北東・南側の地山付近で標高が高く、同区南西側では低くなる部分もある。地山付近で層厚が増すところもある。

1・3区境目のEライン周辺のV層は、やや黄褐色や暗褐色を呈する。面縄前庭式土器や仲泊式土器や面縄東洞式土器が出土するが、レベル差は僅かで層位的な違いは判然としない。

1区南西隅の試掘坑Na30(註3)では、仲泊式土器が標高約3mで一括出土しており、標高2.5m(註4)では室川下層式土器が出土している。

6区G8グリッドでV層(赤斑点の混じる灰黄色)の標高約2.9m前後で船元系土器が出土した。

同土器の出土をGライン壁面に当てはめると、Vs層が途切れた東側の9ライン付近で標高を増しながら東・南側へ広がりを有するV層にあたる。6区G9グリッド南側からH9グリッド北側では、黒茶褐色を呈する広がりが見られ、伸泊式土器などが出土する。

遺物を出土レベルで見ると、緩やかに南北方向と東西にうねる砂丘の様子が窺え、そのうねりの低い部分がG8ライン付近にあり、西側へ傾斜する様相が窺える。このうねりの低い部分は北西から南東方向に続いて見られる。

V層で検出された6区SX007(炉址)の¹⁴C年代測定は3180~3260B.P.(註5)である。3区SC003(第8図)は地山の国頭マージの土壌を巻き込んだ堆積と見られるVI層上面で検出されている。

VI層は、大別すると3・4・6区に見られる灰白色や淡黄色、黄白色、褐色を呈し粒子が細かく風成砂的な本層上部が地山付近にあり、3区のSD008(第17図)やその周辺に見られる溝状遺構等の周辺では、青みがかった黒色を呈する。上部のなかでも地山(国頭マージ)に接する部分では、地山の土壌を巻き込んだと見られる帯状をなす黄色粘土塊や染みこみ状のものを含む様相が顕著で、この特徴は面的な広がりも見られ、1・3区境目(Eライン)周辺にも確認される。風成砂的な堆積は地山に止められることで厚さを増していると思われ、この様子はV層にも見られる。

下部は、4・6区に広がりが確認される。場所によって土色に差があり暗黒褐色、暗灰黄色、明褐色となり、東側ではにぶい黄色を呈する粘質シルトで、地山に接する部分は上部と同様に地山の土塊などを含む。ラミナ状の堆積で、木片や軽石、明黄色の鉄分を含みIX層(Hb層)を巻き上げる様相が見られることなどから湿地的な堆積と推察される。

1・2区の境目のEラインでは、下位にあるVIII層との層理面が波状を呈する部分に暗灰色シルト塊が見られ東側にシルトの堆積があることから、湿地的な堆積範囲は4・6区側と考えられる。

VII層は、Vs層の下部からVI層下位にある。上部は貝殻片を含む粗砂層、下部は明黄褐色、明褐色を呈し拳大や大型の礫を含むサンゴ砂利層や白色サンゴ砂利層である。

6区G8-04グリッド西側で途切れ、東側には堆積しないが、4区東壁北側では白色サンゴ砂利層が確認され、10cm大の礫を若干含み上部に約40~50cm大の礫が見られる。

VIII層の青灰色枝サンゴ粗砂層は、6区G9グリッドから東側には見られないが、1・4区で確認されることから、内陸側となる北・北東側に広がりを有していると見られる。本層上面の標高は約0.8m~1.8mで西から東へ標高を増す。

4区で、曾畑式土器(¹⁴C年代測定は4790±40B.P.(註6))の出土が目立つ(第40図㉓)。本層下部では大型シャコガイも見られ、同様な傾向は伊礼原遺跡(註1)にも見られる。

IX層は、上部のG・Hb層は流木などを含む暗灰色粘質シルト層で泥炭層的である。Hb層出土の流木サンプルによる分析年代は6050±40B.P.である。下部のI層は灰色を呈し、やや粗く、J層は黄灰色を呈し粘質で細かく、地山の土壌を多く含む様相が見られる。

X層は、地山(国頭マージ)で、5・6区境や6区南東側では間合いをおいて検出され、6区南側では基盤の石灰岩を伴った広がりを有しており、概ね北・西側へ緩やかに傾斜するが、強く傾斜するところも見られる。6区南側の石灰岩基盤ではポットホールが確認される。

<引用文献>

(註1) 中村憲(編)2007『伊礼原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第26集 北谷町教育委員会

(註2) 松田順一郎氏の見解による。

(註3) 松原哲志・鳥袋春美(編)2008『旧ロジック試掘 no.26・30・32』『伊礼原B遺跡 伊礼原E遺跡』北谷町文化財調査報告書 第27集 北谷町教育委員会

(註4) 註3の調査時の記録写真や柱状土層図の検証による。

(註5) 第IV章第6節を参照。

(註6) 第IV章第6節を参照。



①



②



③



④



⑤



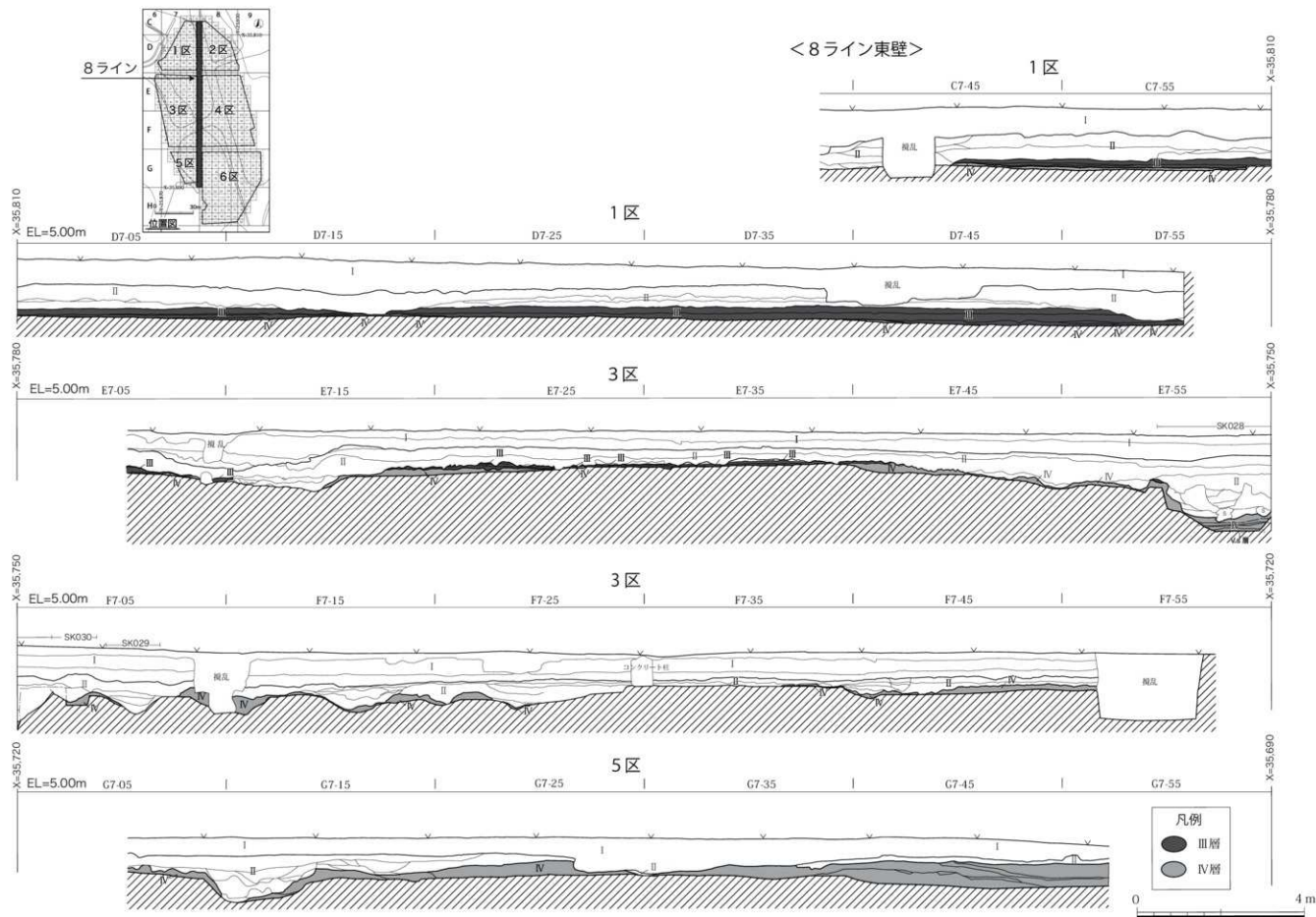
⑥



⑦

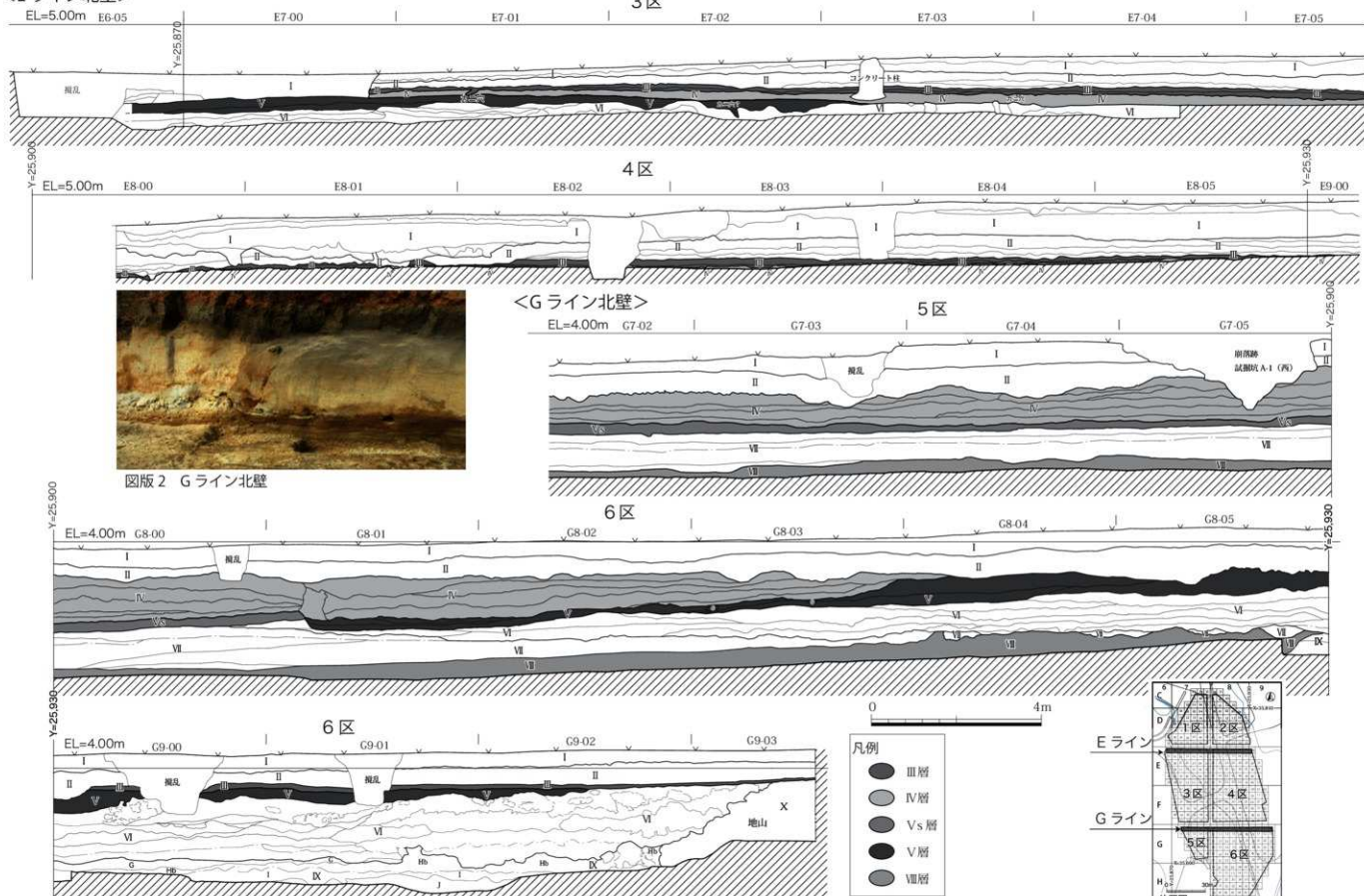
- ①重機による清掃
- ②人力による清掃
- ③清掃後の壁面
- ④塗料材塗布
- ⑤塗布完了
- ⑥剥ぎ取り
- ⑦重機による回収

図版1 層剥ぎ取り作業



第4図 層序 (1) 8ライン東壁(Ⅰ～Ⅳ層まで)

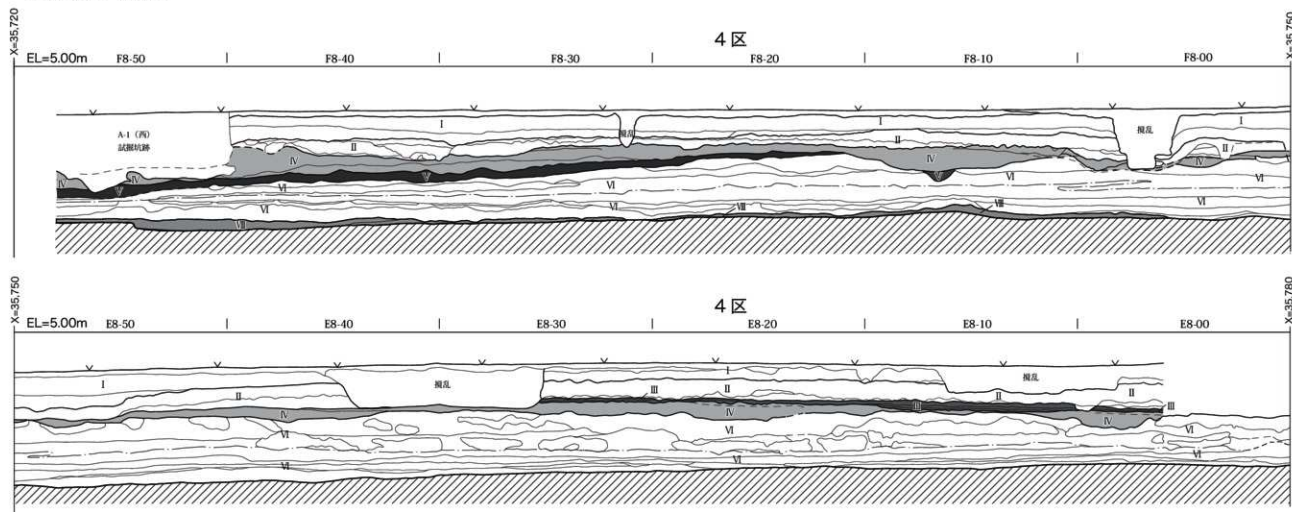
<Eライン北壁>



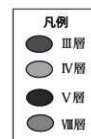
図版2 Gライン北壁

第5図 層序(2) E・Gライン北壁

< 8 ライン 西壁 >

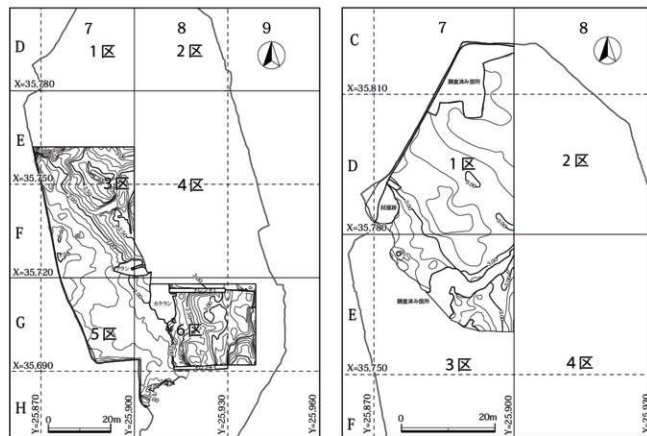


図版 3 4 区西壁 E8-50、F8-00・10・20・30・40・50



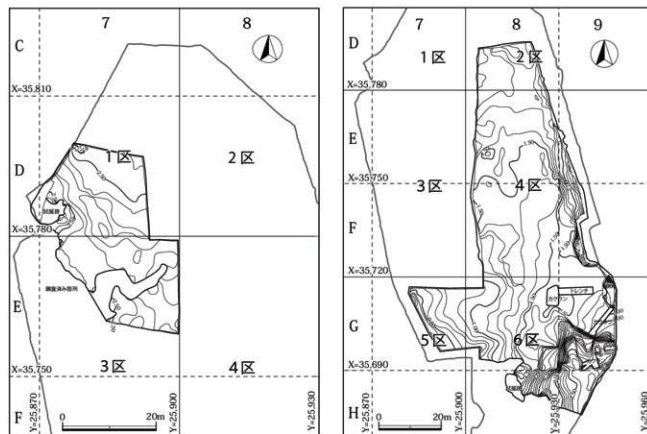
8 ライン西壁

第 6 図 層序 (3) 8 ライン (4 区) 西壁



㊦ V層上位

㊧ V層中位



㊨ V層下位

㊩ VII層

第7図 時代別地形の推移

第4節 遺構

本遺跡からは、柵列状遺構、炉址、石組遺構、溝のほか、性格不明のピットや土坑等が確認された。調査区の面積は8,850㎡と広範囲であるが、遺構のほとんどは、調査区の北西—南東ラインに集中している。この事は、砂丘が東側から西側へ順次が形成されていき、海岸線と平行に遺構が分布していたものと考えられる。また、調査区南端に見られる石灰岩基盤の北側には、石灰岩で構成される礫群が砂丘の海側斜面に堆積している様相が確認できた。これらの礫群は少なくとも3面見られ、基盤より剥がれ落ちたものか、何らかの要因で運ばれてきたものが基盤付近に集積しているのかは不明であるが、自然堆積によるものと考えられる。後述するSX007は、この礫群を取り除いた直下から検出されている。縄文前期・晩期の遺構は検出されておらず、後代に消失したか、遺跡より東側の丘陵付近に立地している可能性が考えられる。以下に主な遺構について略述する。

1. 縄文時代

(1) 柵列状遺構 (第8図)

調査時にSC003の遺構番号を当てていた遺構で、3区E7-11グリッドを中心に標高約2.8mの黄色粘土層より、直径約15cm前後の円形のピット群が弧状を呈し検出された。各ピットの深さは5~15cmを測り、覆土には炭や明黄褐色の鉄分を含むものも確認され、全体的に締まりの良い黒色シルトを呈する。隣接するE7-11の南西側は緩傾斜を呈し、北東側はやや高くなる(高低差10~20cm)。弧状を成すピット群は、あたかも境界を示すように高くなり端部に位置し、それぞれの直径が小さく浅い事から、住居址の一部とは考えにくい。柵列状遺構と判断した。各ピットの間隔は、狭い所で約20~40cm、広い所で70~80cmである。E7-11グリッド周辺からは、標高2.8~3.0mにかけてのプライマリーな層から面縄前庭式土器(第49図5)や仲泊式土器(第56図1)が得られている事から、本遺構は縄文中期に相当するものと考えられる。以下に、各ピットの計測値を示す。

第1表 柵列状遺構 各ピットの計測値

ピット番号	139	140	144	148	149	150	151	152	153	154	155
長径(cm)	43	14	17	18	16	19	15	13	16	16	17
短径(cm)	20	14	14	16	13	16	13	12	14	13	15
深さ(cm)	12	7	6	4	9	15	8	6	10	7	7

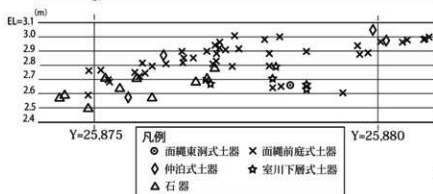
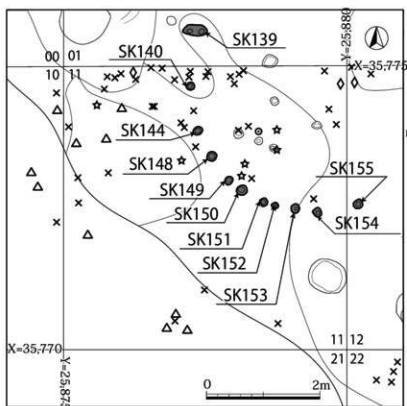
(2) 炉址 (第9図)

調査時にSX007の遺構番号を当てていた遺構で、6区G8-53グリッド標高約3.0mの黄色砂層から検出された。長軸約3.8m、短軸約2.7mの楕円状でほぼ全面に石灰岩礫を伴う。遺構を構成している礫のサイズは、拳大のものから40~50cm大のもの様々で、大きいものほど遺構の周縁部に集中している。礫は淡黄色を呈するものも見られるが、ほとんどは火を受けたことにより淡灰色、若しくは淡赤褐色を呈する。遺構断面形は碗状を呈し、碗状底部はやや平たく、やや大きめな礫が立ち上がり弧状を呈する。内部に充填されている礫の規則性は見受けられなかった。完掘時の深さは検出面から約60cm程であった。遺構覆土の特徴を以下に記す。

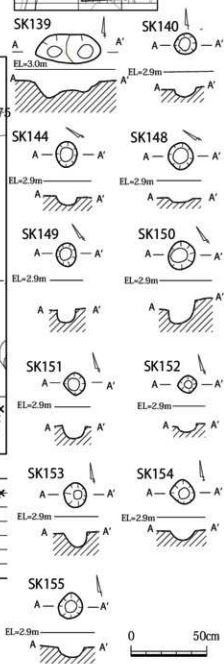


図版4 柵列状遺構検出状況(南東より)

位置図



- 凡例
- 面縄東洞式土器
 - × 面縄前底式土器
 - ◇ 伸泊式土器
 - ☆ 室川下層式土器
 - △ 石器



第8図 縄文中期の柵列状遺構平面・断面 (SC003)

- 1層 (灰白色細粒砂層) 炉の上部に堆積する層。小型の貝殻やその小破片を含む。粘性は無く締まりは弱い。
- 2層 (灰黄褐色細粒砂層) 炉の中心部だけに堆積する層。砕けた礫の一部と思われる白い粒状の塊が全体に見られる他、砕けた炭の一部と思われる黒い塊が少量見られる。1層に比べ砂粒がやや大きく、ポロポロした感触である。粘性は無く締まりは弱い。
- 3層 (黒褐色細粒砂層) 敷石を覆う様に堆積し、多量の炭の他、砕けた礫の小破片や焼土塊を含み、炉の外縁寄りに拡がる。同層より炭のサンプルを採取したところ補正年代は3220±40であった。粘性は無く全体的に締まりは弱い。サラサラした感触。

遺構内覆土からは、土器や石器などの人工遺物はほとんど確認できなかったが、僅かに土器小片が出土している。自然遺物として、大小様々な自然礫や焼土、炭化物、小型の貝殻及び少量の獣骨が確認された。遺構外出土遺物としては、遺構検出面とほぼ同じレベルから船元系土器や面縄前庭式土器が確認された。上記の状況から調査当初、縄文前期～中期に相当する遺構かと考えられたが、遺構内より採取した炭のサンプル資料より縄文後期の年代が得られた。

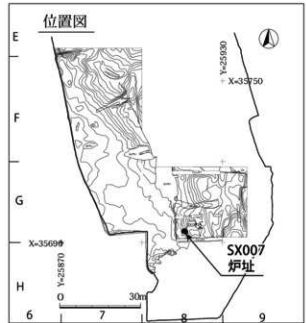
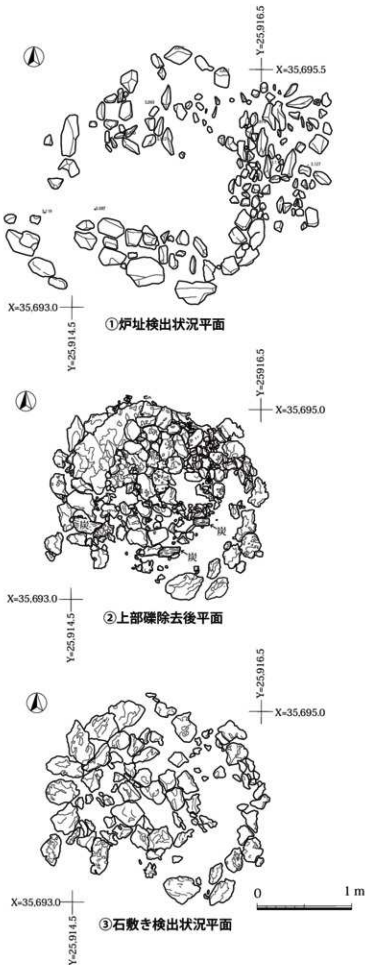
本遺構は、遺構覆土より焼土や炭化物が検出され、遺構周辺には柱穴等の付随遺構が確認されなかったことから、屋外炉の可能性が考えられる。本炉址の直下より人骨が出土している事と、他に散乱して確認された人骨には火を受けたと考えられるものが含まれていることから、炉の用途については留意する必要がある。

遺構の形成方法は、砂丘地の自然の落ち込みを利用したのか、人為的に碗状の堀込みを行ったのか不明であるが、窪地の底に比較的扁平な礫を敷き、立ち上がり部分に沿ってやや大型の礫を配石した事が窺える。その為、断面形状は弧状を呈する。断面図A-Aは、上部礫除去後の焼土集中状況を図化し、B-Bは、礫を除去した状況図である。礫が確認できる層よりも下部を駄目押しで掘ってみたところ、周辺とはやや異なる堆積層が確認された。この堆積層は、本遺構を形成する際の人為的な堀込みによる可能性も考えられたが、ブロック状の堆積物などが確認できなかったため断定するには至らなかった。

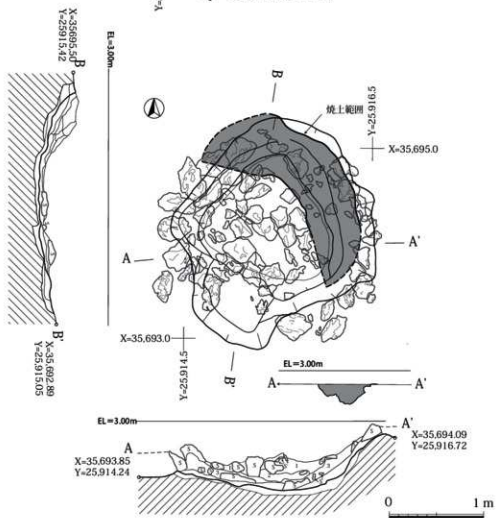
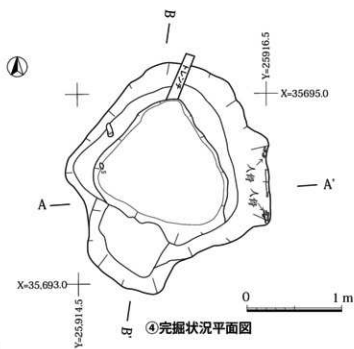
本遺構の類別資料として、うるま市(旧石川市)古我地原貝塚(1987)にて21地区の第1号遺構が挙げられる。1号遺構は検出時2.8m×1.9mを測り、黒色土(Ⅱ層)を取り除くと石灰岩礫が1.8m×1.7mの楕円状に凝集して検出された。礫除去下には、厚さ5cmほどの焼土が検出され、更にその下層は地山である岩盤が露出している。また、Ⅱ層上面からは、伊波式土器や石斧、磨石等の人工遺物が出土している。遺構の性格として、火を使用する施設が想定されている。伊礼原E遺跡の炉址(SX007)に比べると、古我地原貝塚第1号遺構は長軸、短軸ともに1m程度小さくなる。第1号遺構は丘陵地の岩盤直上に形成されており、本遺跡では砂丘上にて確認された点と、遺構覆土より遺構年代を示し得る人工遺物が出土している点で大きく異なる。また、同じく古我地原貝塚22地区区にて確認されている遺構群は、火を使う場所であると想定されており、中でも4号遺構(竪穴遺構)は、敷石は認められないが遺構内壁面に多量の焼土が貼りついており、興味深い遺構である。

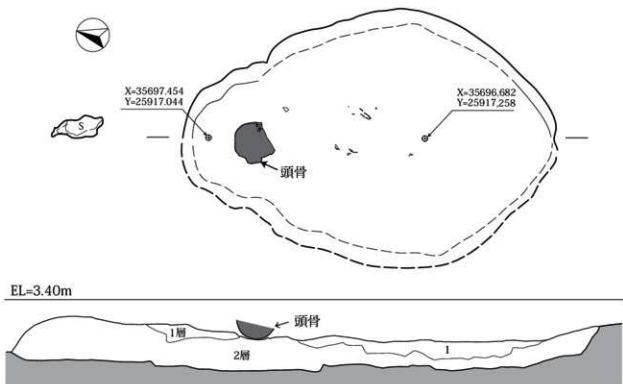
(3) 埋葬人骨(第10・11図)

本遺跡からは人骨が数体分出土しているが、全体を窺える資料はなく、遺構プランも判然としない。ここでは、比較的まとまって検出されたSX008とSX014について紹介する。(第IV章第4節参照) SX008(第10図)は、6区G8-43グリッド標高約3.3mのV層平面清掃中に頭骨の一部が検出された。プランは確認できなかったが、頭骨の検出状況より周辺からも人骨片が検出されることを想定し掘削作業を行った。掘削後、部位不明の小骨片が散乱した状態で出土したが、関節している状態では確認されなかった。埋葬時の位置を保っている可能性は低いものと考えられる。以下に断面観察の特徴を示す。



第9図 SX007 炉址平面・断面 (①～④は炉址の検出過程)





第10図 SX008平面・断面



図版7 頭骨検出状況



図版8 SX008掘削状況



図版9 人骨取上げ作業状況

< 平面図 >

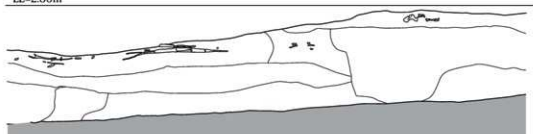


Y=25,916.200
X=35,694.400



< 断面図 >

EL=2.80m



第 11 図 SX014 人骨検出状況平面・見通し断面



図版 10 人骨検出状況



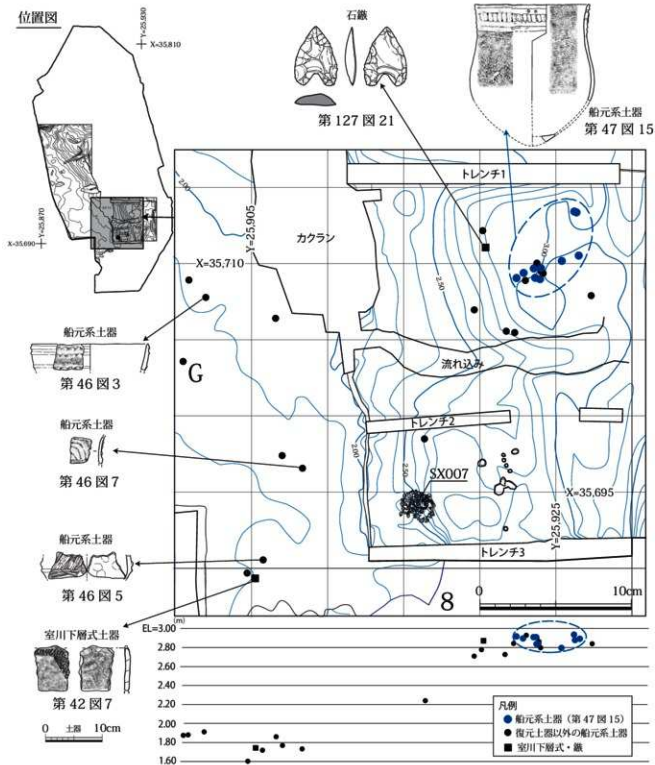
図版 11 右大腿骨



図版 12 下顎骨



図版 13 人骨取上げ作業状況



図版14 石鏃出土



図版15 船元系土器一括出土

第12図 一括土器（船元系土器）出土状況（G8）

- 1層 黄褐色砂 (10YR5/6)。粘性無し。締まり弱い。固さ弱い。微量なサンゴ・貝殻片を僅かに含む。粒子は細かく風成砂と思われる。
- 2層 明黄褐色砂 (10YR7/6)。粘性無し。締まり弱い。固さやや弱い。粒子は細かく風成砂と思われる。

SX014 (第11図)は、6区G8-53グリッド標高約2.8mのV層から検出された。SX007 (炉)を構成している礫や覆土の除去後、東側法肩に沿って右大腿骨片が確認されたことから、SX007とほぼ同時期か、より古くなる。SX008同様プランは確認できなかったが、周辺からも人骨片が検出されることを想定し掘削作業を行った。掘削後、部位不明の小骨片や下顎骨片が1.2mの範囲内で出土した。このことから、ある程度現位置を保っているものと考えられるが、関節しているものは確認されなかった。おそらくは、SX007形成時にその大部分は散失したと思われる。断面を見ると、白色のシルトをベースに、褐色味を帯びた緩やかな起伏が部分的に見られる。全体的に締まりは弱く、粒子が細かいので風成砂と思われる。SX008及びSX014の人骨は、それぞれ熟年、成年、と年齢差にやや幅はあるが、共に女性であり、近距離 (5m)にて検出されているため、同一個体の可能性も考えられる。検出された人骨の調査手法については、琉球大学医学部の土肥直美教授から御指導戴いた。

(4) 一括土器 (第12図)

第12図は船元系土器 (第47図15) の一括出土の状況 (6区G8-24V層) を示したものである。近くからは石籬の素材としては珍しい輝緑岩製石籬が検出された。石籬の形状も二辺が弧状に膨らむもので、これまで報告されたものとは異なることから船元系土器と共に移入されたと考えられる。また、チャートも多く得られ (巻首図版11)、南側 (G8-53) には炉址 (SX007) も検出されていることから、縄文中期の生活面と捉えられる。また、西側のEL=1.6~1.9m (Vs層) でも第46図5のようなキャリパー型の船元Ⅱ式C土器が出土することから、東西の出土遺物の高低差は「船元系土器」の移入後に高波があったことを示すものである。

2. 貝塚時代後期

(1) 集石遺構 (第13図)

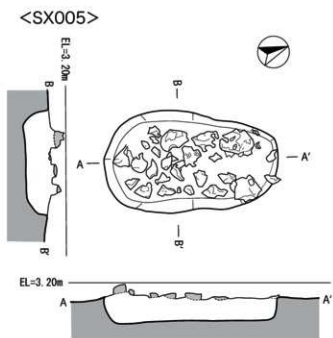
調査時にSX005、SX006の遺構番号を当てていた遺構で、上部には扁平な礫が集まり人為的な様相を示していることから、検出時に配石墓と捉え調査を行った。しかし遺構覆土からは人工遺物や人骨は出土しなかったため、性格は判然としない。SX005、006とも様相が類似しているため、詳細については一括で説明し、出土地や計測値等は第2表に示した。

検出された礫のサイズは10~40cm大の淡黄色を呈する石灰岩で、板状サンゴやサンゴ塊、ビーチロックなどは見られなかった。掘込みプランの判別が非常に困難で、覆土は粒子が非常に細かい黄色細砂の単層を呈し、粘性は無く締まりは弱い。遺構内部からサンゴ砂利やシャコガイ等の貝類は見られなかった。遺構外出土遺物として、検出面とほぼ同じレベルから弥生相当期の土器が出土していることから、当該期に相当するものと考えられる。長短軸及び深さの数値は、読谷村木綿原遺跡 (1978) から検出された配石墓に近似する。

掘削後、部位不明の小骨片が散乱した状態で出土したが、関節している状態では確認されなかった。埋葬時の位置を保っている可能性は低いものと考えられる。以下に断面観察の特徴を示す。

第2表 集石遺構計測値

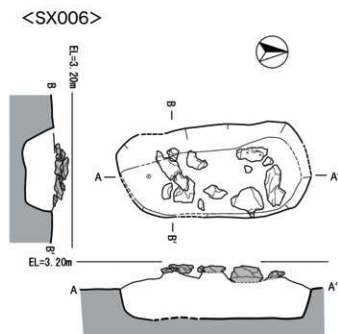
遺構 No.	出土地	長軸	短軸	深さ	長軸方位	平面観	断面観	出土遺物
SX005	G8-44	1.8m	1.1m	0.3m	N20° E	隅丸方形	長方形	無し
SX006	G8-44・54	2.0m	0.9m	0.5m	N0° E	隅丸方形	長方形	無し



図版16 SX005検出状況



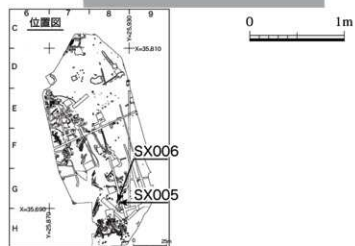
図版17 SX005掘削状況



図版18 SX006検出状況



図版19 SX006掘削状況



第13図 SX005・SX006平面・断面

3. 近世・近代遺構

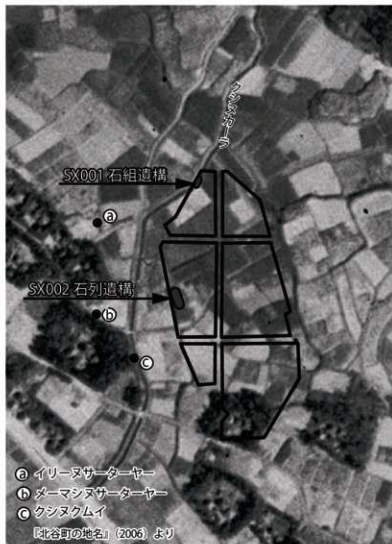
本遺跡で検出された近世・近代の遺構の主なものは、1区のSX001、3区のSX002である。後者の周辺には、溝状・窪み状を呈する痕跡があり5・6区への拡がりが見られる。戦前の一帯は耕作地が広がっており、その様子を図版20で見ると6区のH8グリッドは戦前の屋敷付近に当たり、両遺構の西側には、クシヌカーラと称される河川がある。以下、それぞれについて述べる。

(1) SX001

SX001（石組遺構）とそれに関連すると考えられる木杭が周辺で検出されている。以下両者について述べる。

A 石組遺構（SX001）（第15図）

本遺構は、1区C7-43・52・53グリッドにまたがる。縦5m、横2mの略長方形を呈する範囲にあり、長軸を北東から南西方向に向け、約30cmの高低差で下る敷石と側壁を組み合わせた階段状を呈する。敷石は約35～40cm大、側壁は1段目を40～50cm大、2～3段目が20～30cm大の石積である。石灰岩を用いた本遺構は木杭を伴っており、直径5～10cm程度の木杭の列が中央部付近から南西側で側壁状の石列に直交する並びの2列、敷石の隙間で同様な並びとなるものの合計3列が約1.1m間隔で検出された。各木杭の列での間隔は狭いものが3cm程度、やや間合いを置くものが15～20cm程度で、前者は15本、後者は7本と4本があり、本遺構のなかで低い部分の敷石の間や傾斜部の下場に位置する。



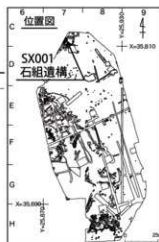
図版20 戦前の集落と調査区・遺構の位置



第14図 SX001 石組遺構の位置



図版 21 SX001 石組遺構 (北より)



図版 22 SX001 石組検出状況 (南西より)



図版 23 SX001 石組検出状況 (南東より)

第 15 図 SX001 石組遺構平面・断面

本遺構がある第14図に示した半円状の範囲内の堆積は周辺と異なり、Ⅱ層が崩落したと考えられる状態の土塊と粗砂、砂利などを含む不安定な堆積である。これは、西側へ深さを増す傾斜地に堆積しており、水の流れに起因する浸食と堆積が生じた範囲と考えられ、本遺構が1区の北壁西側を流れるクシヌカーラ（小川）(註1)に近い位置にあることから窺える。

河川側に位置する立地や周辺の不安定な堆積状況から、本遺構は、木杭によるズレ防止を施して構築された水場施設と考えられる。

中央部附近の木杭の列から北東側と調査区壁面側では石組が乱れており本来は調査区外（西側）に続くものと思われる。石敷部分の上面からは、戦時中の銃弾や鉄製品などが出土しており、近世～近代の遺構と判断される

B 木杭

木杭は、S X 001の北東にあたる1区のC 7-34・43・44・52、D 7-02グリッドで検出された。前者はS X 001の側壁石積から約4.8m北東側の延長線上で直列する9本の木杭、後者はS X 001の約3m南西側の調査区壁面で、同方向に乱れて傾く5本と西側に深くなる窪みの斜面に直立する2本の合計16本である（第15図）。

いずれも、検出位置はS X 001に近いが、石組みは見られない。直列する9本の木杭は、2本の杭の間に間隔を狭めた3本が配される合間となる。窪みで検出された7本の木杭は、S X 001（石組遺構）内と同様な性格を有するものと思われる。

杭が打ち込まれた黄褐色土の下位の堆積は、河川の氾濫等によるものと見られる不安定な堆積であることから、ある程度安定していた頃に打ち込まれたものと見られる。



図版 24 石組遺構と木杭検出状況 (C7-43)



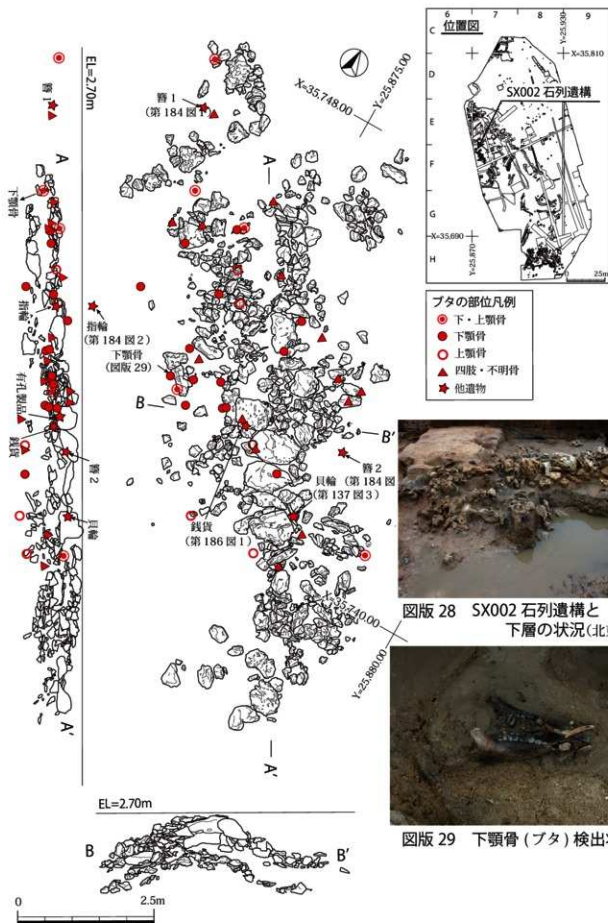
図版 26 木杭検出状況 (D7-02)



図版 25 石組遺構と木杭検出状況 (C7-52)



図版 27 木杭検出状況 (D7-02 西壁)



図版 28 SX002 石列遺構と下層の状況(北東より)



図版 29 下顎骨(ブタ)検出状況

第16図 SX002石列遺構(遺物分布)平面・側面

(2) SX002

A 石列遺構 (第16図)

本遺構は、3区F7-00・01、10~12、20~22で調査区西側に続く約20㎡の大きな落ち込み内で検出された。長さ約12m、幅約2mで直線状に並ぶ石列で、その軸が北西から南東方向にあり高低差約20cmで北西側に下る状態で検出された。

石列は、約80cm大の石灰岩礫が連続し、その周辺に20~30cm大の扁平な石灰岩小礫が同様な方向にまとまる。

前者は平坦な上面が東側にやや傾くもの、その並びの反対側に寄りかかる状態で平坦面が西側に向くもの、平坦面の少ない塊状のものが見られる。石灰岩小礫についても類似する傾向が見受けられるが乱れたものもある。

本遺構が検出された落ち込みは、深さ約1m、その斜面が主に西側に傾斜し、水の流れに起因する侵蝕と堆積が見られ、下位の堆積は暗褐色土層と暗灰色砂層が互層をなし、それを挟むⅡ層(褐色土層)が上位に堆積することから、本遺構は前者の堆積後に構築されたと思われる。

このSX002の南側には、同一方向につづくⅡ層(褐色土層)が埋土の幅約50cm、深さ約15~30cmの溝状の窪みがF7-23・33にあり、F7-42・43で西側に向きを変えるもの、F7-02に見られる溝状・窪み状を呈する痕跡が検出されることから周辺からの流水や土砂の流れ込みが窺われる。本遺跡の検出状況や遺物の出土状況から、SX002に伴う落ち込みは、近世~近代、それ以前にも水流によって挟られた部分と判断される。

本遺構に伴ってブタの上・下顎骨、四肢骨の出土が目立ち、簪、指輪、銭貨等も見られる。その多くは標高約2m前後で出土する。ブタの骨に刃物等の加工痕は見られず、ブタ下顎骨の歯による放射性炭素年代測定の結果は160±30BP(註2)であった。また、沖縄産施釉・無釉陶器等も出土し、SX002に伴う落ち込みからは、貝輪・チャートが1点出土している。

本遺構の性格については、土留めの可能性、本遺跡に近い伊礼原D遺跡(註3)に見られる水路址の周辺に見られる石敷や石列に類似すると思われる。

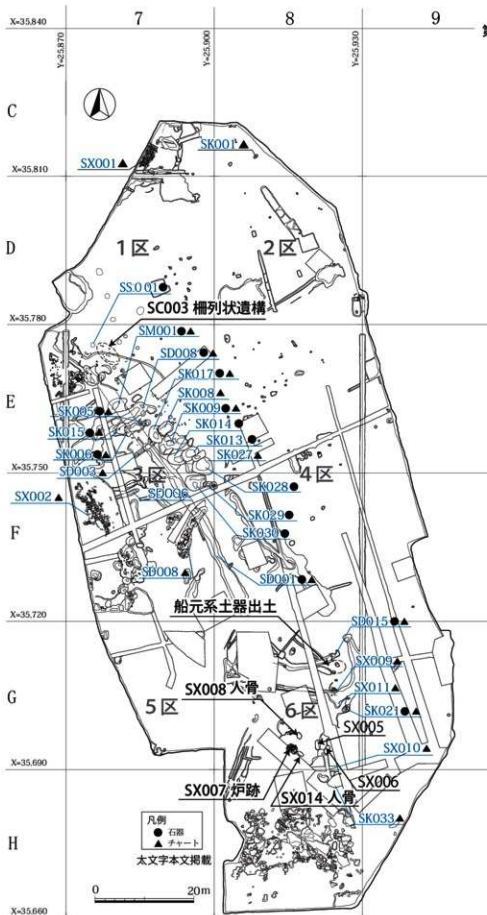
註1：『北谷町の地名』北谷町文化財調査報告書第24集 2006年3月

註2：本報告書、第IV章第7節 放射性炭素年代測定

註3：『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書第28集 2008年3月



図版30 SX002 石列遺構検出状況と作業風景 (南より)



第3表 石器・チャート一覧

遺構no.	グリッド	品類
SK001	C8-51	チャート石片
SK005	E7-33	チャート割片・石片
	E7-43	磨石
SK006	E7-42	磨石
		チャート割片
SK008	E7-44	チャート石片
	E7-43	石片
		石片
SK009	E7-44	磨石
		チャート石片
SK013	E7-54	扁平状磨石
		磨石
SK014	E7-54	磨石
	E7-41	石片
SK015	E7-42	石片
		小型磨石
		磨石
SK017	E7-43	チャート割片・磨石
		磨石
SK021	C8-35	U Flake
		チャート塊
SK027	E7-55	チャート割片
SK028	E7-55	大型短刃石片
		短刃石片
SK029	F7-05	細片刃石片
		磨石
SK030	F7-05	石片
SK033	I8-05	チャート割片
	E7-32	磨石
SD001	E7-42	小型磨石
		チャート・スクレイパー
SD003	E7-32	チャート石片
SD006	F7-02	チャート石片
	E7-31	二次製品
SD008	E7-32	磨石
		石片
	E7-32	チャート・磨石石器
SD008	E7-41	チャート・U Flake
	E7-32	チャート割片・磨石片
		石片
SD015	C8-14	磨石
		チャート割片・磨
	E7-31	打製石片
		小型短刃石片
SM001	E7-32	小型石塊
		小型磨石
	E7-31・32	チャート割片・石片
SS001	E7-01	磨石
SN001	C7-53	チャート石片
SN002	F7-10	チャート割片
SN009	C8-24	チャート割片・石片
		磨石
SX010	I8-04	チャート・U Flake
		チャート割片
SX011	C8-34	チャート石片

詳細は2分冊第Ⅲ章5節2参照

遺構名凡例

- SK 土塊
- SD 溝・河川
- SM その他の遺構
- SK 炭粒
- SS 貝殻

第17図 遺構配置及び石器・チャートの関係

第IV章 理化学的分析

第1節 南九州からみた伊礼原E遺跡出土土器の位置づけ

相美伊久雄（鹿児島県志布志市教育委員会）

はじめに

筆者は北谷町教育委員会のご高配により、伊礼原E遺跡出土土器を実見する機会を得た。実見した資料は九州本土の縄文時代中期土器と考えられるもので、以下、所見を報告しておきたい。

1. 各土器について

船元系土器とされた土器群は大きく3つに分類できる。ここでは仮に1～3類としておく。1類は第46図1・3・7・10・第47図18・24であり、南九州の縄文中期初頭～前葉に位置づけられる条痕文土器（相美2006）に比定できる。

第46図1・3は口縁部に突帯を貼付し、突帯上を指で押圧することで、突帯が小刻みな波状を呈する。第46図7・10は突帯の貼付方法や胎土から条痕文土器に比定できる。無文の胴部片である第47図24は胎土・色調から第46図1などと同一個体と考えられる。同様に第47図18は第46図3と同一個体と考えられる。

2類は第46図4・5・6・8・14第47図17である。そのうち、第46図5以外は同一個体と考えられ、キャリパー状口縁を呈し、頸部で緩やかに締まるものである。外面全体に突帯を幾何学的に施しており、突帯以外に文様を付加しない。不明瞭ながら外面に縄文(RL?)が認められる。以上の特徴から、中期前葉の船元Ⅱ式C類（田壁1971）に比定できる。なお、胎土に輝石・角閃石類が目立つ。

第46図5もキャリパー状口縁を呈し、突帯を貼付するものである。船元Ⅱ式C類に比定できる。前者と異なり、胎土に石英・長石類が目立つ。

3類は第47図15である。口縁部が外反し、頸部で緩やかに締まる器形を呈する。口縁部外面に突帯のみで窓枠状の文様を施す。地文に撚りの粗い縄文(RL)を施す。以上の特徴から、3類も船元Ⅱ式C類に比定できる。なお、胎土には砂粒が目立つ。

2. 小結

1～3類はほぼ同時期のものと考えられ、縄文中期前葉（その中でも中葉により近い時期）に位置づけられる。

条痕文土器とした1類は、南九州のものと同様・胎土等の違和感はない。突帯上を指で押圧する施文手法を用いた土器は屋久島町一湊松山遺跡（出口・繁昌1981）や南さつま市上水流遺跡¹⁾で認められている（第19図1）。

船元Ⅱ式C類は、泉拓良氏の編年によれば船元Ⅱ式2期に相当するもので（泉2008）、船元Ⅱ式の中でも船元Ⅲ式により近い様相を示すものである。

南九州では南さつま市上焼田遺跡（宮下他2003）・曾於市唐尾遺跡（彌栄・福永2008）・西之表市下剝峯遺跡（新東・立神1978）・一湊松山遺跡でみられる（第19図3～8）。これらは胎土の特徴から、搬入品と考えられている。南九州以外では、福岡県鞍手町新延貝塚（木村1980・小池1995）・福岡県芦屋町山鹿貝塚資料（永井他1972）・佐賀市西畑瀬遺跡（渋谷2009）・長崎県小値賀町野首遺跡（塚原2003）・大分県豊後大野市惣田遺跡（玉永1983）・宮崎県高鍋町下耳切第3遺跡（今堀屋2006）などで、類似した文様モチーフをもつものが認められる（第19図9～17）。

2a類は胎土に輝石・角閃石類が、2b類は石英・長石類がそれぞれ目立つことから、ともに南九州のものではない可能性が高い。具体的にどの地域のものかをはっきり述べることは難しいが、2a類は

中九州、2b類は西北九州の可能性を指摘しておきたい²⁾。

3類は窓枠状の文様モチーフが特徴的である。口縁部形態は異なるものの、山鹿貝塚資料と酷似する。なお、九州本土内で認められる船元Ⅱ式C類は四角形状のモチーフを持つことが多いようである。2類同様、3類は胎土から判断すると南九州ものではない可能性が高い。

ちなみに、宮崎市右葛ヶ迫遺跡(日高・久木田 2000)では同様のモチーフをもつ野久尾式が認められる(第2図2)。この資料は口縁部内面にヘラ状工具による刺突文列を施すことから船元Ⅱ式との関係が指摘されていたが(相美 2006)、文様モチーフからも船元Ⅱ式との関係を窺わせる。

1～3類は全て九州本土からの搬入品と考えられることから、縄文中期前葉においても九州本土と一定の関係があったことになる。

なお、本遺跡確認調査時のA-3トレンチでも縄文施文土器(第19図18)が出土しており(松原・島袋編 2008)、船元Ⅱ式に比定できそうである。本調査出土資料も含めて、沖縄諸島において縄文施文土器が確認されたのは、伊礼原E遺跡が初例である。

これまで沖永良部島知名町神野貝塚(高宮他 1985)において中期後葉の春日式前谷段階の縄文施文土器が認められていたが(第19図19)、その南限が下ったことになる。また、西日本一帯に分布する船元Ⅱ式が、沖縄諸島にも分布していたことが確認されたことにもなる。

3. 今後の課題

上述したように、本遺跡から出土した条痕文土器や船元Ⅱ式C類は全て搬入品と考えられる。また、南九州の中期初頭～前葉に位置づけられている野久尾式に比定できる資料が那覇市鏡水箕隅原C遺跡で出土している(那覇市教委 2008)。

すると、それらに伴う在地の土器が問題となる。縄文中期相当の前Ⅲ期には面縄前庭式が位置づけられている。一方、伊藤慎二氏(伊藤 2008)や筆者(相美 2010)は前Ⅱ期に位置づけられている室川下層式を想定している(第18図参照)。実際のところ、面縄前庭式なのか、室川下層式なのか、あるいは条痕文土器など他の土器なのか…今後検討しなければならない大きな課題であろう。

鷹島式～船元Ⅱ式が広域に分布するなど、縄文中期初頭～前葉の時期は西日本を超えた範囲で広域的な動きが認められるが、その社会的背景を追求する上で編年観の確立は欠かせない。その意味でも、伊礼原E遺跡資料は沖縄諸島と九州本土との併行関係を考える上で重要である。

《註》

- 1) 鹿児島県立埋蔵文化財センターによる本調査において出土している(今年度報告書刊行予定)。
- 2) 実体顕微鏡の内眼観察による推定である。今後、理科学的な胎土分析を試みることも一つの方法であろう。

《引用文献》

- 泉拓良 2008『鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器』『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
 伊藤慎二 2008『琉球縄文土器(前期)』『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会
 今堀屋製行(編)2006『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 125
 木村幾多郎(編)1980『新延貝塚』鞍手町埋蔵文化財調査会
 小池史哲(編)1995『新延貝塚』福岡県文化財調査報告書 122 福岡県教育委員会
 相美伊久雄 2006「条痕土器と縄文施文土器—南九州における縄文時代前期末～中期前葉土器群の再整理—」『大河』8 大河同人
 相美伊久雄 2010「九州南部における中期前葉土器の現状と課題」『九州の縄文時代中期土器を考える』
 第20回九州縄文研究会佐賀大会発表要旨・資料集
 渋谷格(編)2009『西畑瀬遺跡2・大串遺跡』佐賀県文化財調査報告書 180 佐賀県教育委員会
 新東晃一・立神次郎 1978『赤木・下洞峯・大四郎・内和遺跡』鹿児島県西之表市教育委員会
 塚原博(編)2003『野首遺跡』小値賀町文化財調査報告書 17 長崎県小値賀町教育委員会
 高宮廣衛他 1985「沖永良部島神野貝塚発掘調査概報(その1)」『沖国大考古』7 沖縄国際大学文学部
 考古学研究室
 玉永光洋(編)1983『惣田遺跡 三重地区遺跡群発掘調査概要』三重町教育委員会
 出口浩・繁昌正幸 1981『一湊松山遺跡』鹿児島県上屋久町教育委員会
 永井昌文・前川威洋・橋口達也(編)1972『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団
 那覇市教育委員会文化財課(編)2008『鏡水賀原C遺跡』埋蔵文化財発掘調査ニュース 15
 日高広人・久木田浩子(編)2000『右葛Aヶ道遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 21
 間壁忠彦・間壁登子 1971「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』7 倉敷考古館
 松原哲志・島袋春美(編)2008『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』北谷町文化財調査報告書 27
 彌栄久志・福永修一 2008『唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之道遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 127
 宮下貴浩・藤崎岡太郎・北村勇人(編)2003『上焼田A遺跡・上焼田B遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書 15 鹿児島県金峰町教育委員会

	東北九州	西北九州	中九州	薩摩半島・大隅諸島	大隅半島・宮崎南部	宮崎南部山間域	トカラ～沖縄諸島
大磯山式併行期	大磯山式	曾畑Ⅲ式	尾田式	深浦式白木山段階			条痕土器
鷹島式併行期	鷹島式			深浦式石峰段階	野久尾式		室川下層式
船元Ⅰ式併行期	船元Ⅰ式			深浦式石峰段階(上水流タイプ)			
船元Ⅱ式併行期	船元Ⅱ式			深浦式鞍谷段階	本野タイプ (野久尾式?)		
				上水流タイプ			
船元Ⅲ式併行期	船元Ⅲ式(A～E類)	船元Ⅲ式E(・D)類		春日式			
船元Ⅳ式～ 里木Ⅱ式併行期	春日式?	春日式					

第18図 縄文時代前期末～中期後葉における九州の編年模式図

※相美2010より引用



第19図 伊礼原E遺跡関連資料 (1：S=1/8 その他：S=1/4)

第2節 伊礼原E遺跡から得られた貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

伊礼原E遺跡は、沖縄島中部西海岸の北谷町南部に位置する遺跡で、これまでにトレンチ調査の結果が報告されている（松原・鳥袋2008）。今回は、その後に行われた全面的な発掘調査で得られた貝類遺体を報告したい。

材料および方法

本遺跡における貝類遺体は、従来のピックアップ資料（現場取上げ）の他に、5区では土壌サンプルの水洗選別によって得られた小形・微小貝類も含まれている。ただ、メッシュサイズは4mm程度であり、微小種は極めて少なかった。

貝類遺体は、主に3区・5区・6区から得られ、層序としては最下部のサンゴ礫層から出土したが、詳細な層位は不明であるとのことであった。サンゴ礫層の詳細な年代を決定するのは困難なようであるが、出土遺物や地形形成等から、約6000年の貝塚時代早期から貝塚時代中期（縄文後期相当期）までの範囲に納まるようである。得られた貝類は、3区/5区/5・6区という3つに区分されていた。その他、個体数は少ないものの縄文期と近世期の遺体からなる集石（SX集石と表記）・弥生相当期からも貝類が得られている。サンゴ礫層より上部の土器等の人工遺物の比較的豊富な包含層中からは、貝類遺体はほとんど得られなかったという。また、表採も一括して示してある。

発掘調査で得られた貝類遺体は、北谷町教育委員会で分類・カウント・集計していただき、一部の同定の困難な標本について再同定を行った。最少個体数は、完形個体数に破片を除いたカウントされた部位のうち最も多かったものを加えて算出した。

結果および考察

今回の調査では、少なくとも海産腹足類41科153種、淡水産腹足類2科3種、陸産腹足類4科6種、海産二枚貝類25科71種、その他3種の合計272種が確認された（第4表）。この種数は、近接した先史時代遺跡と比較すると、極めて多いものであり、後述するように自然貝層の小形種（一部に微小種）も水洗選別により抽出されたためである。

1. 各区の貝類遺体

得られた貝類遺体の詳細を第3表に示した。次に、個体数の多かった3つのサンゴ礫層の地区と表採のいずれかのサンプルで、1%以上の割合を占めていた種を優占種とし、その組成を生息場所類型ごとに第2表に示した。

5区：組成は、オキナワヒシガイが1/4、イソハマグリが16%、小形種のリュウキュウミニナとフトコロガイが5%程度、カイコガイ・ヒメオリレムシロが3%程度と多かった。これは、前述のように土壌サンプルの水洗選別を行った結果であることは明らかである。そして、生息場所類型組成では、内湾が2/3を占め、非食用の小形種が大部分であることから、「自然貝層」ということができよう。

また、その中にはアマミクビキレ・オカミミガイ科の種も複数認められていることから（第6表）、打ち上げられたものが堆積したものと考えられる。

5区から得られた明らかに食用ではないと考えられた小形種（第4表の*）を除いた食用の可能性のある優占種の組成も同時に第5表に示した。内湾域のタママキやリュウキュウシラトリは自然遺体

とも考えられるが、他の地区からも出土しているのに、食用として取り扱った。特に、リュウキュウシラトリは弥生時代や小形種のほとんど得られていない表採でも比較的多く、また本地域の戦前の確実な食用遺体として確認でき、意図的に採集された場合もあったと言える。

小形種を除いた組成では、イソハマグリが約1/3と多くなり、タマギキ・リュウキュウシラトリ・シュモクアオリ・ニセマガキ等が目立つ。

5・6区：このサンプルでは、マガキガイが10%、チョウセンサザエ・シラナミ類・カワラガイ・シレナジミ・リュウキュウシラトリ・リュウキュウサルボオが5%以上であった。その他、河口域のダテオキシジミ（伊礼原遺跡の報告では、オキシジミで報告した（黒住 2007）・アラスジケマンや内湾域のリュウキュウザルガイ・スダレハマグリも2%強認められた。

3区：5・6区と類似して、チョウセンサザエが14.2%と最も多く、シラナミ類・マガキガイ・イソハマグリが10%程度で、アラスジケマン・シレナジミ等の河口域の種も多く、逆に内湾域の種はカワラガイの3%が最大となっていた。

弥生時代：出土数はかなり少なかったが、この時代では、シラナミ類・ヒメジャコが10%を超え、内湾の小形種オキナワヒシガイとリュウキュウシラトリが9%程度、リュウキュウザルガイ・カワラガイ・アラスジケマン・マスオガイも5%程度であった。

SX02 集石：出土数は極めて少なかったが、ヤコウガイが1/4（フタによる個体数）を占め、本種の集中的な出土が特徴的であった。その他には、イソハマグリがかなり多く、内湾のスダレハマグリ・ウラキツキガイ等も目立っていた。

表採：イソハマグリが10%以上で、シラナミ類・カワラガイ・アラスジケマン・リュウキュウシラトリ・マガキガイも多かった。

2. 各区間および他遺跡との比較

個体数の極めて少なかったSX集石を除いたサンプルで5%以上を占めた種の組成を図1に示した。これらのうち、5区の組成が、サンゴ礁のマガキガイ・シラナミ類・チョウセンサザエ等と河口干潟域のアラスジケマン・シレナジミをほとんど欠く点で、他と大きく異なっていた。残りの4つでは、イソハマグリ・マガキガイ・シラナミ類の多寡が異なるものの、比較的類似していた。

これを、生息場所類型組成で示すと（第21図）、相違と類似はより明瞭である。5区では、内湾のものが小形種だと70%にも達し、20%がサンゴ礁域潮間帯上・中部であり、小形種を除いても約半数が内湾で、40%が潮間帯上・中部であった。一方、3区で干瀬と河口干潟の割合が高くなるが、サンゴ礁のイノが多く、河口干潟も明瞭に認められる。5区を除くと、比較的類似していると言える。

しかし、詳細に見てみると、弥生相当期でも、本遺跡でもやはり内湾とイノ内が多いもの、前者ではリュウキュウシラトリやマスオガイと他ではそれ程優占しない種が見られ、後者ではシラナミ類・ヒメジャコ等のジャコガイ類も目立つ。貝製品の素材となる種のうち、ゴホウラ・アツソデも認められ、アンボンクロザメはやや目立っていた。この組成を、周辺の貝塚後期の他遺跡と比較して見ると、アラスジケマンの優占する小堀原遺跡（黒住 2009a）、マガキガイの多い伊礼原D遺跡（黒住 2008b）、イソハマグリ・マガキガイの目立つ伊礼原遺跡（黒住 2007）や平安山原B遺跡（島袋 2008）とは異なっていた。貝塚時代後期内での各遺跡の詳細な時期とも関連する可能性もあるが、むしろ遺跡集団間の相違として捉えられるのではないかと考えている。今後、詳細に検討してみたい。

SX集石は近世と縄文期とされており、貝類遺体は極めて少なかった。そして、本遺跡では、包含層からの貝類遺体の出土は極めて稀との観察があり、その結果が本遺構の遺体数に現れている。これは、貝類遺体廃棄場所が制限されていたことを示していると考えられる。また、他の地区では認め

られなかったヤコウガイ（フタ）の集中した出土や中・小形二枚貝類が多いことから、近世期の遺体群が中心となっているのではないかと考えられる。

表採の組成は、比較的5・6区や3区に類似するものの必ずしも一致していなかった。表採された貝類遺体群は、時には、包含層上部の組成を反映するものとなっている場合もあり（黒住, 2009b, 2010）、未発掘遺跡への適用を想定しているが、本遺跡例程度の変異幅を持つ場合も示せたと考えている。

3. 推定される年代と貝類遺体群の変遷

今回報告の貝類遺体は層別ではなく、主に区ごとにまとめられていたので、区の確実な年代は不明と言わざるを得ない。しかし、貝類遺体は、3区/5区/5・6区のサンゴ礫層から得られている。これは、貝塚早期の遺体群を含むものも存在する可能性が高い。琉球列島における、この時期の貝類遺体群の報告は未だ少ないので、各区サンプルの年代を推定し、その変遷を考えてみることは意義あるものと考えられる。

まず、5区と5・6区/3区は、前述のように5区でマガキガイ・チョウセンサザエ・サラサバテイルが極めて少なく、異なった組成を示していた。そして、5区では、弥生時代の組成と大きく相違していた。5・6区と3区は、弥生時代に似ているものの、弥生時代に多いシラナミ類がかなり少なく、マガキガイが多いなどの相違も認められた。つまり、5区、5・6区と3区、弥生時代という3つのパターンの遺体群が識別できた訳である。

この中で、5・6区と3区は、縄文中・後期併行期の土器も多く得られており、貝類組成もサンゴ礫層のものが多く（第5表、第21図）、また黒住（2007）で示した縄文中期の遺体群と同様にダテオキシジミ（報告ではオキシジミ）も比較的高頻度であること（第5表）から、この土器の時期の「サンゴ礫層」と考えられる。本遺跡の層序（第3章第3節）から、5・6区と3区は縄文中—後期前半で、Vs層と考えられる。そして、両者とも弥生時代に多いシラナミ類が少なく、上層からの混入は少ないと思われる。

5区の組成は内湾域の種がほとんどを占め、5・6区/3区とは大きく異なっていた。両者は、同時期で5区の方がより汀線に近いために、自然遺体としての貝殻が優占するという事も考えられるが、やはり食用の廃棄遺体（チョウセンサザエ・サラサバテイル等）の組成も相違していた（第2表）。つまり、5区と5・6区/3区とは、別な時期のものとするほうが受け入れやすい。そして、5区では、伊礼原遺跡の縄文前期の曾畑式土器期で多く確認されているハイガイ（黒住 2007）はほとんど認められず、この曾畑式土器は4区に集中している（第二分冊第40図）という遺跡内での出土地域の違いという2点から、5区は曾畑式土器期より新しいと考えられる。そして、縄文前期でも5区は廃棄場所ではなかったため、ハイガイ等の食用遺体群が少ない可能性も想定されるが、前述のチョウセンサザエ等の食用貝類遺体も少数ではあるが5区で確認されているので、やはり曾畑式土器期ではなかったと考えている。そして、層序（第3章第3節）でVs層より下位のサンゴ礫層はⅧ層であり、5区は、この層のものと考えられる。Ⅷ層がG8-4グリッドで切れることも、5区として取上げられた状況に合致している。Ⅷ層の年代は与えられていないが、Vs層より古く、曾畑式土器期より新しい。概略であるが、ここでは5区の貝類遺体群の大部分は4000年前程度の自然貝層と考えておきたい。

前述のように、このような年代の自然貝層の組成はこれまでほとんど知られていない。しかし、本遺跡に隣接した伊礼原B遺跡では、同様なサンゴ礫層から本地区と類似した型式土器が確認され、その貝類遺体組成は内湾域のカワラガイ・ウラキツキガイ・オノカガミが優占し、僅かにチョウセンサザエ等を含む遺体群であり、大部分が自然遺体ではないかと考えられている（中村, 1989）。今回の結果からも、伊礼原B遺跡の内湾性二枚貝類は自然遺体と考えられ、食用廃棄遺体は土器と同様に流れ込みや廃棄場所の辺縁部のものであったと思われる。また、伊礼原B遺跡でも、前述のハイガイは認め

られず、同様な潮間帯泥底に生息するダテオキシジミは得られている。これらのことから、本地域において、ハイガイの生息していた泥干潟は、曾畑式土器期から室川下層式期頃までの間に消失した可能性もあろう。

このようにおよそ4000年前頃の自然貝層が確認でき、小形種（一部、微小種）も抽出されていたものの、今回確認された貝類相と沖縄の現生貝類リスト（黒田, 1960）を比較してみると、後者のリストに登載されていない種はシオガマ類 *Cycladicama* sp.のみであった。この種は、その後の調査で沖縄から記録されている（黒住, 未発表）。つまり、これまでに述べてきたように（例えば黒住, 2001, 2008a）、4000年前頃と現在の本地域の貝類相は同様で、過去に現在より北に分布を広げていた温暖種（松島, 1984）は認められなかったことを明らかにすることができた訳である。なお、近接したより古いおよそ6000年前頃の新城下原第二遺跡のⅩ層の貝類遺体群では、小形貝類は調査されていないものの、合併のシテナジジミも確認され（鳥袋, 2006）、この層で優占するヘラサギガイも合併であったという観察があり（金子浩昌先生, 私伝）、報告者の観察できた大形のニセマガキでも合併が含まれていた。これらのことから、この層は、マングローブ域から内湾泥底潮間帯の自生的な自然遺体群を含んでいると考えられる。この層の報告（鳥袋, 2006）と報告者の実見できたものの中には、現在の沖縄島中部では見られないウマノコガイ（黒住, 2008a）を除いて、これまでのところ、琉球列島から絶滅した種は認められていない。つまり、伊礼原E遺跡で今回確認できた自然貝層から想定された現在と同様な貝類相の存在は、より古くまでさかのぼる可能性を新城下原第二遺跡は示しているものと考えられる。微小種を含めた今後の詳細な検討が望まれる。

謝辞：種々御教示下さった鳥袋春美氏、検討の機会を与えて頂き、また分類・集計等でもお世話になった北谷町教育委員会の方々には御礼申し上げる。本報告の一部には、文部科学省科学研究費（課題番号21101005）を用いた。

〈引用文献〉

- 黒田徳米. 1960. 沖縄群島産貝類目録（頭足類を除く）. iv + 104pp. + 3 pls. 琉球大学.
- 黒住耐二. 2001. 伊是名貝塚の貝類分析. In 伊是名貝塚学術調査団（編）, 伊是名貝塚, pp. 328-345. 勉誠出版, 東京.
- 黒住耐二. 2007. 貝類遺体からみた伊礼原遺跡. In 中村 暎（編）, 伊礼原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (26): 535-555.
- 黒住耐二. 2008a. 琉球列島の環境変化を貝類から探る. 考古学ジャーナル, (577):15-20.
- 黒住耐二. 2008b. 伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体. In 東門研治・鳥袋春美（編）, 伊礼原D遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (28):168-183, 197-200.
- 黒住耐二. 2009a. 小堀原遺跡から出土した貝類遺体. In 東門研治・鳥袋春美（編）, 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (30): 201-212.
- 黒住耐二. 2009b. 瀬底島アンチの上貝塚から得られた貝類遺体. In 片桐千亜紀（編）, 瀬底島・アンチの上貝塚, 本部町文化財調査報告書(9): 174-206.
- 黒住耐二. 2010. 遺跡における攪乱層の貝類遺体組成は何を示すか？—2009年度ナガラ東原貝塚発掘調査—. In 弘中正芳（編）, ナガラ東原貝塚6, 考古学研究室報告, (45): 37-42. 熊本大学文学部考古学研究室.
- 松原哲志・鳥袋春美（編）, 2008. 伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (27): 1-247.
- 松島義章. 1984. 日本列島における後氷期の浅海性貝類群集—特に環境変遷に伴うその時間・空間の変遷—. 神奈川県立博物館研究報告（自然科学）, (15): 37-109.
- 中村 暎. 1989. 伊礼原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (8): 1-54, 24 pls.
- 鳥袋春美. 2006. 貝類遺体. In 片桐千亜紀（編）, 新城下原第二遺跡, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書, (35):215-260.
- 鳥袋春美. 2008. 貝類遺体. In 東門研治・鳥袋春美（編）, 平安山原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (29):104-114.

第4表-1 伊礼原E遺跡出土貝類とその生息場所類型

	生息場所 類型	回数 番号		生息場所 類型	回数 番号
軟体動物門 Mollusca			ハナマルユキ	Cyprea (Ravirona) caputsepenis	I-3a T-2
扇足綱 Gastropoda			ハシヨウダカ	Cyprea (Luna) mauritiana	I-1a T-8
ツツノ科 Patelidae			ヤチシロダカ	Cyprea (Luna) isobellae	I-2b
ツツノ科	Scutellastra flexuosa	I-3a	ホノヤクマダカ	Cyprea (Asabica) rejintiana	II-2a T-7
オオツツノハ	Scutellastra optima	VI 2	ヤクシマダカ	Cyprea (Asabica) arabica	I-2a
ヨメガカサ科 Nacellidae			ホシダカ	Cyprea (S.S) tigris	I-2c T-9
オホベッコウガサ	Celana testudinaria	I-1-a 3	ホシキヌタ	Cyprea (Mystapoda) vitellus	I-2a T-11
ヌキノカサ科 Nucidae			タマガイ科 Turridae		
リュウキョウウノアシ	Patelloida saccharina	I-1-a 4	トミガイ	Polinices tumidus	I-2c 63
リュウテン科 Turridae			リスガイ	Mammilla melanostoma	I-2c 64
コシダカサザエ	Turbo (Marmoratus) stenogrum	I-2a 12	オウシユノタマ	Notochchilis gualteriana	II-1c 65
チュウセンサザエ	Turbo (Marna). angustosum	I-3-a 5.6	ヤツシロガイ科 Tonidae		
ヤコウガイ	Turbo (Lunatia) marmoratus	I-4-a 8	スクミズラ	Tonna cepa	I-2c 64
カンギク	Lunella monilifera	II-1-b 9	フジツガイ科 Ranellidae		
オウクラウス	Astrialum rhodostoma	I-2-a	シネボラ	Cyatulus (Guturinum) muricium	I-2-a 69
オホナツワシシガイ	Collistora costulosa	I-2-c 11	サツマボラ	Cyatulus (Monoplex) agastile	I-2-a 67
ニシキウス			シムキウ	Cyatulus (Monoplex) pleae? pikee?	I-2c 69
ニシキウス	Trochus (S.S.) maculatus	I-2-a 15	フジツガイ	Cyatulus (Litoria) litorium	I-4-a 70
ボンチカハマ	Trochus (Tectus) pyramis	I-4-a	ホウガイ	Charonia tritonis	I-4-a
サラサハシイラ	Trochus (Pochia) nitidus	I-4-a 17	オキニシ科 Bursidae		
クマノコガイ	Chlorostoma xanthostoma	I-2-a 14	オキニシ	Bursa (S.S.) bufonis dunkeri	I-3-a 72.73
コマギアゲエビス	Clausulus bronni	I-2-a 18	アツキガイ科 Muricidae		
オホナツワシシガイ	Mondfortia labio	II-1-b 19	ガンセキウ	Chicoreus bunanunus	I-2-a 75
アマオプネ科 Neitidae			オウニシ	Thais (Semicornuta) squamosa	II-1-a
インダミアマオプネ	Nerita (Ritena) helicinoides	I-0-a 21	ツツナツシ	Mancinella hippocastanata	I-1-a
コシダカアマガイ	Nerita (Ritena) striata	I-1-a 22	ツツナツシ	Mancinella tuberosa	I-3-a 79
マンダコブ	Nerita (Ritena) undulata	III-0-a 28	レイシダマ	Morula granulata	I-1-a 76
マンダコブ	Nerita (Ritena) insculpta	I-0-a 24	オウシヨレイシダマ	Morula anaxares	I-1-a 77
アマオプネ	Nerita (Theystyola) albicilla	I-1-b 24	ハナツラシ	Nassa vexillum	I-3-a
マンダコブ	Nerita (Theystyola) squamulata	II-1-b 22	アサギレイシ	Drupa (Ricinella) rubusidarus	I-3-a 80
オホマアオプネ	Nerita (Theystyola) chamaeleon	I-1-b 23	オニコブシガイ科 Vasidae		
ニシキアオプネ	Nerita (Amponineta) polita	I-1-c 26	オニコブシ	Vasum ceramicum	I-3-a 81
オノコガイ	Cithon soerwerbianus	III-0-e 29	オニコブシ	Vasum turbinellum	I-2-a 84
オムラクモカノコ	Neitina variegata	IV-5 31	フトコロガイ科 Columbellidae		
オホマ(バニ)カシシメ	Neitodyas dubia	IV-6 32	オホコガイ	Euplaca vesicolor	II-2-d 87
オノコガイ	Smargadha rangiana	II-2-e 30	オホマムシ	Aesopus (Laevoesopus) spicata	I-2-a 88
ヤマタニシ科 Cyclophoridae			エソバヤ科 Baccinidae		
オホナツキマタニシ	Cyclophorus turgidus	V-8 R-1	オノシガイ	Engina (Pusostoma) mendicaria	I-1-a 89
オニツノガイ科 Cerithiidae			ベッコウバ	Emmanis ignea	I-2-a 85
オニツノガイ	Cerithium modiolosum	I-2-c 39	シマベッコウバ	Jepeuthria cingulata	II-1-b 90
オノコブシ	Cerithium corallium	III-1-c 42	オノレイロフバヤ科 Nassariidae		
オノコブシ	Cerithium zonatum	I-2-c 43	イボツノガイ	Nassarius coronatus	II-1-c
オノコブシ	Cerithium mailletii	I-1-a 45	オノコブシ	Nassarius sp. cf. nodifer	II-2c 97
オノコブシ	Cerithium rostratum	II-2-c 47	オノコブシ	Niotha semiculata	I-1-b 97
カヤノミカニモリ	Clypeomorus bifasciata	I-1-b 41	オウムシロ	Niotha albescens	I-2-c 98
イウ(ウミニ)カニモリ	Clypeomorus bhamilliaefomis	II-1-b 44.6	オノコブシ	Pliacurilla bellula	III-1-c 93
クワノミカニモリ	Clypeomorus beatissima	I-1-b 40	オヨフバイドキ	Telasco limnaeiformis	II-2-c 96
スズメハナツボ科 Dialidae			イトマキボラ科 Fasciolaridae		
オノコブシ	Diala stricta	II-2-c	イトマキボラ	Pleuroploca trapezium	I-2-a 99
ヘナクガイ科 Cerithiidae			ナガトキボラ	Pleuroploca flammetosa	I-2-a
センシヨガイ	Telescopium telescopium	III-0-c 48	チトセボラ	Fusius nicobaricus	I-2-c 101
マドモチウミニ	Terebralia sulcata	III-1-c 49	マクラガイ科 Olividae		
ウミニナ科 Batillariidae			サツマビナ	Oliva annulata	I-2-c 104
リュウキョウウミニ	Batillaria flectosiphonata	II-1-c 51	フデガイ科 Muridae		
イボウミニ	Batillaria zonalis	III-1-c 50	イモフデガイ	Pterygia baccata	I-1-b 102
トウダカカニ科 Thiaridae			ミノムシガイ科 Cassinellidae		
トウダカカニ	Thiara scabra	IV-5.6 R-2	ミムシガイ	Vexillum baltaleatum	II-2-c
ヌメノカニ	Melanoides tuberculata	IV-6 R-3	オモイガイ科 Conidae		
カワニナ科 Pleuroceridae			マダライモ	Conus (Viroconus) ebraeus	I-1-a 111
カワニナ	Semisulcospira bensoni	IV-5.6 R-4	コマダライモ	Conus (Viroconus) chaldaeus	I-1-a
タマキビ科 Littorinidae			サヤカタイモ	Conus (Viroconus) fulgetrum	I-1-a 113
オノコブシ	Littoraria (Littoraria) undulata	I-0-a 33	ジズガイサヤカタイモ	Conus (Viroconus) coronatus	I-1-a 114
オノコブシ	Littoraria (Littorinopsis) scabra	III-0-d	キツツガイ科	Conus (Viroconus) flavidus	I-1-a 115
リスツボ科 Rissoiidae			イシヤマモ	Conus (Viroconus) lividus	I-2-a 125
オノコブシ	Rissoina (Rissoina) materisulca	I-2-b	ヤナギシロイモ	Conus (Rhiacoconus) miles	I-3-a 124
オノコブシ	Rissoina (Rissoina) modesta	I-2-b 34	イタチイモ	Conus (Rhiacoconus) mustelinus	I-4-c
オノコブシ	Rissoina (Morchella) okawensis	I-2-b 36	サラサミナシ	Conus (Rhiacoconus) capitaneus	I-4-c
オノコブシ	Rissoina (Rissoina) plicatula	I-2-b 38	カシミナシ	Conus (Rhiacoconus) vexillum	I-4-c
クビレガイ科 Truncatellidae			イサイモ	Conus (Diaconius) striatus	I-2-c
オノコブシ	Truncatella amiemiensis	V-10	ササモトキ	Conus (Diaconius) vitellus	I-2-c
スイシヨガイ科 Strobilidae			ヒラマユモ	Conus (Diaconius) planorbis	I-2-c
オハクログイ	Strombus (Canarium) urceum	II-2-c 61	スジイモ	Conus (Diaconius) fuliginus	II-2-c 131
ネジマダカ	Strombus (Gibb) g. gibbosus	II-1-c 58	アジロイモ	Conus (Diaconius) pennaceus	I-2-c
マダカ	Strombus (Conomurex) luhuanus	I-2-c 57	タカヤサンミナシ	Conus (Diaconius) textile	I-2-c
スイシヨガイ	Strombus (Laevisiomurex) turtonella	II-2-c 54	ツボイモ	Conus (Diaconius) vexillum	I-4-c 130
イシノボ	Strombus (Lentigo) leniginosus	I-2-c 56	ニシキミナシ	Conus (Diaconius) striatus	I-2-c 129
アソソデガイ	Strombus (Tricomis) theristes	I-4-c 52	アンボイナ	Conus (Gastriidium) geographus	I-2-c 127
ゴホウラ	Strombus (Tricomis) latissimus	I-4-c 53	ナンヨウウロミナシ	Conus (S.S.) marmorosus	I-2-c
クモガイ	Lambis lambis	I-2-c	ミカドミナシ	Conus (Rhombus) imperialis	I-2-c
スイシヨ	Haspago chiragra	I-2-c 61	アカシマナシ	Conus (Leptoconus) generalis	I-2-c
ムカデガイ科 Vermestidae			ゴマフイモ	Conus (Punctulites) pulicarius	I-2-c
オノコブシ	"Serpiorbis" sp.	I-2-a	コンコイモ	Conus (Punctulites) arenatus	I-2-c 116
タカラガイ科 Cypraea			オホマメドキ	Conus (Lithoconus) ebraeus	I-2-c
キイロダカ	Cypraea (Monetaria) moneta	I-1-a T-4	アノコブシ	Conus (Lithoconus) literatus	I-2-c 108
ハナビラダカ	Cypraea (Monetaria) annulus	I-1-a T-3	クロフボイモ	Conus (Lithoconus) leopardas	I-2-c
ナメドキ	Cypraea (Erosna) erosna	I-2-b T-5	タマキガイ科 Turridae		
ウミナツ(リュウキョウ)ダカ	Cypraea (Blasicurva) luhuanu	II-2-c T-12	オホマメドキ	Lienardia rubicunda	I-2-a 105
コモダカ	Cypraea (Erosna) eros	I-2-b T-1			

第5表 伊礼原E遺跡における優占種の頻度(%)

	5区	5・6区	3区	湧生	SX集石	表採	
個体数	7321	5487	11446	175	61	5224	
個体数(除非食用小形種)	[3733]	[5477]	[11151]	[158]	[60]	[5213]	
外洋-サンゴ礁域/潮間帯上・中部(1-0/1)	20.5	40.1	2.8	11.9	5.7	25.0	13.2
イソハマグリ	15.8	31.1	0.9	9.4	4.0	11.7	10.7
エガイ	1.0	1.9	1.2	1.8	0.6	0.0	1.7
カヤノミカニモリ	1.0	2.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0
外洋-サンゴ礁域/イノ内(1-2)	3.4	2.8	35.1	34.0	36.0	3.3	32.0
マガキガイ	0.1	0.2	10.5	11.5	0.6	0.0	7.1
イトマキボラ	0.0	0.0	1.3	0.5	1.1	0.0	2.2
シラナミ類	0.1	0.2	8.1	12.4	10.3	1.7	9.9
ヒメジャコ	0.1	0.1	1.7	1.6	10.3	0.0	0.6
ヒレジャコ	0.0	0.1	1.9	1.4	2.3	0.0	0.7
クモガイ	0.0	0.1	1.8	1.1	1.7	0.0	0.2
アンボンクロサメ	0.0	0.0	0.9	1.3	1.1	0.0	2.4
メンガイ類	0.0	0.1	3.3	0.0	1.7	1.7	1.2
キクザル類	0.0	0.0	0.9	1.1	0.6	0.0	0.4
外洋-サンゴ礁域/干瀬(1-3)	0.8	1.7	9.1	14.4	0.6	1.7	4.4
チョウセンサザエ	0.5	0.9	8.7	14.2	0.6	0.0	4.0
外洋-サンゴ礁域/礁斜面(1-4)	0.3	0.6	6.5	0.5	3.4	28.3	1.8
サラサハテイラ	0.2	0.3	5.4	0.1	2.3	0.0	0.9
ヤコウガイ	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	26.7	0.5
内湾-転石域(II)	69.9	47.2	33.4	17.8	45.7	35.0	35.1
オキナワヒシガイ	25.7		0.0	0.8	9.1	0.0	0.0
リュウキュウミナ	5.5		0.0	0.4	0.0	0.0	0.0
フトコロガイ	4.9		0.0	0.2	0.0	0.0	0.0
カイコガイ	3.2		0.0	0.2	0.0	0.0	0.0
ヒメオリイレムシロ	2.8		0.0	0.4	0.0	0.0	0.0
ホウシュノタマ	2.6		0.1	0.2	0.0	0.0	0.1
タママキ	5.1	9.9	1.1	0.9	0.0	1.7	0.2
リュウキュウシラトリ	4.2	8.2	5.4	1.4	8.6	0.0	7.2
シュモクアオリ	4.1	8.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ホソスジイナミ	2.0	3.9	0.4	0.5	2.9	0.0	1.7
カブラツキガイ	1.5	1.5	0.2	0.0	0.0	1.7	0.0
ニセマガキ	1.4	2.7	0.2	1.0	0.0	0.0	0.0
マスオガイ	0.7	1.4	1.7	0.9	4.6	1.7	1.4
カワラガイ	0.6	1.2	7.9	3.2	5.1	1.7	9.1
ユウカゲハマグリ	0.3	0.5	2.1	0.4	0.6	0.0	1.7
スダレハマグリ	0.2	0.5	2.2	2.4	1.1	1.7	2.7
リュウキュウマスオ	0.1	0.2	1.4	0.8	1.1	1.7	1.4
リュウキュウザルガイ	0.2	0.3	2.3	0.3	5.7	1.7	4.0
リュウキュウサルボオ	0.0	0.1	5.1	2.2	1.1	3.3	1.5
河口干潟-マングローブ域(III)	1.6	1.3	12.7	20.3	8.0	3.3	12.0
アラシジケマン	0.5	1.0	3.4	8.8	5.1	1.7	8.6
シテナシジミ	0.0	0.1	5.8	7.2	1.7	1.7	2.0
ダテオキシジミ	0.1	0.1	3.1	3.5	1.1	0.0	1.3
淡水域(IV)	1.6	3.0	0.2	0.5	0.0	3.3	0.3
カワニナ	1.3	2.6	0.2	0.5	0.0	3.3	0.3
陸域(V)	1.8	3.4	0.2	0.7	0.6	1.7	1.2
オキナワヤマタニシ	0.8	1.6	0.1	0.4	0.6	0.0	0.7
パンダナマイマイ	0.8	1.6	0.1	0.1	0.0	0.0	0.2
その他/化石・持込み(VI)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

第6表-1 伊礼原E遺跡から得られた貝類遺体の詳細

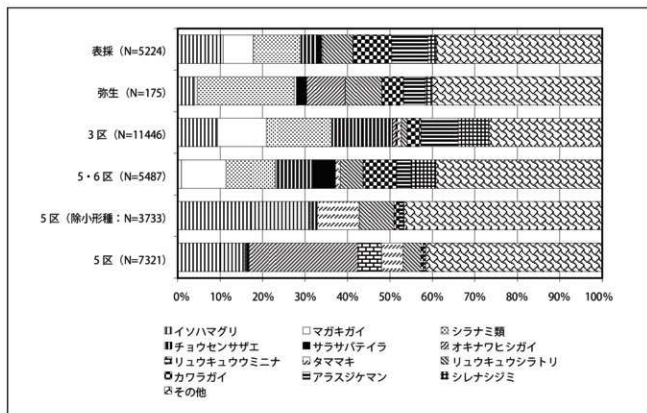
種別名:産地	出土地	5区	MNI	5・6区	MNI	3区	MNI	SX集	MNI	発生	MNI	表様	MNI
ツタノハ		221a2F	24										
オオツタノハ		1A	1										
オオベッコウガサ												2F	1
リュウキョウノアシ		1	1	1	1								
コシカサエ		6Jf	7										
チョウセンサザエ		1.6a.40F	33	15.49a.485F	479	29.380a.1419F	1629			10F	1	6.103a.242F	207
同(フタ)		11.22F		22		1590.36F							207
ヤコウガイ		76F	1	1.1a.59F	3	1.3F	1		16			1.1a.29F	26
同(フタ)		1F		3								10.16F	25
カンボウ		38.11a.17F	49	8.11a.1F	19	10.11a.1F	43		16F			11.14a.2F	28
同(フタ)		43		3		40.3F						8	
オオウラズ				5.1F	6	5.2F	7					3.1a.2F	4
ムラサキサンショウスガイ		59	59										
ニシホウズ		2.2F	1	4.9a.29F	13	10.1a.43F	20					15.2a.13F	17
モンタカハマ		3F	3	30a.35F	36	1.21a.37F	22					1a.8F	1
サラサシイラ		110a.33F	11	62.23a.639F	294	14a.59F	14			1.3a.35F	4	47a.111F	47
クマノコガイ													1
コマキアゲエビス		1	1										
オキナワシダタニ		60.3a.22F	63	9	9	18	18					5.4F	6
イシダタミアマオブネ		45.2F	46			9	9						
コシダタミアマガイ		1F	1	1	1								
マンダローブアマガイ						1	1						
リュウキョウアマガイ		3	3			1	1						
アマオブネ		7	7	6.2F	7	7.1a.4F	8	1	1				
マルアマオブネ				1	1								
オオマルアマオブネ		2	2			1F	1					1	1
ニシキアマオブネ		8	8	5.1F	6							5.3F	6
カノコガイ		60.2F	61			14.2a.59F	16						
ムラクモカノコ		1	1	1	1								
シマオカシマキ		1, 1, 1F	2	1	1							2	2
クサイロカノコ						1	1						
オキナワヤマタニシ		29.20a.15b	58	2.1b	3	38.8a.10F	46			1	1	31.5a.3b	36
オキナワノガイ		4.2a.13F	6	7.21a.25F	28	5.3F	6		1F	1	1	1.22a.17F	23
コダツツエ		4a	1										
ヒメタワノミカニモリ		11	11	1	1	1	1						
ヒメムシロカニモリ		1	1			1	1						
ハンナガツツエ		1a	1										
カヤノミカニモリ		65.9a.34F	74			28.2F	29					2	2
イワカニモリ													
カワノミカニモリ		5.2a.1F	7			1F	1						
マキミノズズハマツボ		1	1										
センニンガイ						1	1						
マドモチウミニナ		1.1F	2			2a	2					1a	1
リュウキョウウミニナ		384.19a.15F	400	2	2	37.4a	41						
イボウミニナ		1	1			3	3						
トウワタカワニナ		12.2a	14									1	1
ヌノメカワニナ		2	2										
カワニナ		61.35a.108b	96	1.8a.3b	9	28.25a.42b	53	1.1b	2			10.5a.3b	13
ウズラタマキビ								6	6				
ネソソシズクヤマキビ		1	1			2	2						
ネソソシチョウジ		1	1									5.4a	9
ハブタタチョウジ		1	1									109.26a.17F	371
カワリホリョウジ		1	1										
ネソウネチョウジ		1	1										
アマミキビキレ		1	1			1	1						
オハクログイ								3.2a	5			1	1
ムツツツキガイ		1	1	6.1a	7								
マダガガイ		4.4a	8	245.330a.3F	575	410.010a.34F	1320			1	1	109.26a.17F	371
スイシヨウガイ				1a	1	1a.2F	1						
イボソデ		1.1F	2			2F	1					1.1a	2
アツツガイ				1	1	2F	1						
コホウタ		1F	1	3F	1	1F, 4F	2			2F	1		
クハガイ		1.2a.241Jf	3	10.86a.1117F	98	1.126a.2012F	127			2.3F	3	8.4a.565F	12
スイシガイ				2.18F	3							6a.17F	6
ハビガイ類		24.41F	25			7.8F	8						
キイロダカラ		26.18	2									1	1
ハナビラダカラ		1.68.18	4			1	1					5	5
ナツメドネ												1	1
ウスムササダカラ												1	1
コシダカラ						2.2a.22F	4						
ハナマルユキ		1aF	1									5.1aF	6
ハチジョウダカラ				1aF	1								
ヤナギシホリダカラ										1aF	1		
ネソヤクシマダカラ										1	1		
ヤクシマダカラ				5.148.13a.905F	32	5.148.11a.981F	17					3.8a.13a.100a.6F	24
ネシダカラ		26F, 1a.3F	3	3a8.39a.330.41F	42	27a8.22a.29a.72F	26			1aF	1	6.69a8.37a.11a.33a	112
ネシキヌタ		11a.1aF	2	6.6F		1.3a	4					6.44a.24	10
タカラガイ類		2.2a.1a.1F	4			4aF	4					4aF	4
トミガイ				1.2a	3					1a	1	3.1a	4
リスガイ				2.1a	3	1F	1					5.1a	6
ウツシノタマ		160.21a.14F	187	2.1a	3	24.4a	28					5	5
スカミウズラ				1a	1								
シオボウ				1a.2F	1								
サツマボウ		1F	1										
シノマキ?		1	1	4.3F	5							1	1
アツツガイ				5F	1								

b: 休痕, dL: 背面欠, f: 断片, j: 幼貝, R内側, o1: 外側, u: 腹面 二枚貝は左/右

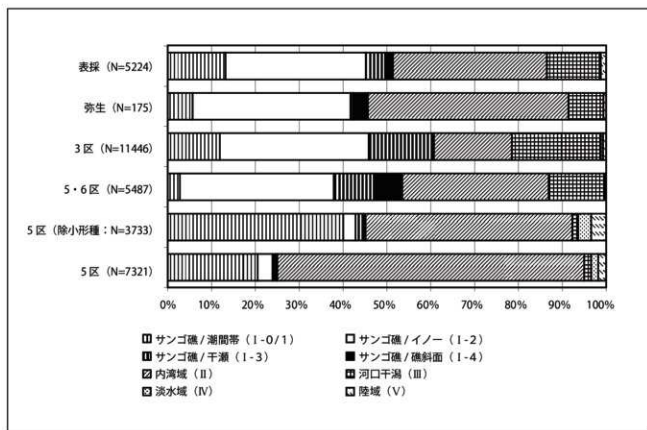
第6表-2 伊礼原E遺跡から得られた貝類遺体の詳細

種別目録:産産種	出土地	5区	MNI	5・6区	MNI	3区	MNI	SX集	MNI	発生	MNI	表標	MNI
ネラガイ		5f	1	6a,80f	5	122f	1			3f	1	1,7a,30f	8
オキシシ				4,1a,4f	5				f	1		4,1f	5
カシタネホウ		2f	1	2,6a,3f	6	f	1					4,3a,2f	7
コイウシシ		f	1										2
ツノテレイシ		f	1			f	1					1,1f	7
フノレイシ		4f	1			f	1					8,1a,6f	9
レイシダマシ		1,4f	2										
ウネレイシダマシ		2f	1										
ウネシロレイシダマシ		1	1						f	1			
ハナワレイシ		f	1										
アカイガレイシ				2,1a	3								
オニコブシ				2,2a,23f	4	3,6a,17f	9					1a,5f	2
コオニコブシ				1a,2f	1	3,2a,9f	5					2,1a,3f	3
フトコロガイ	348,57f	358				2a,2a	28						
ハナマムシ													
フシガイ	2,3a	2											
シマベッコウバイ	1	1				1	1	1a	1			1	1
ベッコウバイ								1	1				
エソバイ科?	310,12a,21f	322				20,2a,1f	22						
イボコウバイ								1	1			1	1
ヒメオドリイモシロ	191,13a,42f	204				35,6a,1f	41					1	1
アワムシロ	1	1											
アワムシロ						1	1						
カニノテムシロ	1	1				1	1						
ヨフバイモドキ	43,9f	43				4	4			2f	1		
ムシロガイ類	1,3a	2											
イトマホウ	2f	1	42,32a,218f	74	38,2,1a,217f	59			1,2f	2	48,65a,43f	113	
ナガイトマホウ												2a	2
チトセボウ												2f	1
サツマビナ						1	1						
イモフガイ			2,2f	3	1	1							
ミノムシガイ						1	1						
マダライモ	4,1a	5	9	9	10	10			1	1	18	18	
コマダライモ	1	1											
サヤガタイモ	1	1	1	1	1						1	1	
ジュスガケサヤガタイモ	8	8	3	3	11							9,1f	10
キヌカフガイモ						1,5f	2						
イボシマイモ			2	2	1	1							
ヤナボシボリイモ	f	1	5,2a,7f	7	6,1a,19f	7					1,1a,10f	2	
イタチイモ			3,3a	4	2,8f	3					2,11f	3	
サラサミナシ			3,18f	4	3,2a,37f	5			1	1	19f	1	
カバミナシ			4f								1	1	
ヤキイモ					5,3f	6							
サラサドネ			1	1							2f	1	
ヒラウガイモ						1	1						
スズイモ			1	1									
アヅロイモ												3,1a	4
タガヤサンミナシ			2,1f	3							2f	1	
アボイモ					1	1							
ニシキミナシ			5f	1	5f	1					2,3f	3	
アソボイモ			1	1	3f	1					1a	1	
オシヨウクロミナシ			4,2a,51f	6	4,10a,10f	14					1,2a,20f	3	
ミカドミナシ			4f	1	1a,6f	1					3a,5f	3	
アカシマミナシ			3,1a,14f	4	2,1,3f	3					1,2a,3f	3	
ゴマフイモ			f	1	1,1f	1					1,2f	2	
コモンイモ											1	1	
クロボシモドキ											2a,2f	2	
アンボシクロザメ	1a,2f	1	8,40a,30f	48	4,147a,831f	151			1,1f	2	8,116a,503f	124	
クロボシドネ	1a,2f	1	1,3a,14f	4	3a,25f	3					2a,20f	2	
小形イモガイ類	9,2a,1f	11	8,2a,50f	10	50a,26f	50					16,13a,29f	29	
中形イモガイ類	4f	1	17,26a,262f	43	4,44a,440f	48			2	2	54a,345f	54	
大形イモガイ類			1,3a,8f	4	26a,119f	26			1a	1	17,51f	18	
イモガイ類	1,3a,8f	4	1,17f,137f	18	6,2a,19f	8					3,7a,14f	10	
ヒメオドリフカサシヤヅク	6,1f	7											
シクモドネ	8	8			2	2							
ウシノフ											1	1	
タケノコガイ類	3,4a	7											
オオクチキレ	8	8											
ロウイロカリムシクチキレ	1	1											
コシイミ	1	1			7	7							
ナツメガイ	2f	1			1,1f	2					1,3a	4	
コナツメ	1												
カイコガイ	232,5a,6f	237			20,1f	21							
ニクイロドク	1	1											
オオコツツ類	38	38											
ヒラカガマツ	1	1											
ヒメヒラシイミ	3,1f	4											
クロヒラシイミ					1	1							
カシノメガイ	1	1											
フヤハマシイミ	1	1	1	1									
ハマシイミ	3	3	1	1									
マホスジコシイミ	1	1			3	3							
フヤギモ	1,1a,5b	2	1	1	2	2							
シュリマイイ	4,1b	5	1	1	8,3a,17b	11	1a	1					
カツレンマイイ			2,1a	3	3,2a,2b	5					9,5a,3b	14	
ハンダチマイイ	38,23a,11b	61	1,2a	3	12,2a	14					8,2b	10	
オキナフカスカワマイイ											1b	1	

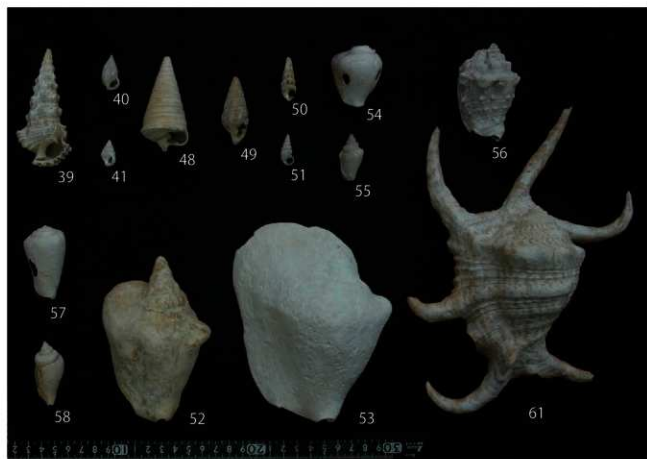
b: 体輪, dL: 背面欠, f: 破片, j: 幼貝, R内側, ol: 外側, u: 腹面, 二枚貝は左/右



第20図. 伊礼原E遺跡の優占種組成.



第21図. 伊礼原E遺跡の貝類生息場所類型組成.



図版 31 貝類遺体 1 (巻貝、番号は第 表と一致)



図版 32 貝類遺体 2 (巻貝:T-はタカラ貝の番号を示す)



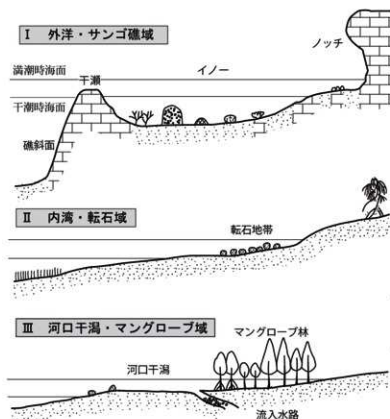
図版 33 貝類遺体 3 (上：陸産貝・R-は陸産貝の番号を示す 下：二枚貝)



図版 34 貝類遺体 4 (二枚貝)



図版 35 貝類遺体 5 (微小貝)



第7表 沖縄における貝類の生息場所類型

I	外洋	0: 潮間帯上部 (Iではノッチ IIIではマングローブ)	a: 岩盤 b: 転石
I	サンゴ礁域		c: 岩礁底 砂泥底 砂底
II	内湾	1: 潮間帯中・下部 2: 亜潮間上縁部 (Iではイノー)	d: マングローブ 植物上
III	河口干潟 マングローブ域	3: 干瀬 (Iのみに適用) 4: 礁斜面および その下部	e: 淡水の流入 する磯底
IV	淡水域	5: 止水 6: 流水	
V	陸域	7: 林内 8: 林内・林縁部 9: 林縁部 10: 海浜部	
VI	その他	11: 打ち上げ物 12: 化石	

<凡例>

第22図 波浪の変化に基づく海洋地形の3タイプ (模式図)『古我地原貝塚』(1987年)を修正

第4節 伊礼原E遺跡出土の脊椎動物遺体

樋泉 岳二（早稲田大学）

伊礼原E遺跡は沖縄県北谷町の海岸平野に立地する縄文時代前期（沖縄貝塚時代早期）～近代の遺跡である。本遺跡では、2004年度から2005年度にかけて実施された発掘調査において多数の脊椎動物遺体（骨類）が採集された。ここではこれらの骨類の同定結果を記載し、その特徴について述べる。

1. 分析資料と分析方法

分析資料は発掘現場において目視確認され、手で拾い上げられたもの（ピックアップ資料）である。骨類が出土した層準および共存遺物などから推定される年代は、下位からⅧ層（曾畑式期：貝塚時代早期中葉）、Ⅴ層（縄文中期～後期：貝塚時代早期後葉～前期）、Ⅴs層（縄文中期～後期：貝塚時代後期前半）、Ⅳ層（貝塚時代後期前半）、Ⅲ層（グスク時代以降）、Ⅱ層（近世～近代）、Ⅰ層（米軍基地造成時の盛土）である。

同定は現生種の比較骨学的な所見に基づいて行った。遺体の予備的な同定およびデータの集計・作業は北谷町教育委員会の島袋春美氏によって行われ、筆者（樋泉）が同定結果の確認および最終的な図表の編集を行った。以下の記述はそのデータに基づくものである。

2. 分析結果

同定結果を第9～19・21・22表に、同定標本数（NISP）と最小個体数（MNI）による組成を第20表に示した。また第23図に層別の出土数と組成をMNIによって示した。

出土数をNISP（第20表）でみると、Ⅴs層南西部（3区F7グリッド、5区・6区）が1306点と圧倒的に多く、Ⅱ層が140点、Ⅴ層が81点、Ⅳ層が56点、Ⅴs層北東部（3区E3グリッド、4区）が21点でこれに次ぐ。他の層準からの出土数はごく少ない。

(1) Ⅴs層の骨類の堆積過程と年代

最も多くの骨を出土したⅤs層は枝サンゴ破片や粗砂等からなる粗粒堆積物で、強い波浪（おそらく津波）によってⅤ層が削剝され再堆積したものと推定されている。

Ⅴs層の骨には軽度の水磨をうけたものが多く、一部の資料にはゴカイ類の棲管が付着した資料もみられた。このことからⅤs層の骨の多くは、もともとⅤ層に包含されていた骨が洗い出され、しばらくの間海浜に露出した状態でおかれた後に再堆積・埋没した可能性が強い。いっぽうで、骨の全体形状が失われるほど強く磨耗した資料は少なく、また骨質の保存状態も比較的良好であることから、これらの骨類はごく付近から海浜堆積物中に流れ込んで、そのまま堆積・保存された可能性が強い。

Ⅴs層中にはⅤ層と同時代（縄文中～後期）の遺物が多量に含まれるが、Ⅳ層（貝塚時代後期）の遺物も混在している。したがって、本層出土の骨類にも両層の時期（縄文中期～後期と貝塚時代後期）のものが混在していると推定される。

これらの骨類の年代を絞り込むために、骨類が採集されているグリッドの土器の分布状況（第40図）をみると、3区E7グリッドと4区では貝塚時代後期の土器が多く、縄文土器は比較的少ない。いっぽう3区F7グリッド、5区、6区では縄文土器が高密度で出土しているのに対し、貝塚時代後期の土器の分布は疎である。したがって、骨に関しても前者では貝塚時代後期、後者では縄文時代の資料が主体である可能性が考えられる。そこで、Ⅴs層の資料をこのふたつの地区に区分して集計すると（第20表、第23図）、3区F7、5区、6区からの出土数が圧倒的に多く、3区E7、4区からの出土数はごく少ない。このように、Ⅴs層の骨類の分布傾向は明らかに縄文土器との相関性を示している。

また、両地区の骨の組成（詳細は後述）をⅣ層、Ⅴ層と比較すると、3区F7、5区、6区では魚類とイノシシが主体をなす点で縄文中～後期のⅤ層との類似性を強く示しているのに対して、3区E7、4区は魚類がみられず、イノシシが主体をなす点で貝塚時代後期のⅣ層に明らかに近い（第23図）。

以上のようにⅤs層の骨類は、(1)分布傾向が明らかに縄文土器との相関性を示していること、(2)骨類の組成が3区E7、4区はⅣ層、3区F7、5区、6区はⅤ層との類似性を明らかに示していることから、今回はⅤs層出土の骨類の年代について、3区F7、5区、6区を縄文中期～後期主体、3区E7、4区を縄文中期～貝塚時代後期として捉えることとした。以下では記述の便宜上、Ⅴs層3区F3グリッド、5区、6区を「Ⅴs層南西部」、Ⅴs層3区E7グリッド、4区を「Ⅴs層北東部」と仮称する。

(2) 脊椎動物遺体群の概要

同定の結果、多様な種を含む魚類（詳細は後述）、爬虫類（ウミガメ類、リクガメ類）、鳥類（詳細不明の骨片）、哺乳類（ネズミ科、イヌ、イノシシ・ブタ、ウシ、ヤギ、ウマ、ジュゴン、イルカ・クジラ類）が同定された（第8表）。

出土数の多いⅤ層、Ⅴs層南西部、Ⅴs層北東部、Ⅳ層、Ⅱ層における骨類全体の組成をみると（第23図）、縄文中期～後期のⅤ層および同時期の資料が主体と考えられるⅤs層南西部ではイノシシと魚類が主体をなし、ウミガメ類、イヌ、クジラ類が混じる点で共通する。Ⅴs層南西部ではリクガメ類、ウミガメ類、ジュゴンがやや多くみられた（第20表）。これに対して貝塚時代後期のⅣ層および同時期の資料を多く含むと思われるⅤs層北東部では魚類がみられず、イノシシが主体となる点で対照的な様相である。近世～近代のⅡ層では、イノシシ類（おそらくほとんどがブタ。詳細は後述）とウシが多く、ウマ・ヤギがみられるなど、下層とは大きく異なった組成となっている。

(3) 魚類

魚骨を多く出土したⅤ層とⅤs層南西部について、その組成をみると（第24図）、いずれもベラ科、ハリセンボン科を主体として、ブダイ科も普通である点では共通するが、Ⅴ層ではハリセンボン科が最多種であるのに対して、Ⅴs層南西部ではベラ科が最多種である。またⅤs層南西部ではフエフキダイ科、フエダイ科、サメ類なども普通で、種数が多い。ただし先述のとおり、Ⅴ層とⅤs層の骨は、本来は同一の資料群であったと考えられることから、上記のような差異はⅤ層の資料数が少ないために生じた偶然的偏りによるものではないかと推測される。

なお主要種の同定所見について簡単に補足する：ベラ科の咽頭骨はすべてシロクラベラ型（菅原2008）である。ブダイ科の咽頭骨・前上顎骨・歯骨はアオブダイ属が主体だが、イロブダイ属も若干みられた。フエフキダイ科の前上顎骨は、ヨコシマクロダイが1点みられた以外はすべてフエフキダイ属（ハマフエフキに類するタイプ）である。

(4) イノシシ類（イノシシ・ブタ）

イノシシ類の骨は各層から出土しているが、とくにⅤ層・Ⅴs層からNISP合計1000点以上におよぶ大量の資料が出土したほか、近世のⅡ層でも保存良好な顎骨を中心として良好な資料が得られている。以下、両層の資料について詳細を記載する。

Ⅴ層・Ⅴs層のイノシシ

全身の骨格部位が出土しているが、部位ごとのMNIは上腕骨遠位端が72と突出して多く、その他の部位では最も多い踵骨でも36、多くは10～30前後にとどまる。また歯の中ではオスの下顎犬歯の数が突出している（第19表）。こうした部位の偏りが何を意味するかについては現時点では不明であり、今後タフォミーや骨器生産などとの関連も含め、さらに検討する必要がある。ただし犬歯の多産に関しては、何らかの目的でオス犬歯の選択的な利用が行われていた可能性も考えられる。

下顎骨の臼歯放出状況によって年齢構成をみると、前臼歯列を観察できる資料35点のうち、乳臼歯が残るものは4点のみであった。また後臼歯の萌出状況を観察できる資料では、M1（第1後臼歯）が

萌出中1点、萌出完了19点、M2が未萌出1点、萌出完了12点、M3が未萌出・萌出中各3点、萌出完了11点であった。成獣を主体として、幼獣・未成獣が若干混じる構成である。

下顎骨の犬歯による性査定可能な資料によって性比をみると、オス8点、メス9点で、偏りは認められなかった。

形質的にブタの可能性のある資料は確認されていない。また上記の年齢構成や性比の面からも家畜化の兆候は認められない。

II層のイノシシ類（ブタ）

全身の骨格部位が出土しているが、とくに顎骨（とくに下顎骨）の良好資料が多数得られた。MNIは下顎骨で12と算定されたのに対し、四肢骨では最多でも6にとどまり、部位組成が顎骨に偏る傾向が明らかである。

下顎骨は保存状態のよい資料が多く、左右が連合した資料が7点得られた（図版38上）。これらは以下の形質的特徴からブタと判定される：(1) 白歯列は湾曲が強く、M3が存在する資料ではその後方が頰側に傾く。(2) 野生種に比べて下顎骨体の高／長比が大きく、肥厚が認められる。(3) 側面視では下顎骨体下底と連合部下面の成す角度が野生種より狭く、連合部下面は強く湾入する。これらはいずれも家畜化の進行に伴う下顎の短縮を示す特徴である。

下顎骨の白歯萌出状況によって年齢構成みると（第15表）、後白歯の萌出状況を確認できる資料15点のうち、M1は全点で萌出完了、M2は未萌出・萌出中各1点、萌出完了11点、M3は未萌出・萌出中各3点で、ほとんどの個体がM2完出～M3萌出中の段階（生後1.5～2歳前後）で屠殺されている。同様に成熟前の特定の成長段階で屠殺するパターンは糸満市阿波根古島遺跡（金子1990）、今帰仁城周辺遺跡（樋泉2007a）などでも確認されており、これらのイノシシ類が飼育されていたことを示す証拠と解釈されている（ただし阿波根古島遺跡ではM1萌出完了～M2萌出中（約1～1.5歳）で屠殺されている個体が多く、本遺跡より屠殺年齢がやや若い）。また下顎骨の犬歯による性査定可能な資料によって性比をみると、オス4点、メス11点で、メスに偏る傾向が認められた。

以上のように、II層出土のイノシシ類の顎骨は、形質、年齢構成、性比の各面において、狩猟によって得られた野生イノシシとは明確に異なったパターンを示していることから、その全てまたは大部分がブタ（飼育された個体）であると推定される。

四肢骨については、一部に明瞭な短縮化を示す資料（図版39上）があり、これらについてもブタと判定されるが、その他の資料についてはイノシシ（野生個体）とブタ（飼育個体）の判別は難しい。ただし、上記の顎骨の状況から類推すれば、これらもブタとみなして差し支えないと思われる。

3. 考察

今回出土した骨類は、縄文中期～後期のV層および同時期の資料が主体と考えられるVs層南西部の資料が著しく多く、近世～近代のII層の資料も充実しており、これらの時期の動物資源利用の様相を示す資料として重要である。

今回の調査地区の周辺で骨類を多数出土した遺跡としては、同じ伊礼原遺跡群で今回の調査区の北側に隣接する伊礼原遺跡（低湿地区：曾畑式期主体、砂丘区「貝集積土坑」：面縄前庭式期。樋泉2007b）、その西側（海岸寄り）に位置する伊礼原D遺跡4トレンチ（1～2グリッド：貝塚時代後期後半主体、5～6グリッド：グスク時代主体、7～10グリッド：近世以降。（樋泉2008））、今回調査地区の南東約300mに位置する小堀原遺跡（IV層：貝塚時代後期。（樋泉2009））があり、さらに南方約1.5kmに北谷城（V～IV層：グスク時代～近世。（樋泉2010））、同約3kmに新城下原第二遺跡（IX層：爪形文土器期。（金子・久貝2006））がある。

本遺跡 V 層・Vs 層南西部の資料は伊礼原遺跡砂丘区「貝集積土坑」と同時期から後続する縄文後期の資料を含んでいる可能性が高く、これまで資料の少なかった縄文後期の様相をある程度示している可能性がある。II 層の資料は伊礼原 D 遺跡 4 トレンチ 7～10 グリッドとおおむね同時期に相当するものと思われる。

本遺跡と周辺遺跡の脊椎動物遺体組成を比較するため、全遺跡のデータを併せ、脊椎動物遺体全体の組成を第 25・26 図に、魚骨組成を第 27・28 図にそれぞれ示した(第 26・28 図は MNI 比、図 4、図 6 は NISP 比による)。なお、伊礼原 D 遺跡では資料の所属層位・年代の判定が難しい資料が多かったため、MNI の算出は行わず、グリッド別に NISP のみを集計したが、ある程度の年代的な傾向は示されていると思われる。以下、本遺跡の V 層・Vs 層南西部および II 層の様相について、周辺遺跡と比較しながら、その特徴について検討する。

(1) V 層・Vs 層南西部(縄文中～後期)の様相

伊礼原遺跡砂丘区「貝集積土坑」と同年代の資料が含まれるが、遺体群の組成は大きく異なる。すなわち、伊礼原遺跡砂丘区「貝集積土坑」では魚類が圧倒的に多く、次いでリクガメが多いのに対して、本遺跡ではイノシシが多く、魚類とリクガメ類は比較的少ない(第 25・26 図)。魚類組成をみても、伊礼原遺跡砂丘区「貝集積土坑」ではブダイ科が圧倒的に多いのに対して、本遺跡ではベラ科、フエキダイ科、ハリセンボン科が優占し、ブダイ科は少ない(第 27・28 図)。こうした本遺跡の組成は、むしろ貝塚時代後期の小堀原遺跡や伊礼原 D 遺跡 4 トレンチ 1～2 グリッドにきわめて近い。

いっぽうで、沖縄諸島全体をみれば、伊礼原遺跡砂丘区「貝集積土坑」のあり方は同時代のうるま市古我地原遺跡(金子 1987)とよく似ており、さらに縄文後期(貝塚前期)～貝塚後期のサンゴ礁海岸の遺跡においても同様の様相が普遍的に認められる(伊波 1982、桶泉 2002・2006、名島 2003)。これに対して、本遺跡や小堀原遺跡、伊礼原 D 遺跡 4 トレンチ 1～2 グリッドのあり方はむしろ特異的である。

以上のように、当地域の貝塚時代の狩猟・漁労のあり方は、他地域に比べてかなり複雑な様相を呈しており、今後その背景についてさらに検討を進める必要がある。

(2) II 層(近世～近代)の様相

ブタを主体として、ウシがこれに次ぎ、ウマなどが混じる。魚骨はごく少なく、海浜部にありながら、ブタの飼育とウシを利用した農耕に生業の主力がおかれていたことが示唆される。こうした様相は、おおむね同時代と思われる伊礼原 D 遺跡 4 トレンチ 7～10 グリッドと共通しており(第 26 図)、糸満市阿波根古島遺跡(金子 1990)でも類似の様相が確認されている。近世～近代における一般集落での動物利用のあり方を示す資料として重要である。

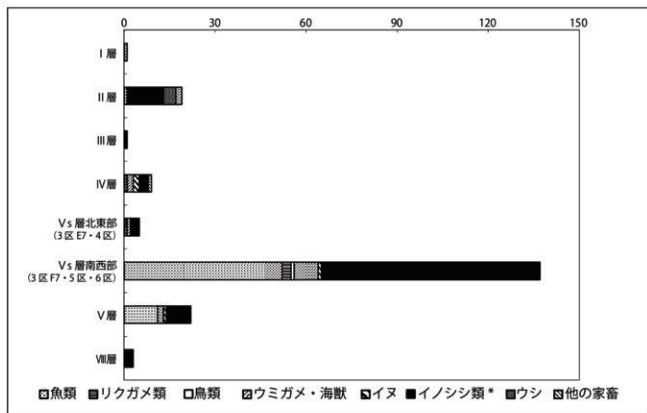
いっぽうで、本遺跡と伊礼原 D 遺跡を比較すると、本遺跡ではブタの比率が高く、また出土部位が顎骨に偏在している。隣接する遺跡間にみられるこのような差異については、一連の生活空間内における場の性格の違いを示している可能性も考えられる。この点については各遺跡の性格や資料の産状などの検討を踏まえた上で、改めて考察したい。

謝辞

北谷町教育委員会の山城安生氏、東門研治氏、松原哲志氏、島袋春美氏、には、整理分析に際して多くのご教示・ご助力を賜った。また島袋氏には同定・集計に関わる膨大な基礎作業を主導していただいた。国立歴史民俗博物館西本豊弘氏には現生骨格標本を参照させていただいた。以上の方々には厚く御礼申し上げます。

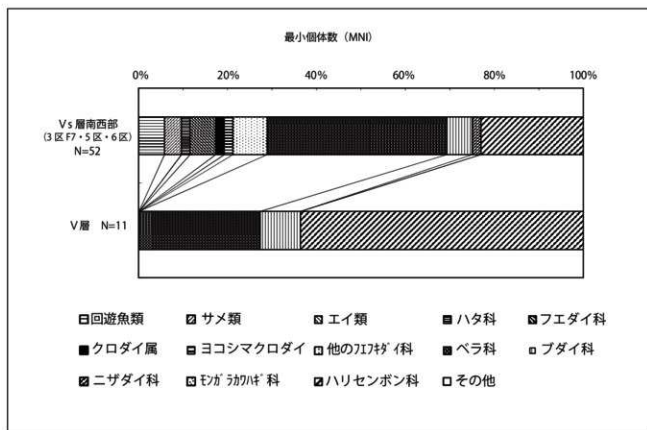
<参考文献>

- 伊波寿賀子 (1982) 「沖縄本島先史時代から見た漁撈活動について—出土魚骨の同定をもとに—」『物質文化』38 : 1-13。
- 金子浩昌 (1987) 「節足・脊椎動物遺存体」『石川市古我地原貝塚—沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)』, pp. 363-387. 沖縄県教育委員会。
- 金子浩昌(1990)「阿波根古島遺跡出土の脊椎動物」『阿波根古島遺跡—那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告』, pp. 130-153. 沖縄県教育委員会。
- 金子浩昌・久貝芳嗣 (2006) 「動物遺体」『新城下原第二遺跡』, pp. 261-286. 沖縄県立埋蔵文化財センター。
- 菅原広史 (2008) 「津堅キガ浜貝塚出土脊椎動物遺体の再分析」『南島考古』27 : 57-67。
- 樋泉岳二 (2007a) 「今帰仁城周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群—Ⅲ区 b・東7区・シニグンニー—」『今帰仁城周辺遺跡Ⅲ』, pp. 253-282. 今帰仁村教育委員会。
- 樋泉岳二 (2007b) 「伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群」『伊礼原遺跡—伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査事業—』, pp. 480-534. 北谷町教育委員会。
- 樋泉岳二 (2008) 「伊礼原 D 遺跡第 3・第 4 トレンチ出土の脊椎動物遺体」『伊礼原 D 遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成 10~14 年度)—』, pp. 184-196. 北谷町教育委員会。
- 樋泉岳二 (2009) 「小堀原遺跡出土の脊椎動物遺体」『小堀原遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成 11~13 年度)—』, pp. 189-198. 北谷町教育委員会。
- 樋泉岳二 (2010) 「北谷城(城門地区)出土の脊椎動物遺体」『北谷城—伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査事業—』, pp. 126-137. 北谷町教育委員会。
- 樋泉岳二(2002)「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』, pp. 47-66. 熊本大学文学部。
- 樋泉岳二 (2006) 「脊椎動物遺体みる奄美と沖縄」『先史琉球の生業と交易 2—奄美・沖縄の発掘調査から—』, pp. 101-114. 熊本大学文学部。
- 名島弥生 (2003) 「琉球列島における遺跡出土魚種組成の比較」『東海史学』38 : 75-96



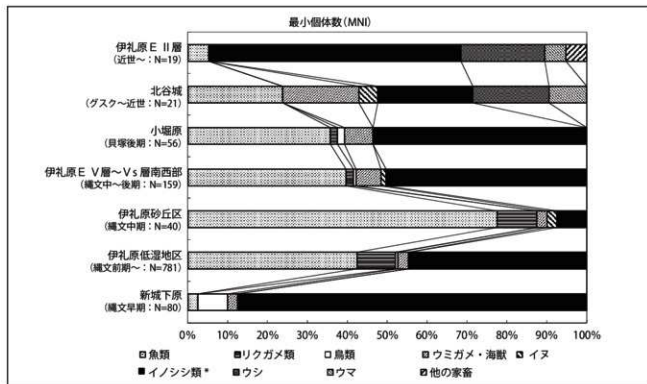
第23図. 伊礼原E遺跡から出土した脊椎動物遺体の層別最小個体数(MNI)と組成.

* II層のイノシシ類は、その多くがブタと思われる。



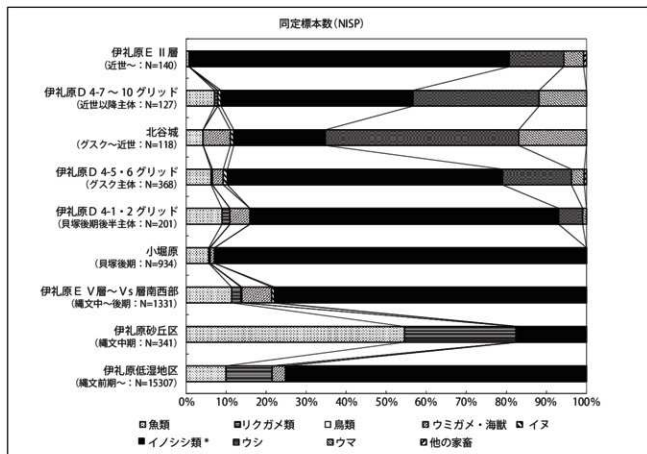
第24図. 伊礼原E遺跡Vs層(3区F7・5区・6区)とV層から出土した魚類遺体の組成(MNI比).

回遊魚類:アジ類, スマノカツオ.



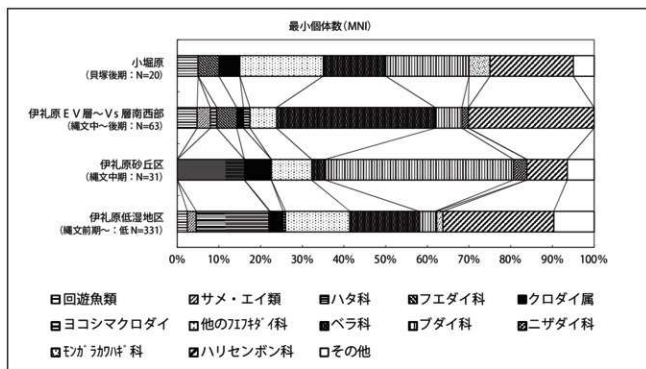
第25図. 北谷町域の遺跡における脊椎動物遺体群(ピックアップ資料)の組成の変遷(1): MNI比.

* ()内は年代: MNI総数. 伊礼原 E II層のイノシシ類の大半はブタ. 北谷城のイノシシ類にもブタが含まれる.



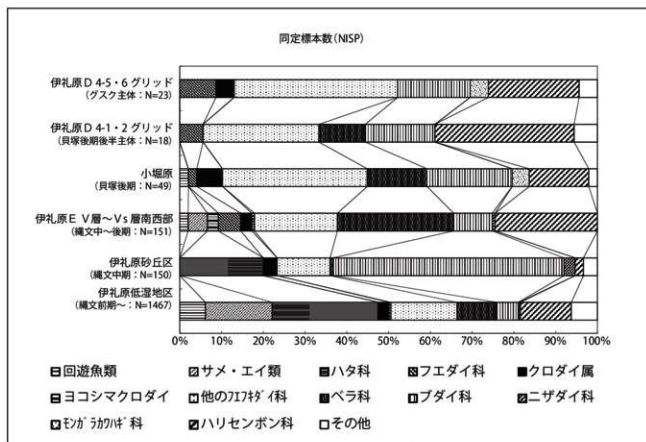
第26図. 北谷町域の遺跡における脊椎動物遺体群(ピックアップ資料)の組成の変遷(2): NISP比.

* ()内は年代: NISP総数. 伊礼原 E II層のイノシシ類の大半はブタ. 北谷城のイノシシ類にもブタが含まれる.



第27図. 北谷町域の遺跡における魚類組成(ピックアップ資料)の変遷(1):MNI比.

MNI合計10以上の遺跡のみ表示。回遊魚:ダツ・カマス・アジ類・マクロカツオ類。



第28図. 北谷町域の遺跡における魚類組成(ピックアップ資料)の変遷(2):NISP比.

NISP合計10以上の遺跡のみ表示。回遊魚:ダツ・カマス・アジ類・マクロカツオ類。

第8表. 伊礼原E遺跡から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

軟骨魚綱	CHONDRICHTHYES
メジロザメ科	Carcharhinidae
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
ハタ科	Serranidae
ギンガメアジ属	<i>Caranx</i> sp.
フエダイ科	Lutjanidae
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i> sp.
ヨコシマクロダイ	<i>Monotaxis grandoculis</i>
フエフキダイ属 (ハマフエフキ型)	<i>Lethrimus</i> cf. <i>L. nebulosus</i>
ベラ科 (シロクラベラ型)	Labridae cf. <i>Choerodon shoentini</i>
イロブダイ属	<i>Balbometopon</i> sp.
アオブダイ属	<i>Scarus</i> sp.
カツオノスマ	<i>Katsuwonus pelamis</i> / <i>Euthynnus affinis</i>
ニザダイ科	Acanthrinidae
ハリセンボン科	Diodontidae
爬虫綱	RRPTILIA
リュウキュウヤマガメ	<i>Geomyza spengleri japonica</i>
ウミガメ科	Cheloniidae
鳥綱	AVES
目不明	Order Indet.
哺乳綱	MAMMALIA
ネズミ科	Muridae
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
ウマ	<i>Equus ferus</i>
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
ヤギ	<i>Capra hircus</i>
ウシ	<i>Bos taurus</i>
ジュゴン	<i>Dugong dugon</i>
イルカ類	Cetacea (large)
クジラ類	Cetacea (small)

第9表. 伊礼原E遺跡から出土したウミガメ類遺体一覧

層序	地区	ゲリッド	後頭頤骨		頭蓋骨		上腕骨		鳥口骨+肩甲骨		鳥口骨		尾骨	尺骨	寛骨	胛骨	肋骨	四股骨	肋骨板	縁骨板	背甲板	剣状骨板	腹甲板		不明	合計		
			R	fr	L	R	?	L	R	fr	L	L											R	fr			fr	fr
Vs	3K	F7				1				1									4	5	3	2	1	14	4	35		
	4K	F8																						1		1		
	5K	G7			2				1										1	2	6	2	5	1	3	29	5	57
	5/6K	G7/8	1																								1	
	6K	G8		1	3	1	1		1		1	1				1				1	3	6	5		3	16	3	47
		H8					2				1				1							2				1	1	8
V	3K	E7																							1	1	2	
		F7																		1						3	4	
	5K	G7																		1						1	1	
	6K	G8																							1	1	1	
不明	3K	F7		1							1	1	1												1	5		
	5K	G7																			2						2	
合計			1	2	5	2	3	1	2	1	2	2	1	1	1	1	2	7	1	14	13	15	2	6	67	14	165	

第 10 表. 伊礼原 E 遺跡から出土した魚類遺体一覧

標準	地区	グリッド	メジロザメ型		サメ類		ハタ科?		ハタ科?		キリンガメ/フシ編		フエダイ科		クロダイ属				ヨロシメ/クロメノイ		ハマフエフキ型		フエフキダイ属			フエフキダイ科				シロカラベラ型			ベラ科			イロアダイ属			アオブダイ属				フダイ科		ニギサダイ科		ハリセンボン科		合計	個別合計						
			椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨	椎骨														
	II	3E	E7																																								1	1	1											
	Vs	3E	F7	1																																																43				
		5E	G7	3	1			1																																											41					
		6E	G8	1	1	1	1	1	1																																											48				
				H8																																																1				
	V	1E	D7																																																1	1				
			E7																																																	6	8			
		3E	F7																																																	1	1			
		4E	F8																																																		2	3		
		5E	G7																																																		1	1		
	6E	G8																																																		2	3			
	不明	6E	G8																																																	1	1			
			?																																																			1	4	
			合計	5	2	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	4	3	1	1	1	2	1	2	1	3	2	1	4	1	4	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	4	7	28	1	158	158

第11表. 伊礼原E遺跡から出土したリクガメ類遺体一覧.

層準	地区	グリッド	緑骨板	肋骨板	背甲板	上腹板	中腹板		中/下腹板	下腹板		側状骨板		腹甲板	甲板	合計
					fr	R	L	R	fr	L	R	L	R	fr	fr	
IV	3K	F7		1												1
Vs	3K	E7	1													1
		F7	4	1					3	1			1	1		11
	5K	G7	2				1		1		1	1			1	8
	6K	G8	5	1	1	1	1	2		2	1			1		15
H8												1			1	
不明	6K	G8													1	
合計			12	3	1	1	2	2	4	3	2	2	3	2	1	38

第12表. 伊礼原E遺跡から出土した鳥類・ネズミ・ヤギ遺体一覧

X・Y・Zは出土位置の座標

種類	層準	地区	グリッド	遺物番号	部位	位置	左右	備考	X	Y	Z
鳥類 (同定不可)	Vs	5K	G7-1	G7-2284	不明(長骨)	骨幹	?	焼	35719.838	25877.097	1.574
		6K	G8-50	G8-2474	尺骨	骨幹	?		35692.64	25902.202	1.70
			G8-30	G8-1471	尺骨	骨幹	?		35701.607	25900.023	1.886
ネズミ科	Vs	6K	G8-50	G8-2472	大腿骨	逆位端	L	大型.ケナガネズミ?	35691.677	25902.059	1.769
ヤギ	I	3K	F7-?	F7-?	下顎M1		L		-	-	-
	II	6K	G8-14	G8-104	上顎M1		R		35712.626	25920.675	3.368
	IV	6K	H8-1	H8-31	大腿骨	完存	L	両骨端未癒合脱落	35685.576	25907.883	2.69

第13表. 伊礼原E遺跡から出土したイヌ遺体一覧

X・Y・Zは出土位置の座標

層準	地区	グリッド	遺物番号	部位	左右	X	Y	Z
IV	3K	E7-52	E7-1195	下顎骨	L	35753.318	25880.142	2.092
		E7-52	E7-1032	下顎骨	L	35753.22	25881.358	2.502
		E7-52	E7-1182	焼骨?	?	35751.947	25883.367	2.25
		F7-11	F7-51	下顎骨	R	35744.653	25875.01	2.343
Vs	5K	G7-44	G7-1658	下顎骨	R	35699.156	25893.453	1.599
		G7-43	G7-2066	上顎骨	R	35698.388	25887.553	1.527
		G7-45	G7-1855	大腿骨	L	35696.423	25896.506	1.696
	6K	G8-30	G8-3613	上顎骨	R	35701.931	25902.509	1.785
		G8-30	G8-3614	上顎骨	R	35701.716	25902.552	1.792
		G8-41	G8-2220	上顎骨	L	35696.523	25905.778	1.795
		G8-40	G8-2245	下顎骨	L	35697.332	25902.225	1.838
		G8-50	G8-2454	肩甲骨	R	35692.276	25904.394	1.809
V	6K	G8-41	G8-1528	上顎骨	L	35699.09	25905.593	1.964

第15表-1. 伊礼原E遺跡から出土したイノシシ・ブタ下顎骨の詳細。

[] : 顎骨残存範囲, () : 萌出中の歯, <> : 未萌出歯, × : 脱落。

層序	地区	ゲナド	遺構	LR	適合部	I1 I1	I2 I2	I3 I3	C c	P1	P2 m1	P3 m2	P4 m3	M1	M2	M3	下顎角	四角突起	筋突起	性別	備考	
II	3K	E7		R											[M2]							
II	3K	F7		L							[m2x <P3>		m3x <P4>	M1	(M2)						ブタ	
II	3K	F7		L			[I3x	Cx			P2x	P3x	P4x								♀ブタ	
II	3K	F7		L				[cx			m1x	m2x										
II	3K	F7	SX002	L												[+]						
II	3K	F7		L									[P4x	M1	M2	(M3)					ブタ	
II	3K	F7		L									[P4x	M1x	M2	<M3>					ブタ	
II	3K	F7	SX002	L	[+	I1x	I2x	I3x	<C>	-	m1x	m2x	m3	M1	<M2>	-	+]					ブタ
II	3K	F7	SX002	L					[Cx		P2x	P3x	P4x	M1	M2						♀ブタ	
II	3K	F7	SX002	L							[P2x	P3x	P4	M1	M2	(M3)		+ - +]			ブタ	
II	3K	F7		R	[+	I1x	I2x	I3x	Cx		P2x	P3x	P4x	M1	M2						♀ブタ, 左右適合	
II	3K	F7	SX002	R	[+	I1	(I2)	x	C													♀ブタ, 左右適合
II	3K	F7	SX002	R	[+	I1	(I2)	x	x	-	P2x	P3x	P4	M1							♀ブタ, 左右適合	
II	3K	F7	SX002	R	[+	I1x	(I2)	x	(C)	-	P2x	P3	P4	M1x							♀ブタ, 左右適合	
II	3K	F7	SX002	R	[+	(I1)	x	x	x	(P1)	P2x	P3	P4	M1	M2	<M3>					♂ブタ, 左右適合	
II	3K	F7	SX002	R	[+	(I1)	x	x	x	(P1)	P2x	P3	P4	M1	M2	<M3>					♂ブタ, 左右適合	
II	3K	F7	SX002	R	[+	I1x	I2x	I3x	Cx	-	P2x	P3	P4	M1	M2	(M3)					♀ブタ, 左右適合	
II	3K	F7	SX002	R	[+	I1x	I2x	I3x	C	-	P2x	P3x	P4x	M1	M2	(M3)					♀ブタ, 左右適合	
II	3K	F7	SX002	R	[+	x	<I2>	x	(C)	-	P2x	P3	P4								♂ブタ, 左右適合	
II	3K	F7	SX002	R	[+	x	<I2>	x	(C)	-	P2x	P3	P4	M1	M2						♀ブタ, 左右適合	
II	3K	F7	SX002	R	[+	x	<I2>	x	(C)	P1	P2	P3	P4	M1	M2						♀ブタ, 左右適合	
II	3K	F7	SX002	R					(C)	P1x	P2x						[+ + +]				同一個体	
II	3K	F7		R													[+]					
II	3K	F7		L+R	[+]																	
II	3K	F7		L+R	[+]																	
II	3K	F7		R				[Cx	-	P2											♂	
II	3K	F7		R				[Cx	-	P2x	P3x	P4x	M1x								♀ブタ	
II	3K	F7	SX002	R									[P4	M1	M2						ブタ?	
II	3K	F7	SX002	R										[M1x	M2							
II	3K	F7	SX002	R				[Cx	-	P2	P3x										♂	
II	3K	F7	SX002	R				[Cx	-	P2x	P3x										♀	
II	?	?		R	[+	x	x	x	x		P2x										♀ブタ, 左右適合	
II	?	?		R				[Cx	-	P2x	P3	P4	M1								♀ブタ	
IV	3K	F7		R												[M3x						
IV	3K	F7		R														[+]				
IV	5K	G7		R			[Cx			P2x	P3x	P4x									♂	
IV	5K	G7		R												[M3x						
Vs	3K	F7		L														[+]				
Vs	3K	F7		L												[M3x						
Vs	3K	F7		L						[P2x	P3x	P4x										
Vs	3K	F7		L	[+	I1x	I2x	I3x	Cx		P2x	P3x	P4x	M1x	M2	M3					♀	
Vs	3K	F7		L+R	[+]																	
Vs	3K	F7		R												[M3x					ゴカイ糖質付着	
Vs	3K	F7		R									[P4x	M1x	M2x	<M3>x						
Vs	3K	F7		R							[P2x	P3x	P4x	M1x								
Vs	3K	F7		R							[P2x	P3x	P4x									
Vs	3K	F7		R							[P2x	P3x										
Vs	3K	F7		R											[(M2/M3)x							
Vs	3K	F7		R											[M3x							
Vs	3K	F7		R			[Cx			P2x	P3x	P4x									♂	
Vs	3K	F7		R											[M3							
Vs	3K	F7		R											[M3							
Vs	5K	G7		L				[C													♀	
Vs	5K	G7		L			[Cx			m1x	m2x	m3x									♂	
Vs	5K	G7		L											[M3x							
Vs	5K	G7		L											[(M2/M3)x							
Vs	5K	G7		L											[(M2/M3)x							
Vs	5K	G7		L											[(M3)x							
Vs	5K	G7		L											[(M3)x							

(次ページにつづく)

第15表-2. 伊礼原E遺跡から出土したイノシシ・ブタ下顎骨の詳細.

標準地区	ケラト	LR	連合部	I1 I1	I2 I2	I3 I3	C c	P1	P2 P2	P3 P3	P4 P4	M1	M2	M3	下顎角	四脚突起	筋突起	性別	備考			
Vs 5K G7	L						[Cx		P2x	P3x	P4	M1							♂			
Vs 5K G7	L						[Cx		P2x	P3x									♂			
Vs 5K G7	L			[I2x	I3x		Cx		P2x	P3x									♀			
Vs 5K G7	L											[M1x	M2	(M3)								
Vs 5K G7	L											[M1x	M2	~M3>								
Vs 5K G7	L											[M1x	M2	M3								
Vs 5K G7	L											[M2	M3									
Vs 5K G7	L													[M3								
Vs 5K G7	L													[M3								
Vs 5K G7	L						[P1x	P2x	P3	P4												
Vs 5K G7	L							[P2x	P3x	P4x	M1x											
Vs 5K G7	L							[P2x	P3x	P4	M1											
Vs 5K G7	L							[P2x	P3x	P4x												
Vs 5K G7	L										[P4	M1										
Vs 5K G7	R	[+	I1x]																	♀	左右連合	
Vs 5K G7	L	[+	I1x	I2x	I3x	Cx																
Vs 5K G7	L+R	[+											[(M2/M3)x									
Vs 5K G7	R						[Cx		P2x	P3x	P4x	M1x								♀		
Vs 5K G7	R			[I3x	C	-			P2x	P3x										♀		
Vs 5K G7	R								[m2	m3	M1											
Vs 5K G7	R								[P2x	P3x	P4x	M1x	M2x									
Vs 5K G7	R								[P3x	P4x	M1x	M2x										
Vs 5K G7	R								[P3x	P4												
Vs 5K G7	R														[+							
Vs 5K G7	R														[+		[+					
Vs 5K G7	R																[+					
Vs 6K G8	L													[(M2/M3)x								
Vs 6K G8	L						[cx	m1x	m2x	m3x												
Vs 6K G8	L						[Cx	P2x	P3x												♂	
Vs 6K G8	L						[Cx	P2x	P3x												♂	
Vs 6K G8	L			[I2x	I3x	C	-	P2x													♀	
Vs 6K G8	L										[M1x	<M2>x										
Vs 6K G8	L											[M2										
Vs 6K G8	L											[M2										
Vs 6K G8	L									[m3x	(M1)x											
Vs 6K G8	L													[M3x								
Vs 6K G8	L													[M3x								
Vs 6K G8	L													[M3x								
Vs 6K G8	L								[P2x	P3	P4	M1x	M2x	M3							ごく小	
Vs 6K G8	L									[P4x	M1	M2	<M3>									
Vs 6K G8	L+R	[+																				
Vs 6K G8	R						[Cx	-	P2x	P3			[M2	M3							♂	
Vs 6K G8	R												[M3									
Vs 6K G8	R												[M3									
Vs 6K G8	R												[M3x									
Vs 6K G8	R												[M3x									
Vs 6K G8	R								[P2x	P3x	P4x											
Vs 6K G8	R								[P2x	P3	P4x	M1x	M2x									
Vs 6K G8	R	[+	I1x	I2x	I3x	Cx			P2x	P3x	P4x	M1x	M2								♀	
Vs 6K G8	R														[+							
Vs 6K H8	R	[+	I1x	I2x	I3x	C															♀	左右連合
Vs 6K H8	L	[+	I1x]																			
Vs 6K H8	R						[Cx		P2x	P3x	P4x										♂	
Vs 6K H8	R								[P2x	P3	P4											
V 3K E7	L										[m3x	(M1)x										
Ⅷ 4K F8	L						[Cx		P2x	P3x												
? 3K F7	L												[(M2/M3)x									
? 3K F7	R	[+	I1x	I2x	I3x	Cx															♀	左右連合
? 5K G7	R	[+	I1x	I2x	I3x	C	-	P2x	P3x	P4x	M1x										♂	
? ?	R													[M3x								
表採 ? ?	L													[M3x								

第16表. 伊礼原E遺跡から出土したイノシシ・ブタ上顎骨の詳細.

[]:顎骨残存範囲.():萌出中の歯.< >:未萌出歯.×:脱落.

層準	地区	グランド	遺構	LR	I1 i1	I2 i2	I3 i3	C c	P1	P2 m1	P3 m2	P4 m3	M1	M2	M3	性別	備考
II	3区	F7	SX002	L							[m2	m3]					ブタ?
II	3区	F7	L								[P3]						ブタ?
II	3区	F7	SX002	R				[Cx	P1x	P2x	P3x]						♂ ブタ?
II	3区	F7	R												[M3]		ブタ?
Vs	3区	F7	L								[m3	M1]					
Vs	3区	F7	L											[M2	M3]		
Vs	5区	G7	L											[M2]			
Vs	5区	G7	L									[M1	(M2)]				
Vs	6区	G8	L												[M3]		
Vs	6区	G8	R								[P3]						
Vs	6区	G8	R					[Cx	P1x	P2x	P3x]						♀
VI	4区	F8	R					[Cx	P1x	P2x	P3x]						
?	3区	F7	L								[P3]						
?	3区	F7	R					[Cx	P1x	P2x	P3x]						♀
?	3区	F7	R											[M2]			
?	?	?	L								[P4]						

第17表. 伊礼原E遺跡から出土したウシ・ウマ遺体一覧

層準	地区	グランド	遺構	ウシ										ウマ						ウシ/ウマ		合計			
				角々? 角々?	下顎 骨	下顎 遊離歯	上顎 骨		尺骨	第3 手根骨	脛骨	未 癒骨	切 歯	上顎		踵骨	基礎 骨	歯 破片	椎骨	四肢 骨					
							d	p						L	R						L		R	L	R
II	1区	C7	SX001																					1	
		D7	-						1																2
	3区	E7	SX001																						1
			SX008																						1
			-	1	2				1	1				1											7
		F7	SK012 SX002			3																			3
	4区		-			5					1	1		1	1	1									14
			-																						2
		E8	-																						1
		F8	-			1																			1
	5区	G7	-																						1
		G8	-			1	1				1														7
	6区	H8	-																						1
		?	-																						1
			合計	1	2	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	14	43	

第18表. 伊礼原E遺跡から出土したウシ顎骨・歯の詳細.

[]:顎骨残存範囲(表記のないものは遊離歯).():萌出中の歯.< >:未萌出歯.×:脱落.

層準	地区	グランド	遺構	上下	LR	I1 i1	I2 i2	I3 i3	C c	P2	P3 m2	P4 m3	M1	M2	M3	下 顎 角	備考
II	3区	E7	-	下顎	R	[x	x	x	x	P2	P3	P4	M1	M2	M3	[+]	同一個体
II	3区	F7	SK012	下顎	L	[x	x	x	x	P2	P3	P4	M1	M2	M3	[+]	
II	3区	F7	SX002	下顎	L								M1	M2	M3		
II	3区	F7	SX002	下顎	R						P3		M1	M2	M3		
II	4区	F8	-	下顎	L								M1				
II	6区	G8	-	下顎						P2							

第20表. 伊礼原E遺跡から出土した脊椎動物遺体の組成.

分類群	同定標本数 (NISP)											最少個体数 (MNI)									
	I	II	III	IV	Vs						V	VI	不明	I	II	III	IV	Vs		V	VI
					3IK7	4K	3IK7	5K	6K	1K・3IK7・4K								3IK7・5K・6K			
					縄文中期～ 貝塚後期			縄文中～後期主体										縄文 中～後期	縄文前期		
?	近世/近代	グスク以降	貝塚後期				縄文中～後期 主体	縄文前期	?	?	近世/近代	グスク 以降	貝塚後期	縄文中期～ 貝塚後期	縄文中～後期 主体	縄文 中～後期	縄文前期				
メジロザメ科							1	3	1									1			
サメ類								1	1									1			
ハタ科									2									1			
ハタ型								1	1				1					—			
ギンガメアジ属									1									1			
アジ科								1										1			
フエダイ科							3	1	4									3			
クロダイ属							1	1	2									1			
ヨコシマクロダイ								1										1			
ハマフエフキ型							3	1	3									4			
フエフキダイ属							2	1	2									—			
フエフキダイ科							8	2	8									—			
シロクラベラ型							9	12	7	4		2						21	3		
ベラ科							2	4	4									—			
イロブダイ属								1	1									1			
アオブダイ属							4	2	2	1		1						2	1		
ブダイ科							1	1	1									—			
カツオノスマ							1											1			
ニザダイ科							1											1			
ハリセンボン科		1					7	8	9	13		1		1				12	7		
魚類計	0	1	0	0	0	0	43	41	49	18	0	5	0	1	0	0	0	52	11	0	
ウミガメ類						+	17	23	34	3		6						1	5	1	
リウガメ類				1	1		11	8	16			1			1	1		3			
鳥類								1	2									1			
ネズミ科									1									1			
イヌ				4				3	5	1					2			1	1	1	
イノシシ		112	1	46	2	18	229	382	369	58	8	63		12	1	3	3	72	8	3	
ヤギ	1	1		1									1	1		1					
ウシ		19												4							
ウマ		7												1							
ジュゴン				3			6	13	11			1				1		1			
イルカ類								1										1			
クジラ類							2	4	3	1		1				1		1	1		
合計	1	140	1	55	3	18	308	476	490	81	8	77	1	19	1	9	5	138	22	3	

第21表. 伊礼原E遺跡から出土したジュゴン遺体一覧

層準	地区	グリッド	頭頂骨	椎骨	椎骨 棘突起?	肋骨	肩甲骨	四肢骨	不明	合計
						fr	R	fr	fr	
IV	3区	E7				2				2
	3区	F7				1				1
Vs	3区	F7	1			4		1	1	7
	5区	G7		1		12				13
	6区	G8		1		9	1		1	12
不明	不明					1				1
合計			1	1	1	29	1	1	2	36

第22表. 伊礼原E遺跡から出土したクジラ・イルカ類遺体一覧

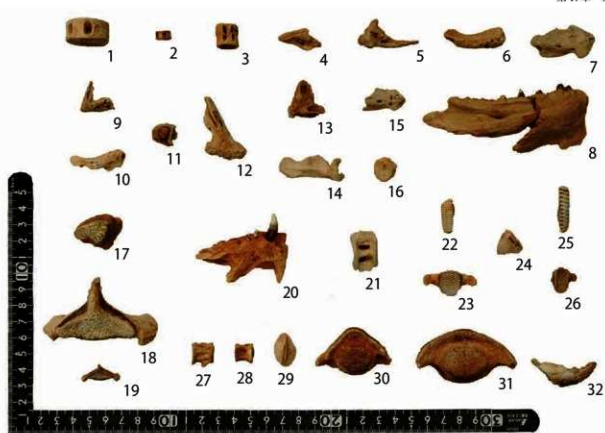
X・Y・Zは出土位置の座標

種類	層準	地区	グリッド	遺物番号	部位	備考	X	Y	Z
イルカ	Vs	5区	G7-43	G7-836	歯		35695.137	25889.346	1.686
クジラ	IV	5区	G7-32	G7-551	不明破片	焼	35701.492	25884.143	2.165
			F7-33	F7-2705	歯		35731.539	25887.818	1.785
	Vs	3区	F7-22	F7-1371	不明破片		35738.256	25881.274	1.755
			G7-3	G7-1580	不明破片		35716.218	25888.068	1.73
			G7-4	G7-692	不明破片	焼	35717.287	25893.941	1.81
		5区	G7-34	G7-1465	不明破片		35702.043	25893.974	1.721
			G7-34	G7-1471	不明破片		35701.223	25893.081	1.648
			G8-31	G8-2123	不明破片		35701.798	25907.758	1.897
		6区	G8-41	G8-2271	不明破片	焼	35695.909	25909.225	1.839
			G8-51	G8-3935	不明破片		35692.406	25909.928	1.789
			V	3区	E7-33	E7-1330	不明破片		35762.088
	表探	-	-	-	-	肋骨	-	-	-

第23表. 伊礼原E遺跡から出土したカニ類遺体一覧

X・Y・Zは出土位置の座標

層準	地区	グリッド	遺物番号	部位	X	Y	Z	備考
Vs	3区	F7-20	F7-1787	鋏脚	35737.197	25873.935	1.557	
	3区	F7-22	F7-367	鋏脚	35739.727	25882.706	1.900	
	3区	F7-51	F7-1544	鋏脚	35722.55	25876.249	1.531	
	3区	F7-54	F7-485	鋏脚	35723.929	25893.085	1.834	
	5区	G7-12	G7-698	鋏脚	35712.172	25881.894	1.739	
	5区	G7-14	G7-228	鋏脚	35712.165	25891.717	1.752	
	5区	G7-25	G7-392	鋏脚	35705.02	25895.401	1.931	
V	3区	E7-42	E7-1014	鋏脚	35757.288	25881.287	2.620	
	3区	-	-	鋏脚	-	-	-	縄文後明礬層



- 1・2 メジロザメ型椎骨 3. サメ類椎骨 4. ハタ科歯骨 (R) 5. ハタ科方骨 (R) 6. フェダイ科前上顎骨 (L)
 7. フェダイ科歯骨 (R) 8. アジ科歯骨 (R) 9. クロダイ属前上顎骨 (R) 10. クロダイ属歯骨 (R)
 11. ヨコシマクロダイ顎骨 12. ハマフエフキ型前上顎骨 (L) 13. フェフキダイ属方骨 (R)
 14. フェフキダイ科主上顎骨 (L) 15. フェフキダイ科歯骨 (R) 16. フェフキダイ科第一椎骨 17. シロクラベラ型上咽頭骨 (R) 18・19. シロクラベラ型下咽頭骨 20. ベラ科歯骨 (R) 21. シロクラベラ型椎骨
 22. イロブダイ属上咽頭骨 (L) 23. イロブダイ属下咽頭骨 24. アオブダイ属前上顎骨 (L)
 25. アオブダイ属下咽頭骨 (R) 26. アオブダイ属下咽頭骨 27. ブダイ科椎骨 28. カツオ or マス椎骨
 29. ニザダイ科楯鱗 30. ハリセンボン科前上顎骨 31. ハリセンボン科歯骨 32. カニ類鉗脚

図版 36 脊椎動物遺体 1 (魚類)



1～3. 鳥類（同定不能）四肢骨破片 4. ウミガメ類烏口一肩甲骨 5. ウミガメ類上腕骨(L) 6. ウミガメ類指骨
7. ウミガメ類肋骨板 8. ウミガメ類緑骨板 9. ウミガメ類腹甲板



図版 37 脊椎動物遺体 2 (上: 鳥類、ウミガメ類・下: クジラ、ジュゴン)

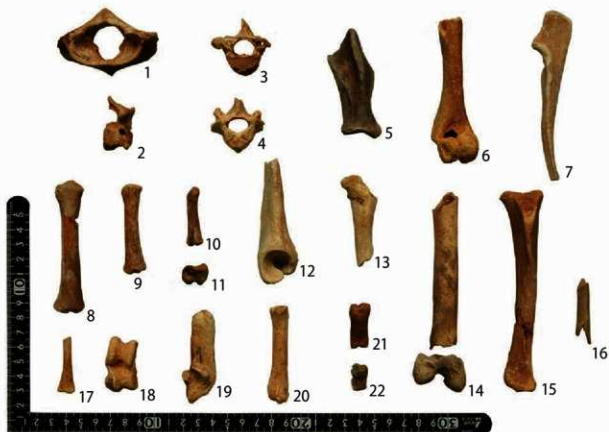
1・2. クジラ歯 3・4. ジュゴン椎骨部位不明 5. ジュゴン肩甲骨(R) 6～8. ジュゴン肋骨



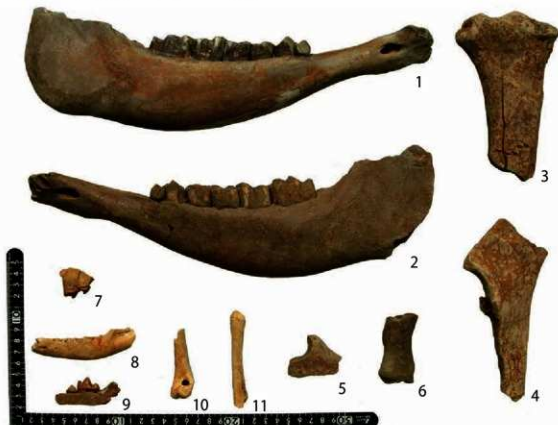
1～3. バタ下顎骨 4・5. バタ中足骨 (R)



図版 38 脊椎動物遺体 3 (上: バタ・下: イノシシ) 1. 前頭骨 2. 側頭骨 (R) 3. 上顎骨 (R) 4. 下顎骨
5. 下顎骨 (R) 6. 下顎骨 (R) 7. 下顎骨 (R・ゴカイ稜管付着) 8. 上 I¹(R) 9. 上 I²(R)
10. 上 C(R・オス) 11. 上 P¹(L) 12. 上 P¹(L) 13. 上 M¹(R) 14. 上 M²(R) 15. 下 I₁(R) 16. 下 I₂(R)
17. 下 C(R・オス) 18. 下 C(R・メス) 19～21. 下 M₃(R)



1. 頸椎 2. 頸椎 3. 胸椎 4. 腰椎 5. 肩甲骨 (R) 6. 上腕骨 7. 尺骨 (R) 8. 橈骨 (R) 9. 橈骨 (R) 10. 中手骨 (R)
11. 手根骨 12. 寛骨 (R) 13. 大腿骨 (R) 14. 大腿骨 (R) 15. 脛骨 (R) 16. 脛骨 (幼) 17. 腓骨 18. 踵骨 (R)
19. 踵骨 (R) 20. 中足骨 (L) 21. 基節骨 22. 中節骨



図版 39 脊椎動物遺体 4 (上: イノシシ・下: ウシ、イヌ骨)

1. ウシ下顎骨 (R) 2. ウシ下顎骨 (L) 3. ウシ橈骨 (R) 4. ウシ尺骨 (R) 5. ウシ末節骨
6. ウシ基節骨 7. イヌ上顎骨 8・9. イヌ下顎骨 (L) 10. イヌ上腕骨 (L) 11. イヌ大腿骨 (L)

第4節 伊礼原E遺跡出土の人骨

土肥直美 (琉球大学医学部)

藤田祐樹 (沖縄県立博物館・美術館)

1. はじめに

沖縄県北谷町伊礼原E遺跡から出土した人骨について報告する。出土した人骨は6区より検出された埋葬人骨2体と、3区、5区、6区の遺物集中部から検出された多数の散乱人骨片である。人骨の年代は考古学的所見から縄文時代中期から縄文時代後期に属すると考えられている。

2. 埋葬人骨

1) SX008人骨 (女性・熟年)

〈出土状況〉

頭蓋骨のみで他の部分は消失している。頭蓋骨は顔面を上にした状態であり、おそらく仰臥位で埋葬されていたものと思われるが、詳細は不明である。

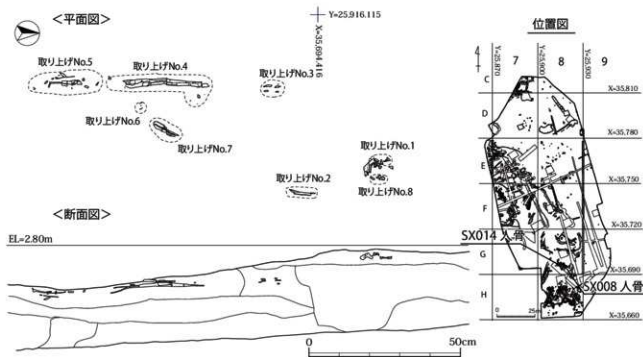
〈人骨所見〉

頭蓋骨は図2・図版1に示すように左頭頂骨・左側頭骨、後頭骨を含む後頭部骨である。側頭筋の発達を示す側頭骨の乳突上稜は明瞭であるが、外後頭隆起の発達は弱く、乳様突起の発達もそれ程顕著ではない。したがって、この頭蓋骨の性別は女性の可能性が高いと考えられる。年齢については、残存する矢状縫合、ラムダ縫合の外板・内板ともに癒合が進行していることから、熟年(40歳代～50歳代)と推定した。

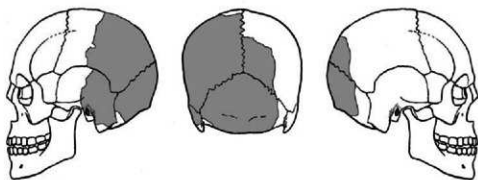
2) SX014人骨 (女性・成人)

〈出土状況〉

保存状態が悪く、取り上げ後に形態が保持されていたのは下顎骨と右大腿骨片のみである。詳細は不明であるが、検出状況(第29図)から、おそらく仰臥位の伸長葬だったと考えられる。



第29図 SX014人骨検出状況

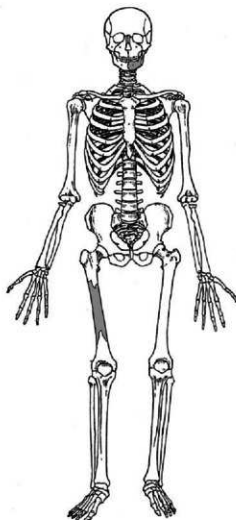


第30図 SX008人骨の出土部位

〈人骨所見〉

出土部位は下顎骨片と右大腿骨片である(第31図・図版41)。下顎骨も大腿骨も全体に華奢で、大腿骨の粗線の発達も弱いことから、性別は女性と考えられる。年齢については下顎骨歯槽部の形状から、20歳以上且つ老年に達していないことは確かであるが、詳細が不明のため成人とした。大腿骨の表面には一部に剥離が認められるため、正確な計測値を求めることはできないが、およその特徴を知るために、Knussman(1988)¹⁾に従って計測を行った。結果を表1に示す。

計測値は沖縄先史時代人²⁾の女性に近い。骨体中央部の形を示す骨体中央断面示数は前後方向に扁平であることを示している(矢状径(前後方向)よりも横径が長い)。骨体部の断面形については、狩猟採集で野山を駆けめぐる縄文人は前後方向に長い断面形を示すことが知られている³⁾。一方、珊瑚礁の海を生活の場にしていたと考えられる沖縄先史時代人の断面形は前後方向に扁平な傾向を示すと考えられている²⁾。遺跡の立地から考えても当然の結果であるが、この大腿骨は沖縄先史時代人の特徴を良く示している。



第31図 SX014人骨の出土部位

第24表 伊礼原E遺跡SX014人骨の大腿骨計測値

Martin No.	項目	計測値
6	骨体中央矢状径 右	20
7	骨体中央横径 右	24
8	骨体中央周径 右	73
6/7	骨体中央断面示数 右	83.3

(mm)

3. 散乱人骨

1) 出土状況

人骨片は3区、5区、6区の遺物集中部から他の遺物とともに散乱した状態で検出されている。人骨の表面はかなり摩耗を受けており、一部の骨については人工的に加工されたかのような印象さえ受ける(図版42・43)。しかし、人骨の摩耗の程度には多少の違いが見られるものの、他の多数の人骨片とともに検出されていること、出土した地点がある時期に強い波の作用を受けたと考えられていることなどを考慮すると、これらの人骨片は強い水摩を受けたために表面が剝離・摩耗したと考えるのが妥当と思われる。このような観点から見ると、上腕骨、頭骨、大腿骨など、扁平あるいは柱状で形態的に凹凸の少ない部位が特に丸みを帯びていることも頷ける。

2) 最小個体数の推定

人骨片は断片的ですべて散乱した状態のものであるため、読みとれる情報は少ない。特に、骨表面が摩耗によって剝離するなど、形態的な情報の多くが失われているのは残念である。ここでは、骨の部位同定を行った結果、複数の個体が含まれていることが明らかになったので、参考までに最小個体数の推定を試みた。部位の同定結果を図4に示す。

個体数推定には情報量の多かった四肢骨の数を用いたが、第32図および図版4から分かるように、骨片にはそのままでは接合できないが、他の破片と同一個体の可能性を否定できないものが含まれている。そこで、個体数はそれらを総合的に検討しながら推定した。最も情報量の多かったのは上腕骨と大腿骨である(第25表)。上腕骨からは成人男性2体、成人女性2体、性別不明成人1体、若年1体、小児1体の計7体分が確認され、大腿骨からは成人男性2体、成人女性3体、若年1体の計6体分が確認された。以上の結果から、これらの骨片には少なくとも成人5体(男性2体、女性3体)と未成人2体(若年1体、小児1体)、計7体分が含まれると推定できる。

3) その他

頭蓋骨片2個、四肢骨片1個に明らかに火を受けたと考えられるものが含まれていた(図版42・43の矢印)。沖縄先史時代には多様な葬法が存在することが明らかになってきているが⁴⁾、本例も今後の検討課題として興味深い。

第25表 伊礼原E遺跡出土散乱人骨の最小個体数推定

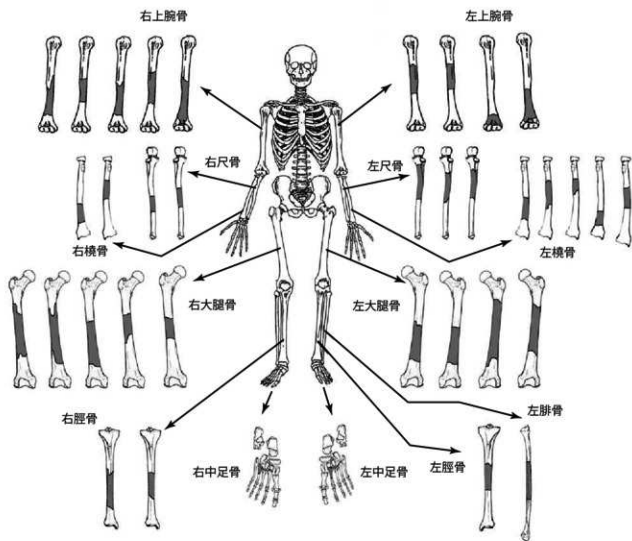
		成人			未成人		
		男性	女性	性別不明	成人計	若年	小児
上腕骨	右	2	2	1	5		
	左	1	1	1	2	1	1
桡骨	右	1	1	1	3		
	左	1	2	3	3	1	
尺骨	右	1	1	1	2		
	左	2	1	3	3		
大腿骨	右	1	3	4	4	1	
	左	2	2	4	4		
脛骨	右	1	1	2	2		
	左		1	1	1		
腓骨	右						1
	左						
推定最小数		2	3	5	5	1	1
推定総数	7体	成人計 5			未成人計 2		

謝辞

人骨調査の機会を与えていただいた北谷町教育委員会の皆さまに心からの謝意を表します。

<参考文献>

- 1) Knussman R (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag
- 2) 土肥直美, 泉水 奏, 瑞慶賀朝盛, 譜久嶺忠彦 (2000) 骨からみた沖縄先史時代人の生活. 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会編, 琉球・東アジアの人と文化(下巻), 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会, pp.431-448
- 3) 山口敏 (1982) 縄文人骨の特徴. 加藤晋平他編「縄文文化の研究1」, 雄山閣, 東京, pp.27-54.
- 4) 片桐千亜紀・小橋川剛・島袋利恵子・土肥直美 (2007) 具志川島岩上遺跡出土人骨の再整理—焼けた骨の存在から見た葬法に焦点をあてて—. 沖縄埋文研究5, 沖縄県立埋蔵文化財センター, pp.1-24.



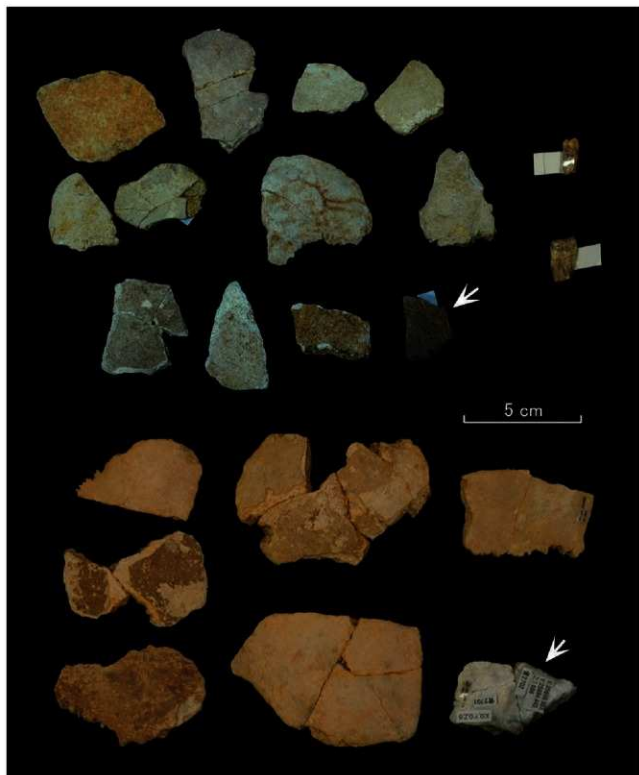
第 32 図 散乱人骨片の部位



图版 40 SX008人骨



图版 41 SX014人骨 (上:下顎骨、中:大腿骨前面、下:大腿骨後面)



図版 42 頭蓋骨片 (矢印は焼骨片)



図版43 四肢骨片 (矢印は焼骨片)

第5節 キャンプ桑江北側遺跡群における古汀線を指示するビーチロックと甌穴

大城逸朗(北谷町文化財調査審議会委員)

島袋春美(北谷町教育委員会嘱託)

はじめに

キャンプ桑江北側遺跡群(以下遺跡群とする)は、海浜砂丘砂層からなる沖積面に形成されている。遺跡群は、北西から南東側にかけて千原遺跡、平安山原A~C遺跡、伊礼原A~E遺跡、小堀原遺跡が確認されており、すでに発掘が終了したところや現在発掘中のところがある。また遺跡群は、縄文時代早期~晩期、弥生~平安併行期、グスク時代、それに沖縄戦前の集落跡まで確認され、およそ7,000年余にわたる複合遺跡である(北谷町教育委員会、2005)。

今回、砂丘砂に形成された平安山原遺跡や伊礼原遺跡の発掘により、砂丘砂層中に板状に固結した岩盤と砂丘砂層の基盤岩類に形成された溶食穴群が検出された。これらの地質要素は、沖縄県の海岸や河川に現存する地形と比較検討した結果、それぞれ板状岩盤はビーチロック、溶食穴は甌穴(ポットホール、かめ穴ともいう)であると判断できた。

ビーチロックや甌穴は、いずれも潮間帯の環境で形成される特異な地形である。これらの地質要素が存在することで、砂丘砂が堆積した当時の汀線は、図に示したように現汀線よりもかなり内陸側にあったことが推測される。さらに砂丘砂層の基底から縄文時代前期の曾畑式土器が出土したことから考えると、旧汀線のころの海面は現海面よりも高い位置にあり、いわゆる縄文海進と深く関わる時期であったことが推測できた。

以下に砂丘砂層中のビーチロックと甌穴について、調査概要をまとめた。

1. ビーチロックとは何か

「渚の化石」とか「地形の化石」と呼ばれるビーチロック(海浜岩)は、沖縄県内各地の海岸線ではしばしば観察できる特異な堆積物である。県内のビーチロックでは、天然記念物に指定されている大宜味村喜如嘉板敷海岸のものは、板干瀬と呼ばれ広く知られている。その規模は、海側から陸にかけ幅25~30メートルで、海岸線に沿い長さおよそ1キロである。(図版44上・中)

ビーチロックは、潮間帯という特殊な環境で形成された堆積物で、形態は板状で厚さ数センチ~数10センチの数枚の固結した岩板からなり、一般に陸から海側に向けて5~10度傾斜している。ビーチロックは、干潮時にはほぼ全体が干出し、陸側から海側に向けた断面は、海側の先端部は潮だまりの潮に浸り、陸側では急傾斜する、いわゆるマイクロケスタ状をしている。また、露出面はケースハードニング(表面固化作)が進み固結しているが、内部は未固結か、あるいは固結度は弱い。組成は、完新世の未固結なサンゴ礫性の生物遺骸の破片からなる海浜堆積物や基盤岩類に由来する礫質堆積物、あるいは両者の混在したものなどからなる。ビーチロックの成因については、分布地の地形・地質や構成物質を膠結するセメント(炭酸カルシウム)に注目して地下水起源(Russell, 1963等)、あるいは海水起源(Stoddart and Cann, 1965等)の報告がある。しかし宮古島南岸のビーチロックのように背後に湧水を伴うところもあれば、本部町備瀬海岸や名護市天仁屋海岸のように湧水を認め難いところもあり、かならずしも地下水が形成要因とは限らないようである。上記のこと以外に、一般にビーチロックの海側は礁原につながり、干潮時には礁池、あるいは潮だまりをひかえている。即ち海浜堆積物は、礁池あるいは礁湖環境で堆積し、干出時に海水の影響を受け固化する可能性が考えられる。ビーチロックの礁池・礁湖堆積物起源の可能性については、武永(1965)も指摘している。ビーチロックの形成は、分布地の堆積環境の条件により異なるか、あるいは地下水や海水の影響など複合した要因も考えられ、いまだ定説はない。また沖縄島南部豊見城市の西海上の岡波島での観察によれば、ビーチロックに多

量の不発弾が取り込まれており、少なくとも第二次大戦後50～60年で固結した事例であり、比較的短い時間で固化することが明らかである(図版44下)。

なおビーチロックの基本的なことについては、田中(1990)を参照していただきたい。

2. 遺跡群で検出されたビーチロックについて

ビーチロックの分布は、第33図に示したとおりである(北谷町教育委員会、2005)。遺跡群の北側試掘ポイント第三期の平安山原C遺跡と伊礼原D遺跡の間や第二期の伊礼原D遺跡とE遺跡の間では、基盤岩類が露出するか、あるいは厚さ2～3メートルの砂層の下位に基盤岩類が確認されている。ビーチロックは、それらの基盤岩が露出、あるいは確認された範囲を除き、遺跡群北側の平安山原A遺跡からC遺跡、伊礼原D遺跡、それに伊礼原E遺跡、及び伊礼原E遺跡以南の広い範囲に分布している。

遺跡群全域で確認できたビーチロックについては、同時期に形成されたか、あるいは形成時期の異なる複数のものが存在するかどうかについて明確に区別できているわけではない。遺跡群の各発掘グリッドを観察した限りでは、層序は総括的にみて上層から下層へ人工遺物を包含する砂層、固結度のすずんだ板状の岩盤、そして固結度の弱い砂層あるいは基盤岩類となる。砂層に挟まれ固結した板状岩盤については、現在の海浜に発達するビーチロックと比較し、形態や岩相に類似性が認められた。例えば、遺跡群における板状岩盤は、母岩はサンゴ礁性生物遺骸の碎片や石英その他の異質岩片からなり、枝状サンゴ片、塊状サンゴ片、大型の巻貝や二枚貝など貝類、ウニのトゲなどと容易に識別可能な遺骸を含む海浜堆積物型のビーチロックである。貝類は、潮間帯の岩礁から内湾の砂泥底に生息する大型の巻貝(サラサバテイラなど)や二枚貝(ヒレジャコガイなど)で、特に二枚貝類の殻は遊離しているものの保存はきわめてよい。さらに貝類では、現世種に類似するサンゴ礁性のものが多いが、汽水性環境を指示するセンニガイなども確認されている(黒住、2007)。熱帯のマンゴロープ地域の代表種のセンニガイについては、沖縄島の温暖期の隆起海浜堆積物や縄文時代後期の遺跡から産し、縄文海進以降の気温低下で分布を南へ後退したことが指摘されている(小澤・井上・黒田、1995)。本遺跡と関わるビーチロックからの出土は、遺跡立地の古環境を推測する資料として極めて重要である。

異質岩片は、石英は大きき数ミリから3～4センチの円～亜円礫で、さらに石英礫同様の大きさの砂岩、シルト岩、結晶片岩からなる亜円～角礫である。岩片は、風化し色は茶褐色を呈し、淘汰はよくない。なお異質岩片礫は、本遺跡群の発達する地域の東側(嘉手納町や沖縄市以北)に分布する中生代から新生代前期にかけての名護層や嘉陽層に由来するものである。

遺跡群の発掘グリッドでは、ビーチロックは厚さ20～30センチの単層が数枚板状に重なり、全体としては50～60センチ以上である(図版45上)。板状岩盤の最上面は、場所によってはセメントによる人工構築物のように平坦に拡がり、また現在のビーチロックに比較し非常に硬い。(図版45中・下)ビーチロックの広がり、平安山原A遺跡～C遺跡、あるいは伊礼原D遺跡では、海側から陸へかけて幅はおよそ100メートル、海岸に沿う延長は200メートル以上である。即ち遺跡群の海岸側には、かつて基盤岩類が点在して分布し、それらの間に少なくとも3区間において大規模な広がりを有するビーチロックが発達していたことが推測される。

本地域のビーチロックからは、縄文時代前期を指示する曾畑式土器片が検出されている。遺跡群の立地環境においては、ビーチロックの形成素材としてのサンゴ礁性の遺骸を含む海浜堆積物がすでに存在しており、その後炭酸カルシウムの堆積物への沈着が始まり固結したと考えれば、ビーチロックの形成は縄文時代前期以降と推測できる。ビーチロック中からの曾畑式土器の出土例は、名護市大堂原貝塚(2,000年現地説明会資料)があり、両遺跡の比較検討は遺跡立地の自然環境の変遷とビーチロックの形成に新しい知見を与えると考える。

なお本地域に発達するビーチロックは、沖縄県の天然記念物に指定されている大宜味村板敷海岸のもの

のに勝るとも劣らない規模であったことが容易に推測できる。

3. 遺跡群で検出された甌穴について

遺跡群試掘ポイント第三期のポイント48付近で、甌穴に類似した多数の垂直な円～垂円形状の穴が検出された。穴は、砂丘砂層におおわれた石灰質砂岩に形成され、およそ275mの範囲に28個ほど確認できた。石灰質砂岩層は、遺跡立地地域の基盤となり、さらに遺跡背後の段丘を構成する地層でもある。岩相は、サンゴ礁性の生物遺骸やグラニューク状の石英、それに砂岩やシルト岩などの異質岩片を含み、色は黄色～黄褐色を呈し、固結度は弱く、堆積構造としての葉理や斜交層理が発達している。穴は、この固結度の弱い石灰質砂岩を穿ち、本県の琉球石灰岩からなる地域の海岸や河川で見られる甌穴（ポットホール）、あるいは浸食穴・溶食穴に形態的に類似している。甌穴は河川水の働きで形成されるが、本地点では、海水の働きによりできた可能性のものである。潮間帯に形成された例としては、名護市の古宇利島北海岸の潮間帯に分布する砂質石灰岩や沖縄南部南城市の堀川海岸のアワ石灰岩に甌穴が形成され、しかも穴を穿つ小礫を伴っている。現在の河川や海岸で形成されている甌穴と比較する限り、本遺跡で露出した穴群は甌穴と判断できる。（図版46上）

本遺跡群における甌穴群は、米軍の基地建設に伴い地形は変容しているが、およそ1メートルの厚さの砂層におおわれている。また、穴は直径15～110センチで、深さは50センチ以上あり、単独に存在するもの、あるいは隣り合う幾つかの穴（ここでは4～7個）が溶食されて1つの大きな穴になったものなどがある。さらに穴の側壁は摩耗され、壁面には地層の層理や葉理も認められる。穴には、黄褐色のグラニューク状の石英を含む細粒砂が堆積しているが、穴を穿った研磨礫などは認められない。（図版46中・下）これらの甌穴群は、厚さ1～2メートル以上の砂層におおわれた基盤の石灰質砂岩層に形成されている。さらに第二期のポイント49～50付近に露出する基盤岩の基部にはノッチ状の窪みも認められ、これはかつての潮間帯直上を示す証拠であると判断した。これらのことから、試掘ポイント第二期のポイント47～48付近は、海岸の基盤岩類露出地帯であり、満潮時や激しい波浪が生じた場合には波が岩盤を叩きつける環境であったと推測される。

なお本遺跡群の発達する海側は、幅600～800メートルの幅広いリーフ（裾礁型サンゴ礁）が発達している。しかし甌穴群を有する岩盤のほぼ前面の海には、キューグチ（桑江口）（北谷町役場、1985）と呼ばれる大きなリーフの割れ目が発達している。恐らく遺跡群を発達させた海浜砂層が堆積していた当時、潮流は波浪の高い時期にこの割れ目を経て内陸深く押し寄せ、岩盤を穿った可能性が考えられる。

まとめ

キャンプ桑江北側遺跡群を調査して、遺跡群の形成された海浜砂丘砂に挟在する板状岩盤と、砂丘砂層の基盤岩に形成された溶食穴を確認した。これらは、本県の海岸側でよく発達し観察されるビーチロックや甌穴と比較検討した結果、板状岩盤はビーチロック、溶食穴は甌穴と判断できた。ビーチロックや甌穴は、いずれも潮間帯に形成される特異な地質要素である。これらの存在は、遺跡群の立地する砂丘砂層は、第33図に示したように、ビーチロックの分布する付近に旧汀線は発達し、その時期は砂丘砂層基底の縄文時代前期相当の遺物（曾畑式土器）の存在から縄文海進のころと推測した。

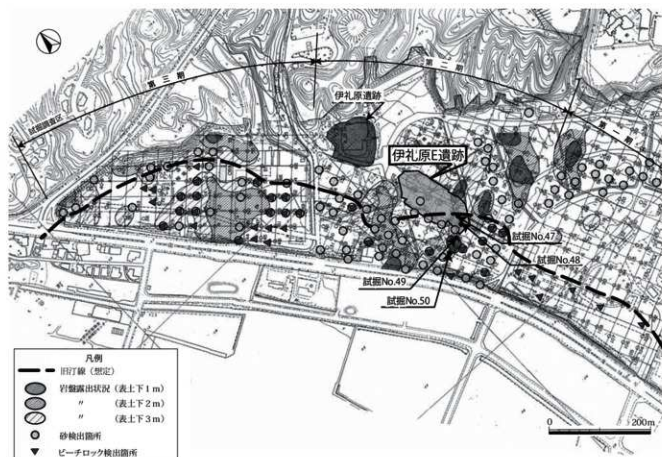
<引用文献>（本文記載順）

北谷町教育委員会(2005) キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査 -伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業- 北谷町文化財調査報告書 第23集 p160

Russell,R.J. (1963), Beach rock. Journal of tropical geography, Vol.17, pp.24-27.

Stoddart,D.R. and Cann,J.R.(1965), Nature and origin of beachrock. Journal of Sedimentary Petrology. Vol.35, pp.243-247.

- 田中政子(1990) 石になった砂浜—ビーチロック 日本のサンゴ礁地域1 「熱い自然—珊瑚礁の環境誌」 137-151
古今書院 p372
- 武永健一郎(1965) Beach rock の成因について 地理学評論 38 739-
- 黒住耐二(2007) 貝類遺体からみた伊礼原遺跡 伊礼原遺跡—伊礼原B遺跡ほか発掘調査—
北谷町文化財調査報告 第26集 p573
- 小澤智生・井上忠介・黒田登美雄(1995) 南西諸島のマングローブにおけるセンニンガイの消長と後氷期気候変動
名古屋大学古川総合研究資料館報告 11巻 23-33
- 北谷町役場(1985) 北谷町海岸・海域地名 北谷町史編集資料(中間報告)3 北谷町史編集事務局



第33図 旧汀線の復元と試掘検出箇所『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』(2005)に加筆



大宜味村喜如嘉海岸の
現世ビーチロック



同上のビーチロック
前面には潮だまりが発達する



那覇市岡波島のビーチロック
砲弾が取り込まれ、比較的短時間に
固結したビーチロック

図版 44 現世ビーチロック



平安原 C 遺跡
遺跡群の岩盤が層状になった
ビーチロック



平安原 C 遺跡
未固結な砂層に覆われた
ビーチロックの露出面



平安原 C 遺跡
ビーチロックは固結し
不透水層となる

図版 45 キャンプ桑江址地ビーチロック



名護市古宇利島北海岸の潮間帯に
形成された甌穴群



伊礼原 E 遺跡（6区 H8）
遺跡群で検出された古甌穴



伊礼原 E 遺跡（6区 H8）
遺跡群で検出された連結した
古甌穴群

図版 46 甌穴群（ポットホール）

第6節 放射性炭素年代測定

(株)地球科学研究所

1. 報告内容

未補正¹⁴C年代 (yBP) : (同位体分別未補正)¹⁴C年代 "measured radiocarbon age"
試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在(A/D1950年)から何年前(B/P)かを計算した年代。

¹⁴C年代 (yBP) : (同位体分別補正)¹⁴C年代 "conventional radiocarbon age"
試料の炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り¹⁴C/¹²Cの測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料のδ¹³C値を-25‰に基準化することによって得られる年代値である。
(Stuiver, M. and P. Polach, H. A. (1977) Discussion: Reporting of ¹⁴C date. Radiocarbon, 19を参照のこと)
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

δ¹³C (permil) : 試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための¹³C/¹²C比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta^{13}\text{C}(\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}[\text{標準}] = 0.0112372$ である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの測定、サンゴのL-T_h年代と¹⁴C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いため、補正前のデータの保管を推奨します。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol.40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol.35, No.2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal B C and cal B P. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration date beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original B P dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

測定方法などに関するデータ

測定方法	AMS : 加速器質量分析 Radiometric : 液体シンチレーションカウンターによるβ-線計数法
処理・調整・その他	: 試料の前処理、調整などの情報
前処理	acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄 acid washes : 酸洗浄 acid etch : 酸によるエッチング none : 未処理
調整、その他	Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理 Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出 Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出
分析機関	Extended Counting : Radiometricによる測定の際、測定時間を延長する BETA ANALYTIC INC. 4985 S W 74 Court, Miami, FL, USA 33155

2.C¹⁴年代測定結果

グリッド名	試料データ	未補正 ¹⁴ C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	$\delta^{14}\text{C}$ (permil)	¹⁴ C年代(y BP) (C conventional radiocarbon age)
6区 (G8)	Beta-213229	3260±40	-27.5	3220±40
SX007(炉) No.5	試料名 (28556) SUM103 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
3区 (E7)	Beta-213230	4370±40	-26.7	4340±40
中期下面 SK121(炉)	試料名 (28857) SUM102 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
6区 (G8)	Beta-213926	5980±40	-24.6	5990±40
9ラインベルトR層 青サンゴ層下の 流木	試料名 (28983) wood 01 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など wood		acid/alkali/acid	
6区 (G8)	Beta-213927	3420±40	-25.7	3410±40
9ラインベルトP層 青サンゴ層より上 の層の砂	試料名 (28984) Psuna 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など organic sediment		acid washes	
6区 (G8)	Beta-213928	4790±40	-27.6	4750±50
青サンゴ層 (曾畑出土)	試料名 (28985) SUMI 04 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
6区 (G8)	Beta-214699	5730±50	-27.9	5680±50
9ラインベルトR層 流木サンプル 青サンゴ層下	試料名 (29290) wood 2 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など wood		acid/alkali/acid	
6区 (G8)	Beta-214700	6050±40	-24.8	6050±40
GラインベルトHb層 流木サンプル 青サンゴ層下	試料名 (29291) wood 3 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など wood		acid/alkali/acid	
6区 (G8)	Beta-214701	3200±40	-25.8	3190±40
SX007(炉) 敷石 炉 (No.7)	試料名 (29292) SUMI 05 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
6区 (G8)	Beta-214870	3180±40	-25.3	3180±40
SX007(炉) 敷石 炉 (No.2)	試料名 (29330) SUMI 06 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダンリファレンススタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables:C13/C12=-24.6;lab.mult=1)

Laboratory unnumber: **Beta-213926**

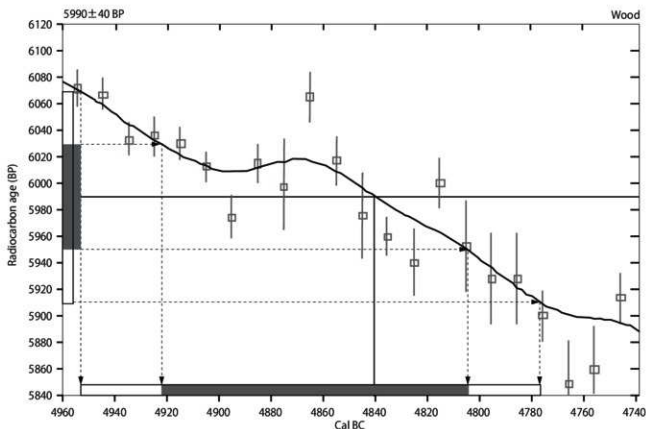
Conventional radiocarbon age: **5990±40BP**

2Sigma calibrated result: **Cal BC 4950 to4780(Cal BP 6900to6730)**
(95%probability)

In tercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: **Cal BC 4840(Cal BP 6790)**

1 Sigma calibrated result: **Cal BC4920 to4800(Cal BP 6870 to6750)**
(68%probability)



References:

Database u sed

INTCAL 98

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M, vander plicht, H, 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-siii

INTCAL98 Radiocarbon Age Cdibration

Stuiver, M, et, al, 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to calibrating C14Dates

Talma, A.S., Vogel, J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W.74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel:(305)667-5167 • Fax:(305)663-0964 • E-Mail : beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26.7; lab.mult=1)

Laboratory unnumber: Beta-213230

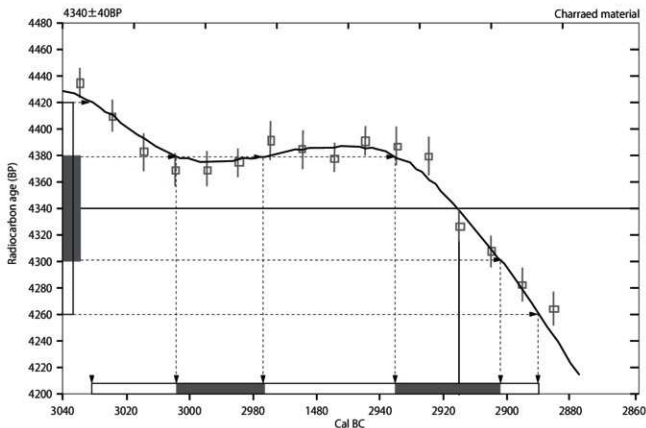
Conventional radiocarbon age: 4340±40BP

2Sigma calibrated result: Cal BC 3030to2890(Cal BP 4980to4840)
(95% probability)

In intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 2920 (Cal BP4860)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 3000 to 2980(Cal BP4950to4930)and
(68% probability) Cal BC2940 to 2900(Cal BP4880to4850)



References:

Database u sed

INTCAL 98

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M, vander plicht, H, 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-iii

INTCAL98 Radiocarbon Age Cdibration

Stuiver, M, et, al, 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to calibrating C14Dates

Talma, A.S., Vogel, J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W.74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305) 667-5167 • Fax: (305) 663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables:C13/C12=-25.7;lab.mult=1)

Laboratory unnumber: **Beta-213927**

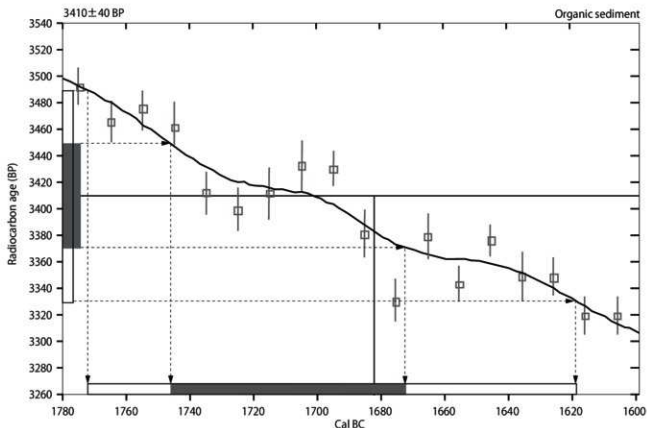
Conventional radiocarbon age: **3410±40 BP**

2Sigma calibrated result: Cal BC 1770to1620(Cal BP3720to3570)
(95% probability)

In tercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 1700(CalBP3650)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 1750to1670(Cal BP 3700to3620)
(68% probability)



References:

Database u sed

INTCAL 98

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M, vander plicht, H, 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-sxii

INTCAL98 Radiocarbon Age Cdibration

Stuiver, M, et, al, 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to calibrating C14Dates

Talma, A.S., Vogel, J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W.74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305) 667-5167 • Fax: (305) 663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.5;lab.mult=1)

Laboratory unnumber: **Beta-213229**

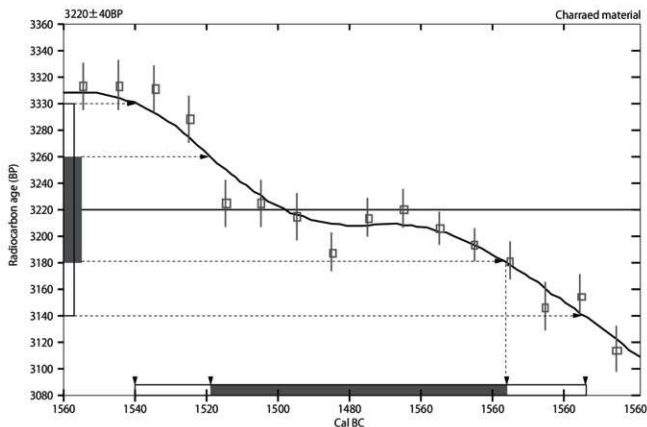
Conventional radiocarbon age: **3220±40BP**

2Sigma calibrated result: Cal BC 1540to1410 (Cal BP 3490 to3360)
(95%probability)

In tercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC1500 (Cal BP 3450)

1 Sigma calibrated result: Cal BC1520 to 1440 (Cal BP 3470to3390)
(68%probability)



References:

Database u sed

INTCAL 98

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M, vander plicht, H, 1998, Radiocarbon 40(3), pxiil-xlii

INTCAL98 Radiocarbon Age Cdibration

Stuiver, M, et, al, 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to calibrating C14Dates

Talma, A.S., Vogel, J.C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W.74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel:(305)667-5167 • Fax:(305)663-0964 • E-Mail : beta@radiocarbon.com

第7節 伊礼原E遺跡出土土器の自然科学分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平成20年度に行われた伊礼原E遺跡の発掘調査では、沖縄諸島を主な分布圏とする室川下層式とされる土器とともに、沖縄諸島出土土器にはこれまで認められたことのない燃糸文を有する土器が出土している。発掘調査所見では、その縄文土器は瀬戸内地方を中心に九州地方まで分布する船元式に類似することが示されている。船元系は、縄文時代中期の土器型式であるが、北部九州および中部九州地方と比べて、宮崎県南半を含む南九州では少量しか分布しないことが確認されている(泉2008)。

本報告では、船元系の可能性のある土器の材質(胎土)の岩石学的な特性を明らかにし、伊礼原E遺跡より出土した室川下層式等との比較および既存の地質資料との比較などから、その製作地について検討する。

土器胎土分析

1. 試料(巻首図版8)

試料は、伊礼原遺跡(砂丘区)より出土したC24グリッドの注記がある土器片と伊礼原E遺跡より出土したG7-9304の注記がある土器および同遺跡より出土したG8-1555(G8-40Vs層)の注記がある土器の合計3点の土器片である。これらは順に試料番号1~3が付されている。

試料番号1は有文の室川下層式とされ、試料番号3は燃糸文を有する船元系の可能性があるとされている。試料番号2については無文であり、在地土器とも様相が異なり型式不明の土器とされているが、試料番号3と同様の燃糸文を有する土器の可能性もあるとの所見が示されている。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる縄文土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか(1999)の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫~中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の

粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

観察結果を第26表、第34～36図に示す。各試料で計数された鉱物片および岩石片の種類構成をみると、互いに異なる種類構成を示す。鉱物片では、3点の試料ともに石英が最も多いが、石英以外の鉱物片の種類と量比は以下の通りである。試料番号1は石英に次いで斜長石が多く、それよりやや少量のカリ長石を伴い、微量の黒雲母と極めて微量の白雲母を含む。試料番号2は、石英に次いで斜長石が多く、他に少量の斜方輝石と微量のカリ長石、単斜輝石、角閃石を含む。試料番号3は、石英に次いでカリ長石が多く、少量の斜長石を伴い、極めて微量の黒雲母を含む。

岩石片では、3点の試料ともに多結晶石英が最も多いが、それ以外の岩石片の種類構成はそれぞれ異なっている。試料番号1は多結晶石英と同量程度に多い花崗岩類が含まれ、他に微量の頁岩、ホルンフェルス、セリサイト岩なども含まれている。セリサイト岩は、変質岩であるが、基質が粘土鉱物であるセリサイトにより構成されていることが鏡下で観察された。試料番号2は、多結晶石英と同量程度にホルンフェルスやチャート、頁岩が含まれ、微量の安山岩も含まれる。また、計数はされなかったが、極めて微量の石灰岩も認められた。試料番号3は、多結晶石英のみしか認められない。

各試料の粒径組成をみると、試料番号1と2はともに中粒砂をモードとし、細粒砂も同程度の割合を示す。ただし、試料番号1は粗粒砂や極細粒砂も、中粒砂や細粒砂に近い割合を示すが、試料番号2は、中粒砂と細粒砂の割合が突出しており、粗粒砂や極細粒砂は微量である。試料番号3は、粗粒砂にモードがあり、粗粒砂より細粒側になだらかな斜面を示すヒストグラムを呈する。

碎屑物・基質・孔隙の割合では、3点ともに碎屑物の割合が20～25%の範囲にあり、特に有意な差は認められない。

4. 考察

胎土中の砂粒における鉱物片および岩石片の種類構成は、胎土の材料となった砂や粘土などの堆積物が採取された場所の地質学的背景を示唆していると考えられる。3点の試料は、その胎土から得られた鉱物片・岩石片の種類構成が互いに異なっていることから、それぞれ異なる地質学的背景を有する地域で作られた土器であると考えられる。

試料番号1の胎土からは、白雲母と黒雲母を斑晶とする花崗岩類(カリ長石が斜長石よりやや少ない傾向が窺えることからおそらく花崗閃緑岩～アダメロ岩)からなる地質を主体とし、その周縁に頁岩などの堆積岩類と花崗岩類による熱変成で形成されたホルンフェルスが分布するという地質が推定される。試料番号3は、岩石片は多結晶石英のみであったが、カリ長石の比較的多い鉱物組成と黒雲母が微量ながら伴われることから、おそらく黒雲母を斑晶として含む花崗岩～アダメロ岩の分布する地質が想定される。一方、試料番号2は、チャートや頁岩など堆積岩類から構成される地質と両輝石角閃石安山岩を主体とした火山岩類からなる地質さらには熱変成岩であるホルンフェルスの混在する背景が推定される。

木崎編(1985)、日本の地質「九州地方」編集委員会(1992)、日本の地質増補版編集委員会(2005)等による記載からは、上述した3点の試料から推定される地質学的背景を有するような地域を認めることができない。したがって、今回の試料3点は、いずれも沖縄本島で作られた可能性は低く、それぞれ沖縄本島以外の異なる地域から伊礼原遺跡に搬入された土器であると考えられる。現時点では、各試料の

産地を特定するまでには至らないが、上述した既存の地質資料から、先島諸島を除く琉球列島の範囲では、その産地が存在する地域を以下のように考えることができる。

試料番号1および3の地質学的背景の主体をなす花崗岩類が広く分布する島は、沖縄本島から近い順に沖永良部島、徳之島、奄美大島、屋久島の各島をあげることができる。ただし、沖永良部島の花崗岩類は、角閃石を含む花崗閃緑岩のみであることから、産地としての可能性は他の3島よりも低い。すなわち、試料番号1および3の産地が琉球列島内であるとすれば、徳之島、奄美大島、屋久島の3島にほぼ限定されると考えて良い。ただし、試料番号1と試料番号3は、上述したように花崗岩類の岩石の種類に違いがあり、また、土器胎土における砂の粒径組成にも明瞭な違いが認められることから、同一地域(島)を産地とする可能性は低いと考えられる。

なお、土器型式からは、すでに両試料の違いは指摘されている。試料番号1は、沖縄本島および周辺を分布の中心とする室川下層式とされている。室川下層式について、高宮(1993)は、種子島を分布の北限とし、さらに施文の手法から九州以北の土器に由来するとも述べている。上述した試料番号1の産地候補は、いずれも分布の北限よりも南側にあり、型式の分布状況からもその可能性は支持される。試料番号3は、船元系とされているが、今回の分析によりその産地の候補の中に屋久島が示されたことは、型式の分布との整合性を示唆している可能性がある。さらに、試料番号3の胎土が示す地質学的背景は、例えば鹿児島県にも想定することが可能である。今後の検証としては、屋久島や鹿児島県内で出土した船元系土器の分析例を数多く得ることにより、比較検討を重ねることが必要であると考えられる。

試料番号2から想定される地質学的背景は、堆積岩類と兩輝石角閃石安山岩の分布が混在するということであるが、上述した既存資料からは、このような地質の島を認めることができない。兩輝石角閃石安山岩は、トカラ列島を構成する島々には認められるが、これらの島々はいずれも火山島であり、堆積岩類の分布は認められない。トカラ列島以外で兩輝石角閃石安山岩の認められる島としては、粟国島がある(記載はデイスイト)が、粟国島の場合もチャートや頁岩の分布は記載されていない。さらに、兩輝石角閃石安山岩という記載はないが、安山岩としての記載がある島としては、久米島および渡名喜島があげられる。これらのうち、久米島については、チャートや頁岩およびホルンフェルスの分布が記載されていないため、試料番号2の産地としての可能性は低いと考えられる。一方、渡名喜島については、島内に分布する主要な地質である千枚岩とされた中に、チャートやスレート(頁岩のやや変成が進んだ岩石)が含まれるとあり、さらにはホルンフェルスの分布も記載されている。これらのことから、試料番号2の産地の候補として琉球列島の範囲では渡名喜島をあげることができる。ただし、渡名喜島における試料番号2と類似する土器の出土例は無く、渡名喜島における堆積物の組成など、検証を必要とする事項は多い。また複数の粘土および砂粒を採取し、胎土を組み合わせる試料番号2の土器を製作した可能性も考えられる。一方、琉球列島以外で、試料番号2の胎土が示す地質学的背景を考えると、安山岩の分布から鹿児島県を含む九州以北にも想定することが可能である。今後、鹿児島県内で出土した試料番号2と同様の土器の分析例を数多く得ることにより、比較検討を重ねることが必要であると考えられる。

<引用文献>

- 泉拓良,2008.鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器.小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器.株式会社アム・プロモーション,502-509.
- 木崎甲子郎編著,1985.琉球弧の地質誌.沖縄タイムス社,278p.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999.瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.

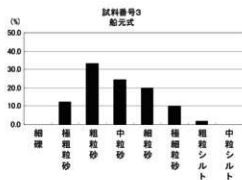
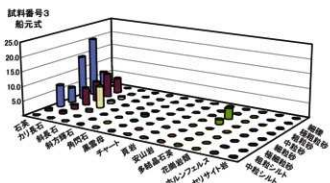
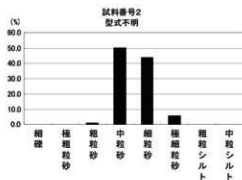
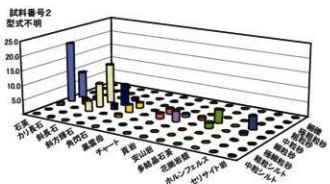
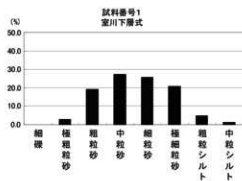
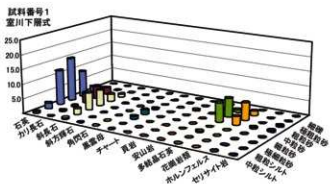
日本の地質「九州地方」編集委員会,1992,日本の地質9 九州地方,共立出版,371p.

日本の地質増補版編集委員会,2005,日本の地質 増補版,共立出版,374p.

高宮廣衛,1993,沖縄縄文土器研究序説,第一書房,306p.

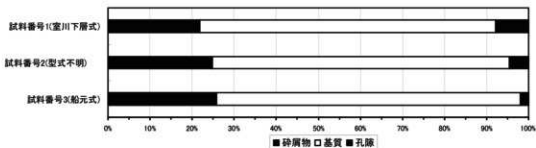
第26表. 薄片観察結果

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成											合計					
		鉱物片							岩石片									
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	白雲母	黒雲母	チャート	頁岩	安山岩		多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	セリサイト岩	
1 室川下層式	細礫																0	
	極粗粒砂											2	3				5	
	粗粒砂	4	5	2						1		13	12		1		38	
	中粒砂	18	9	5					1			13	6	1	1		54	
	細粒砂	30	7	11					3								51	
	極細粒砂	24	1	12				1	2			1					41	
	粗粒シルト	4	1	4													9	
	中粒シルト	1		1													2	
	基質																	644
	孔隙																	72
2 型式不明	細礫																0	
	極粗粒砂																0	
	粗粒砂				1												1	
	中粒砂	10	1	15	8	5	2		2	1	1	5		5			55	
	細粒砂	23	2	9	2		3		2	4		2		1			48	
	極細粒砂	1		4			1										6	
	粗粒シルト																0	
	中粒シルト																0	
基質																	313	
孔隙																	20	
3 船元式	細礫																0	
	極粗粒砂	9	7														16	
	粗粒砂	27	11	1								5					44	
	中粒砂	20	9	1								2					32	
	細粒砂	7	8	10					1								26	
	極細粒砂	10	2	1													13	
	粗粒シルト	1	1														2	
	中粒シルト																0	
基質																	373	
孔隙																	10	



第34図. 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(%)

第35図. 胎土中の砂の粒徑組成



第36図. 砕屑物・基質・孔隙の割合

第8節 伊礼原E遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告は、伊礼原E遺跡(沖縄県北谷町所在)の縄文時代中期～後期と考えられる遺構から検出された、遺構および堆積層の年代観炭溜まり遺構の状況確認炭化物2点と獣骨1点および人骨1点を用いて年代測定と、遺構より採取された土壌試料より洗い出し分析を行う。

1.放射線炭素年代測定

1.試料

対象とされたものは、炭化物2点と、獣骨(豚)および人骨(四肢骨)である。

2.分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて δ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIO-CARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

3.結果

(人骨)はコラーゲンの抽出ができなかったため、測定不可能であった。放射性炭素年代測定の結果、試料番号2～4の補正年代は、試料番号2が160±30BP、試料番号3が3,230±30BP、試料

番号4が3,310±30BPの値を示す。暦年較正では、測定誤差を σ として計算させた結果、試料番号2が、calAD 1,669～calAD 1952、試料番号3が、calBC 1,522～calBC 1,456、試料番号4が、calBC 1,620～calBC 1,533の暦年較正年代を示す。この結果より試料番号2は、17世紀頃から20世紀頃、試料番号3および4が、縄文時代後期頃の年代視が得られる。

第27表. 放射性炭素年代測定結果

試料番号	地区名・遺構名	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
2	3区(F7)SX002石積	歯	160±30	-21.37±0.67	100±30	IAAA-91570
3	6区(G8)SX007北半西壁障3層	炭化物	3,230±30	-25.01±0.50	3,230±30	IAAA-91571
4	6区(G8)SX007東中央	炭化物	3,310±30	-24.06±0.47	3,300±30	IAAA-91572

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第28表. 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.	
		σ	cal AD	AD	cal BC	BC	cal BP			
2	157±29	σ	cal AD 1,669	—	cal AD 1,692	cal BP 281	—	258	0.194	IAAA-91570
			cal AD 1,728	—	cal AD 1,780	cal BP 222	—	170	0.475	
			cal AD 1,798	—	cal AD 1,811	cal BP 152	—	139	0.118	
		2σ	cal AD 1,920	—	cal AD 1,945	cal BP 30	—	5	0.209	
		cal AD 1,950	—	cal AD 1,952	cal BP 0	—	2	0.004		
		cal AD 1,665	—	cal AD 1,707	cal BP 285	—	243	0.174		
3	3,232±25	σ	cal AD 1,719	—	cal AD 1,785	cal BP 231	—	165	0.369	IAAA-91571
			cal AD 1,795	—	cal AD 1,826	cal BP 155	—	124	0.117	
			cal AD 1,832	—	cal AD 1,886	cal BP 118	—	64	0.146	
		2σ	cal AD 1,912	—	cal AD 1,953	cal BP 38	—	3	0.193	
		cal BC 1,522	—	cal BC 1,491	cal BP 3,472	—	3,441	0.599		
		cal BC 1,480	—	cal BC 1,456	cal BP 3,430	—	3,406	0.401		
4	3,311±26	σ	cal BC 1,604	—	cal BC 1,580	cal BP 3,554	—	3,530	0.049	IAAA-91572
			cal BC 1,535	—	cal BC 1,434	cal BP 3,485	—	3,384	0.951	
			cal BC 1,620	—	cal BC 1,602	cal BP 3,570	—	3,552	0.245	
		2σ	cal BC 1,591	—	cal BC 1,533	cal BP 3,541	—	3,483	0.755	
		cal BC 1,666	—	cal BC 1,518	cal BP 3,616	—	3,468	1.000		
		cal BC 1,591	—	cal BC 1,533	cal BP 3,541	—	3,483	0.755		

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

5)相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

II. 炭溜まり遺構覆土の内容物について

1. 試料

試料は、6区(G8)SX007の東中央(炭サンプル No.3)と、北半分北中央(炭サンプル No.7)から採取された土壌2点である。両試料は、炭化材や土塊に灰と思われる白色部が確認されることから、土壌水洗による抽出分類は不適と判断された。本分析では試料を水洗せずに篩別し、炭化材や種実、動物遺存体の抽出・同定と、白色部の灰炭分析、微粒炭の有無の確認を実施する。

2. 分析方法

試料に確認される灰化したと考えられる白色部からピンセットで微量を採取する。これを400倍の光学顕微鏡下で観察し、植物珪酸体を包含する珪化組織片と、微粒炭の有無を確認する。

次に、試料を粒径4mm、2mm、1mm、0.5mmの篩に通し、シャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実や炭化材(主に径4mm以上)、動物遺存体などの遺物を抽出する。抽出された種実は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を表示する。

炭化材は、重量(g)と最大径(mm)を表示後、大きさや保存状態、接合関係を考慮して、両試料より各5点合計10点を選択する。炭化材の木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)および Wheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

動物遺存体は、個数、重量、大きさを記録する。分析後は、種類毎に容器に入れて返却する

3. 結果

結果を第29表に示す。東中央(炭サンプル No.3)は、試料 374.82g より、炭化材 1.99g(最大径 1.6cm)、動物遺存体 1点 11.44g(径 3.1cm)が検出された。北半分北中央(炭サンプル No.7)は、試料 798.87g より、種実(キク科の果実)1点(0.01g 未満)、炭化材 15.91g(最大径 1.5cm)が検出された。

灰化したと考えられる白色部の灰像分析の結果、両試料に植物珪酸体を包含する珪化組織片は確認されなかった。微粒炭は北半分北中央(炭サンプル No.7)より確認されたが、種類を特定するには至らなかった。

種実は、草本のキク科の果実に同定された。以下に形態的特徴等を記す。

・キク科(Compositae)

果実は灰褐色、長さ 1.3mm、径 0.3mm 程度の線状長楕円体。頂部は切形で円形の臍があり、長さ 1.7mm 程度の白色の冠毛が伸びる。果皮表面には細毛が密生し、微細な網目模様と 10 個程度の縦條が配列する。

キク科は、明るく開けた場所などに生育する、いわゆる人里植物に属する草本であるが、検出された種実に炭化は認められず、頂部や表面に密生する毛が確認されるなど保存状態が極めて良好であることから、混入した後代のものに由来する可能性が高い。

炭化材は、全て落葉広葉樹のヤマグワに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圈部は 3-5 列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または 2-4 個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6 細胞幅、1-50 細胞高。放射組織には、結晶細胞が希に認められる。

4. 考察

SX007 の 2 箇所から抽出された炭化材は、いずれも最大で約 1.5cm 程度の破片であり、観察した範囲では樹芯は認められない。これらの炭化材は、全て広葉樹のヤマグワであることから、同一個体が細片に割れた可能性がある。

ヤマグワ(シマグワ)は、最大で直径約 60cm、樹高 15m に達する落葉高木であり、海岸付近の沖積地から斜面地まで生育する。木材は、重硬で強度・耐朽性が高い材質を有する。遺構から出土し、炭化していることから、何らかの人間活動に利用され、火を受けていることが推定される。

周辺では、伊礼原 C 遺跡で縄文時代前期の自然木に湿地林を形成するサガリバナやサキシマスオウノキを中心に多くの種類が確認されているが、ヤマグワは確認されていない(能成2000,2007)。縄文時代後・

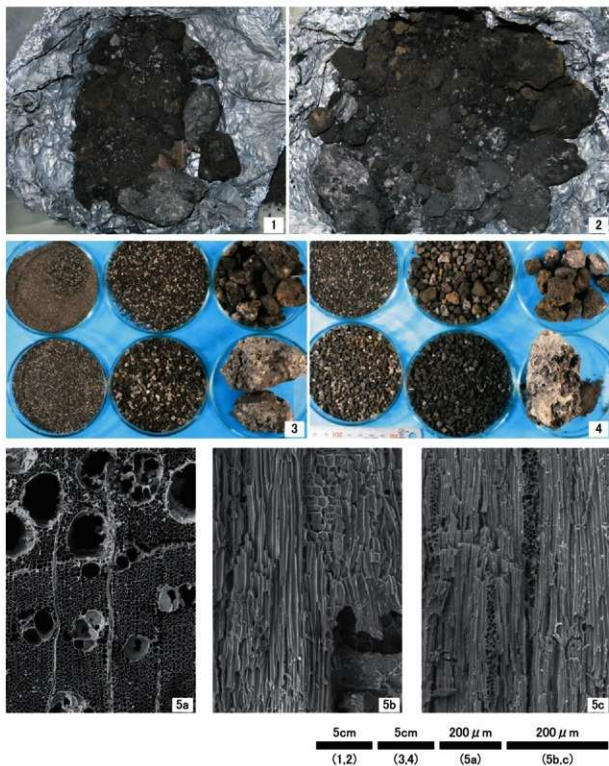
第29表. 土壌試料篩別・分類結果

種別名	6 区 (G8) SX007		備考	
	東中央	北半分北中央		
	炭サンプル No.3	炭サンプル No.7		
種別名	篩			
種別名	キク科 果実	<0.01g	1 点、後代より混入の可能性	
炭化材	主に径 4mm 以上 ヤマグワ	1.67g 0.32g	14.91g 1.00g	最大径 1.6cm 各 5 点計 10 点
動物遺存体		11.44g	1 点、径 3.1cm	
分析残渣	径 4mm 以上 径 2-2mm 径 2-1mm 径 1-0.5mm 径 0.5mm 以下	171.95g 15.07g 9.99g 9.72g 152.52g	428.64g 42.45g 34.30g 34.91g 236.90g	
	炭塵 微粒炭	×	○	
分析量		374.82g	798.87g	

晩期の古植生については資料が少ないが、今回の結果から少なくともヤマグワが周囲に生育していた可能性がある。なお、沖縄県内におけるヤマグワの出土事例では、野国貝塚群(嘉手納町)の縄文時代前期とされる板状木片(小田,1984)、伊是名貝塚(伊是名村)の縄文時代後期とされる住居跡や貝層から出土した炭化材(高橋,2001)、前原遺跡(宜野座村)の縄文時代後期とされる丸木(能城,1999)、伊佐上原遺跡群(宜野湾市)の貝塚中期とされる竪穴遺構から出土した炭化材(バリノ・サーヴェイ株式会社,2004)があり、利用されていたことが推定されるが、用途が明らかな資料はほとんどない。そのため、ヤマグワの利用状況については、今後も継続して資料を蓄積していくことが必要である。

<引用文献>

- 安里 進,1999,沖縄の考古学的時代区分をめぐる現状と問題点安里 進・土肥直美(共著)沖縄人はどこから来たか琉球=沖縄人の起源と成立。ボーダーインク,127-133.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載 II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載 III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
- 能城 修一,1999,前原遺跡出土木製品の樹種,「前原遺跡 一県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書」,宜野座村乃文化財 14 集,宜野座村教育委員会,242-258.
- 能城 修一,2000,沖縄本島伊礼原 C 遺跡から出土した縄文時代前期の木製品および自然木の樹種とそれから類推される海上輸送,植生史研究9(1),日本植生史学会,29-42. (英文)
- 能城 修一,2007,伊礼原遺跡から出土した木材の樹種,「伊礼原遺跡—伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査—」,北谷町文化財調査報告書第 26 集,北谷町教育委員会,445-466.
- 小田 一幸,1984,野国貝塚群 B 地点から出土した木材片の樹種について,「野国 一野国貝塚群 B 地点発掘調査報告」,沖縄県文化財調査報告書第 57 集,沖縄県教育委員会,175-179.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2004,15-D9-A 検出遺構における放射性炭素年代測定・炭化材同定・植物珪酸体分析,「基地内文化財 III 一基地内埋蔵文化財分布調査概要(平成 14・15 年度)」,沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集,沖縄県立埋蔵文化財センター,85-89.
- 高島 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- 高橋 敦,2001,伊是名貝塚の炭化材分析,「伊是名貝塚—沖縄県伊是名貝塚の調査と研究」,平成十二年度日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」助成出版,沖縄県伊是名村・伊是名貝塚学術調査団,323-327.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修) 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] ..



1. 分析試料 (6区 (G8)SX007; 東中央炭サンプル No.3)
2. 分析試料 (6区 (G8)SX007; 北半分北中央炭サンプル No.7)
3. 試料篩別・分類後 (6区 (G8)SX007; 東中央炭サンプル No.3)
4. 試料篩別・分類後 (6区 (G8)SX007; 北半分北中央炭サンプル No.7)
5. ヤマグチ (6区 (G8)SX007; 東中央炭サンプル No.3): a: 木口, b: 柱目, c: 板目

図版 47 分析試料・炭化材

第V章 総括

伊礼原E遺跡は、在沖米軍基地キャンプ桑江北側の返還に伴う平成8年度の試掘調査で発見され、平成13年度の確認調査後、桑江伊平土地区画整理事業に伴う埋藏文化財発掘調査として、平成16～17年度に本発掘調査による記録保存を行った。調査面積は南北約160m×東西約68m、8,850㎡、縄文時代前期～近現代の複合遺跡である。

今回の成果で特筆されることは以下のことである。

- ① VIII層で曾畑式土器が単純出土し、VI・VII層の間層を挟み、V層では室川下層式土器が上限である。以上のことから、両土器間には時間差があることが確認できた。
- ② 沖縄諸島において、縄文時代中期前葉の船元系土器が初めて確認され、縄文が施文された土器の分布の南限が下った。今まで空白だった、縄文時代中期にも九州から影響が及んでおり、縄文時代前期～後期の連続性が確認された。
- ③ 縄文中期～後期のV層が津波によって部分的に壊され、枝サンゴ等とともに再堆積したものがVs層であることが明らかとなり(註1)、津波の時期は、V層の下限を示す縄文時代後期の面縄東洞式土器が得られたことから同土器の頃、または、それ以後に生じたと考えられる。

本遺跡の層序は11枚(I～V、Vs、VI～X)で、文化層はII層(近世～近現代)、IV層(貝塚時代後期)、V・Vs層(縄文時代中期～後期)の3つの時期に分けられ、以下、各時期についてまとめる。

V・Vs層(縄文中期～縄文後期)

調査区は、山側(東側)に堆積する陸成シルトのV層、海側の3区(F7)、5・6区(G7・8)に堆積するVs層の2つに分かれ、海側(西側)に緩やかに傾斜する地形である。

確認調査(註2)時のA-2トレンチにおいて、同レベルで検出されたシルト面と枝サンゴ礫面の異なる面(註2)は、津波によるVs層とV層の境目であることが明らかとなった(註1)。

V層の遺構は、柵列状遺構(SC003)、炉址(SX007)1基、3体の埋葬人骨が北西-南東方向に検出された。北西側の柵列状遺構では、面縄前庭式土器(第49図5)や仲泊式土器(第56図1)などが得られることから縄文中期相当と見られる。

南東側の炉址では、¹⁴C分析年代が3280～3260BPの縄文後期の結果が得られ、北西側と南東側には若干の時間差が見られる。

G8グリッド南側にある3体の埋葬人骨のうち、炉址直下(外側の縁)で検出された人骨は炉址と同時期か、より古いと考えられる。確認調査時のA-3トレンチで土壌としたものは、甌穴が確認されたH8グリッド内にあり、遺構の可能性が低いと思われる。

遺構・遺物の出土状況を巻首図版9～14の平面・垂直分布で見ると、調査区北西側の柵列状遺構周辺にかかるAライン(A-A')では標高約2.7～2.9m、Bライン(B-B')では東側の標高約3.2mで面縄東洞式土器が得られ、調査区南東側の炉址・埋葬人骨周辺、船元系土器のまとまりがあるC(C-C)・D(D-D')ラインのG8東側部分では約2.7～3.5mで出土する。

このことは、6区南東・南側で地山に塞ぎ止められて堆積する砂丘の高まりは、次第に北西側へ低くなり、西傾する砂丘上やその斜面に見られる遺物の広がりも北西-南東方向である。

遺物の広がりには、基盤の石灰質砂岩と見られる白色以外に茶褐色や赤褐色で扁平なものを含んだ小礫の散在に伴い、試掘番号30(註2)でも同様に見られるが、G8グリッド東側一帯では、船元系土器のまとまり、チャートや小礫のまとまりが見られるなど何らかの遺構の可能性が考えられる。

巻首図版5中(写真の中央)E7-01で検出された礫群は自然堆積と見られるが、石器も僅かに出土することから人為的な可能性も残る。

これらの遺構・人工遺物・小礫の広がる方向は、第 33 図に推測された旧汀線や Vs 層堆積範囲に類似することから、遺構は海岸線と並行に分布していたものと考えられ、平面分布に見られる出土傾向には、利用の違いや時期差があるものと思われる。

V 層出土の土器のうち、いわゆる奄美系土器が多く出土する遺跡には、うるま市古我地原貝塚・浦添貝塚（丘陵上）、伊礼原遺跡（沖積低地）がある。前者では室川下層式土器が出土しておらず、本遺跡および伊礼原遺跡からは出土するなど、両者間に立地および土器型式の違いが見られる。

石器では、石鏃に輝緑岩製の無茎鏃、石錐では扁平礫の上下端部に打ち欠きを有するものが得られた。前者は、形態及び石質から持ち込まれたと見られ、船元系土器がまとまって出土した G 8 グリッドで得られていることから同時期の可能性がある。

チャートは総出土点数 2,025 点、総重量 25kg が得られ、素材としての大きさは県内に報告は見られず、量的にも多い。

石器の器種別の出土量は、V・Vs 層共に磨石、石斧、敲石の順に多い。石器の出土分布は、E 7、G 8 グリッドに目立ち、素材としてはチャートも多い傾向がある。

貝製品は、土器・石器について出土量が多いが、大半が Vs 層出土で遺構に伴うものは検出されていない。この出土状況は骨製品も同様である。また、貝・骨製品ともに、装飾品と実用品、粗加工品が得られている。

貝製品では、ゴホウラ・アツソデガイの貝輪やイモガイの貝札、タカラガイ製品の製作工程の想定されるものや、これまで見られなかった使用部位のスイズガイ製品が得られた。

ゴホウラ製貝輪では、沈線文の文様は初めてで、貝製品の素材利用に死貝があるなど好資料が得られた。

貝輪では、ゴホウラ製貝輪が Vs 層、VIII 層で得られ、VIII 層は曾畑式土器を含んでおり所属時期、製品かどうかについて、さらに詳細な検討が求められる。

骨製品では、素材にジュゴンやクジラなどの海棲大型動物を利用しており、ジュゴンの肋骨の出土量が多い傾向は、浦添貝塚、古我地原貝塚、伊礼原遺跡などに報告がある。

本遺跡と同様、面縄前庭式土器や仲泊式土器、面縄東洞式土器を主体とする遺跡であることから、土器、チャート、骨製品、貝製品などの共伴関係が注目される。

脊椎動物遺体は魚類、ウミガメ、イヌ、イノシシが得られている。そのうち、イノシシは成獣を主体としている（第 IV 章第 3 節）。貝類遺体は、V 層での出土は少量である。

Vs 層は、津波によって壊された V 層期の遺物を大量に包蔵しており、貝・骨製品のほとんどが本層で出土した。

遺物の出土状況を巻首図版 13 によると、そのほとんどが標高約 1.3~1.9m で出土し、巻首図版 9、10、12 と比較すると土器や動物遺体は標高約 1.8m 以下にまとまりがみられ、チャートは他の遺物より東側のやや高いところまで広がる傾向がある。

この出土状況は、重量や形態等の浮きやすい性質の違いが水中の堆積の差となって生じたのではないかと思われる。

IV 層（貝塚時代後期）

本層は、海側（西側）で厚いが、5 区が特に厚く、北・東側の山手側は薄く堆積している。

調査区南東側の標高約 3m で集石遺構 2 基（SX005、SX006）が検出された。人骨は得られていないが、同レベルで弥生相当期の土器が出土したことや遺構の形態から配石墓の可能性が高い。

出土遺物のうち II 群土器は、巻首図版 9・14 の平面・垂直分布で見ると、E 7 に出土が多く、概ね標高 3m 以上で出土する。

巻首図版 14 では A ライン（A-A'）西側に貝塚時代後期系土器、そのやや東側で縄文晩期系土器や弥

生式模倣土器、最も東側で貝塚時代後期系が出土した。

同図版で調査区西側に見られる V・Vs 層と IV 層出土遺物のレベル差は、標高約 3m 付近では差が小さく混在が生じており、調査区南側の地山付近にあたる A-3 トレンチ IV 層出土の型式不明土器として報告した図版 37 の 13 は船本系土器であることも明らかになった Vs 層が堆積しない A ライン (A-A') で V 層との間に約 30cm、C (C-C')・D (D-D') ラインでは標高約 2m 以下の Vs 層出土の I 群土器との間に約 50cm のレベル差、E ライン南側においては、I・II 群土器が混在する最も南側の地山周辺と Vs 層との間に約 60cm のレベル差がある。この差は A-1 西トレンチの VI~IX 層、A-2 トレンチ北壁の茶黄色砂層、茶黄色粗砂層と白色混雑砂層等 (註 2) に相当し、一定の時間差は明瞭である。

石器は出土量ともに僅かであるが、石斧、敲石、磨石に見られる器種構成比は、V 層に類似する。特に注目されるのは、形態や石質から持ち込みと見られる流紋岩製の扁平状入磨製石斧と花崗閃緑岩製のバチ型磨製石斧が共伴 (巻首図版 7) して出土したことである。

骨製品は見られず、貝製品にはゴホウラ製貝輪や二枚貝有孔製品などが得られた。

IV 層と V 層の遺構・遺物の量や密度に相違はあるが、巻首図版 9・10 でみると類似性があり、北西-南東方向の海岸線と平行している。

II・III 層 (近現代)

II 層では石敷遺構 (SX001)、石列遺構 (SX002) が検出された。石敷遺構は、石敷を固定する木杭を伴い、石列遺構は小・大型礫を成す簡素なつくりのもので、石造・土木技術の存在が窺えた。また、石列遺構の東・南側周辺の溝状の落ち込みや窪み等は農耕に伴うものと見られる。

遺物では青磁、白磁、染付、沖繩産施釉・無釉陶器、本土産陶磁器、銭貨、簪等が出土し、脊椎動物遺体では、イノシシ、ブタ、ウシ、ウマ、ヤギ等が得られ、海浜部に立地する集落において、ブタの飼育やウシを利用した農耕に生業の主力がおかれていたことが示唆された (第 IV 章第 3 節)。

石列遺構の周辺で得られたブタ下顎骨による ¹⁴C 年代測定で 160±30BP の実年代が得られたことは、本遺跡西側に位置した字伊礼集落は 1670 年代には成立していたとされており (註 3)、それを裏付けるものである。

III 層は、小川に近い 1・2 区において湿地的な様相が北西-南西方向に見られ、僅かにグスク土器が出土したが遺構は確認されず、生活の痕跡は希薄であることから居住域から離れた地域であったと見られる。

層序・立地・環境に見られる変遷

本遺跡は、背後の丘陵から伸びる北側の舌状丘陵や北東・南東側の地山と海側で露頭した赤土土壌や石灰質砂岩の地山によってある程度閉じられた環境 (註 4) に、陸成堆積の II・III・V・VI・IX 層、海成堆積の IV、VII 層、VIII 層によって形成されたと見られる。

調査区南側で、石灰質砂岩から賑穴が確認され、強い波が打ち寄せる環境や旧汀線の頃の海水面、いわゆる縄文海進と深く関わる時期のビーチロックの形成が推測された (第 IV 章第 5 節)。

貝類遺体では、伊礼原遺跡で見られた泥干潟に生息するハイガイはほとんど認められず、潮間帯泥底に生息するダテオキシジミが得られたことから、曾畑式土器期から室川下層式土器期頃までの間に泥干潟が消失した可能性が指摘された。

この両土器期の間は、VIII 層から V 層の間となり、4000 年前頃と沖繩の現生貝類相は類似していたことが明らかにされた (第 IV 章第 2 節)。

第 III 章 4 節で述べた 3 つの礫群 (巻首図版 5 上) が確認され、1 つ目 (同図版の写真内左側) は前述した V 層に伴うもの、2 つ目 (同図版中央) の礫群は、縄文後期の炉址を覆うもので、6 区南側の石灰質砂岩基盤から西傾しながら徐々に先細る。3 つ目 (同図版右側) の礫群は、IV 層に包蔵され 2 つ目の礫群と同様である。

このような、礫の広がりには V～IV 層形成において、地山の石灰質砂岩基盤と旧汀線に関わる自然堆積の可能性が高いと思われる、縄文後期から弥生期まで同様な環境が継続していたと考えられる。また、当時の植生としては、炉址内で海岸付近の沖積地から斜面地に生育するヤマグワが検出された(第 IV 章第 9 節)。

本遺跡の堆積には、E ライン北壁・H ライン南壁(巻首図版 3)に堆積のズレや噴砂が認められ、地震の痕跡を示すもので、これについては琉球王府の頃と見られる(註 1)。

成果と課題

本遺跡において、I 群土器の各型式の関係については、縄文時代前期と捉えられてきた室川下層式土器(V 層)と曾畑式土器(VIII 層)の間に層位的に時間差があることが確認できたこと。

V 層においては、層が薄いため層位的に捉えられていない中で、室川下層式土器から面縄東洞式土器までのバリエーションがあり、試掘番号 30(註 2)において室川下層式土器と仲泊式土器で見られた出土レベル差も踏まえて第 39 図の土器型式の変遷を示した。

これによると船元系土器が搬入された上限は、室川下層式土器と考えられる。

縄文時代中～後期の土器変遷を考えるうえで重要であることから、本報告で型式不明としたものを面縄前庭式土器から仲泊式土器への移行段階を凸帯文系の「伊礼原 a 式」、仲泊式土器から面縄東洞式土器への移行段階を肥厚口縁系の「伊礼原 b 式」として仮称したい。

IV・V 層の垂直分布に見られたレベル差や出土範囲、Vs 層内の土器出土レベルの様相と他の遺物の出土傾向、人骨に Vs 層で得られた四肢骨片に火を受けたものと炉址直下(外側の縁)の検出状況など、所属時期は検討課題である。

また、沖積低地に立地し、賑が確認され基盤岩に見られるノッチや試掘調査等の結果から、旧汀線が想定され、その形成時期は曾畑式土器が検出された VIII 層の縄文時代前期以降と推測され、遺跡立地の自然環境の変遷とピーチロックの形成に新しい知見を与えるものと考えられている(註 5)。

本遺跡の調査は、津波による自然災害を受けた稀な遺跡であったが、津波の時期が面縄東洞式土器の頃である成果も得られた。

縄文時代中～後期の V 層を壊した津波による自然災害の痕跡は、伊礼原遺跡で見られた暴浪または高波との関連性、旧地形や層序の把握について広範囲な検証が求められる課題である。

北谷町域内での沖積低地における人々の暮らしの変化や自然環境の様子を示し、北谷町の新たな歴史は沖縄の先史時代の解明に寄与する重要な成果であった。

(山城)

<引用・参考文献>

註 1：松田順一郎氏の所見による

註 2：松原哲志・島袋春美(編) 2008 伊礼原 E 遺跡『伊礼原 B 遺跡 伊礼原 E 遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 27 集 北谷町教育委員会

註 3：田名真之 1986 付録「北谷の村落の変遷」『北谷町史第二巻資料編 1 前近代・近代文献資料』北谷町役場

註 4：松田順一郎 2007 「II 伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区に見られた古地遺跡一」

『伊礼原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 26 集 北谷町教育委員会

註 5：東門研治 2007 「土器」『伊礼原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第 26 集 北谷町教育委員会の「仲泊移行型式」を含む。

<土器>

土器は I 群土器（貝塚時代前 I～IV 期）と II 群土器（貝塚時代前 V～後期～グスク時代）が得られ、I 群土器が 84.4%、II 群土器が 14.5% で、I 群土器が大半を占める（第 30 表）。

層別には海成の VII 層で I-i 類（管畑式土器）が得られ、文化層の V 層及び Vs 層で I-ii 類～x ii 類（以下記号省略）、IV 層及び IV 攪乱層で II 群土器が出土した。文化層の土器についてみると在地下土器と搬入土器に分けられ、在地下土器は室川下層式土器といわゆる奄美系土器の面縄前庭式土器、面縄東洞式土器、面縄前庭式土器が在地化したとされる仲泊式土器（当真・上原 1982）が多数出土した。

搬入土器は縄文中期の船元系土器（相美第 IV 章第 1 節）、縄文後期の市来式土器（本田 1981・1989）、弥生式土器が出土した。第 39 図に在地下土器と搬入土器を時間軸で相対的に示した。

これによると I 群土器は船元系土器（縄文中期）と市来式土器（縄文後期）、II 群土器の搬入土器は文様（凸帯文）や底部の形態から弥生中期と考えられる。貝塚後期の在地下土器の上限は肥厚口縁（第 84 図 1）・カウチバンタ式土器、下限はグスク系土器で、主体となる土器は浜屋原式土器、大当原式土器であるが、包含層も薄く、出土量も少ないため概要は明瞭でない。

最も多く出土した I 群土器は、前述したように複数の型式があり、土器の大きさや文様はバラエティーに富んでいる。搬入土器との関連や土器の変遷を検討するため、形態（口縁部・底部）、文様（要素・構図）各々の土器を比較した。

土器の大きさは大（室川下層式土器）→中（面縄前庭式・仲泊 ab 式）→小（面縄東洞式土器）へと徐々に小さくなる傾向がある。

口縁形態は平口縁（室川下層式土器）→瘤状突起（面縄前庭式土器）や山形口縁（仲泊式土器）→方形口縁・平口縁（面縄東洞式土器）、底部形態は尖底（室川下層式土器）→尖底・丸底（面縄前庭式・仲泊 ab 式）→平底（面縄東洞式土器）にかわる。

文様の構成要素は貝殻文・斜沈線文（室川下層式土器）→凸帯文・沈線文（面縄前庭式土器）→肥厚部（縁帯文）に施文（「肥厚口縁」）・沈線文（仲泊式土器）→押し文・沈線文（面縄東洞式・嘉徳 I・II 式土器）にかわる。

第 39 図に示したように土器変化の画期は二回考えられ、①は土器が小形化し、頸部がしまり、丸底が出現し、文様が陰刻（貝殻文・沈線文）→陽刻（凸帯文）に変わる面縄前庭式土器の時期、②は鉢形で方形口縁で、平底を呈する。文様は押し文で、施文範囲が口縁部（あるいは文様帯）に限られてくる面縄東洞式土器の時期である。

この二つの時期、①が縄文中期の胴下部が膨らみ、底部が丸底、文様が陽刻（凸帯文）を施す船元系土器、②が縄文後期の方形口縁で平底の市来式土器が搬入土器の時期と符合することからそれぞれ搬入土器の影響を受けたと想定され、堂込（2009）のいう九州の土器型式と連動を裏付けるものである。

在地下土器の中に文様の要素（凸帯文・肥厚口縁・沈線文）及び器形が面縄前庭式・仲泊式土器に酷似するが、これらの土器に分類できないものを型式不明土器としてまとめた。堂込の古我地原式土器の範疇に含まれるものもあるが、本遺跡は出土資料が豊富で堂込が設定した以外に仲泊式土器と面縄東洞式土器の中間タイプもあるため、あえて「型式不明土器」とした（堂込 2009）。

文様の面から凸帯文幅や肥厚幅及びその間の沈線文の文様構図から面縄前庭式土器、仲泊式土器との関連をみるため、I 群土器の凸帯文・肥厚幅の計測（第 37 図）、文様②（沈線文）の構図（第 38 図）を検討した。

これを見ると面縄前庭式土器の凸帯文幅は 0.5～0.7cm が多く、型式不明土器は 1.0～2.0cm に凸帯文幅・肥厚幅が集中する。仲泊 a 式土器と仲泊 b 式土器の肥厚幅は 2.0cm が最も多く、その前後に徐々に少なくなるが、後者の仲泊 b 式は仲泊 a 式土器に比べて、肥厚部と胴部の境が明瞭でない（以下「文様帯」）ものの割合の方が高い。面縄東洞式土器は肥厚幅 2.5cm をピークに広い方に徐々に減り、仲泊 b 式

同様、文様帯の割合が高くなる。

施文の範囲をみると室川下層式土器が底部近くまで、面縄前庭式が胴下部まで、仲泊式が胴上部まで、面縄東洞式が肥厚部あるいは文様帯までと、その範囲は徐々に狭くなるようである。

文様の種類及び施文範囲をみると室川下層式土器は貝殻文及び斜沈線文を口縁部から底部近くまで施すが、面縄前庭式および仲泊式、型式不明土器は口縁部に凸帯文か肥厚口縁、胴部に沈線文と施文の種類が部位によって使い分けられている。

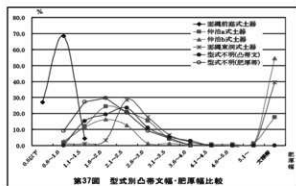
沈線文の構図(文様②)は縦位、斜位、鋸歯状、羽状、綾杉の種類がある。面縄前庭式土器は凸帯文(文様②)が縦位と鋸歯状がほぼ同じ割合(第二分冊第42表)で、胴部(文様④)は縦位が主である。仲泊(a・b)式は施文範囲は胴上部にほぼ納まり、仲泊a式は鋸歯状が約16%、羽状、斜沈線が20.5%とほぼ同じ割合で鋸歯状がやや少なく、仲泊b式は羽状が約8割を占める。後者は肥厚部の文様も羽状を施すものが多い(第38図)。

型式不明土器には凸帯文系と肥厚口縁系があり、その下部文様(文様②)は、鋸歯状が約40%、羽状と斜位が17.5%である。鋸歯状の文様構図は面縄前庭式土器や仲泊式土器に多く見られ、特に羽状の構図は仲泊b式土器で78.3%を占める。

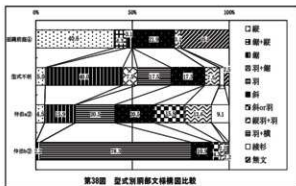
以上、在地土器(面縄前庭式から面縄東洞式土器)の器形、施文範囲、文様構成から型式不明土器の凸帯文系は面縄前庭式土器と仲泊式土器との中間タイプ、肥厚口縁系は仲泊式土器と面縄東洞式土器との中間タイプの様相を呈することから、前者を伊礼原a式、後者を伊礼原b式と仮称したい。

本遺跡出土のI群土器は室川下層式土器が船元系土器の影響を受けながら面縄前庭式土器へ、また、面縄前庭式土器と在地土器文様である貝殻文(仲泊a式土器)、斜沈線文(仲泊b式土器)を育みながら、面縄東洞式土器に変化したことが想定され、特に第76図7、第77図22のような断面が「く」字状肥厚は市来式土器の影響(河川1986)を示すものと思われる。わずかではあるが伊波・荻堂式・嘉徳I式・嘉徳II式土器が得られており、これらの土器は口縁部の肥厚も弱く、施文部分は文様帯をなす。奄美大島の下山田II遺跡や沖永良島神野貝塚出土の嘉徳I・II式の中には胴下部に鋸歯状の沈線文を施すものがあり、前IV期の土器は一概に市来式土器の影響があるともいえず、器形が鉢形で平底へ変化する要因は堂込のいう九州の土器型式と連動するのであれば、市来式土器以外の搬入土器の可能性を示唆するものと思われる。

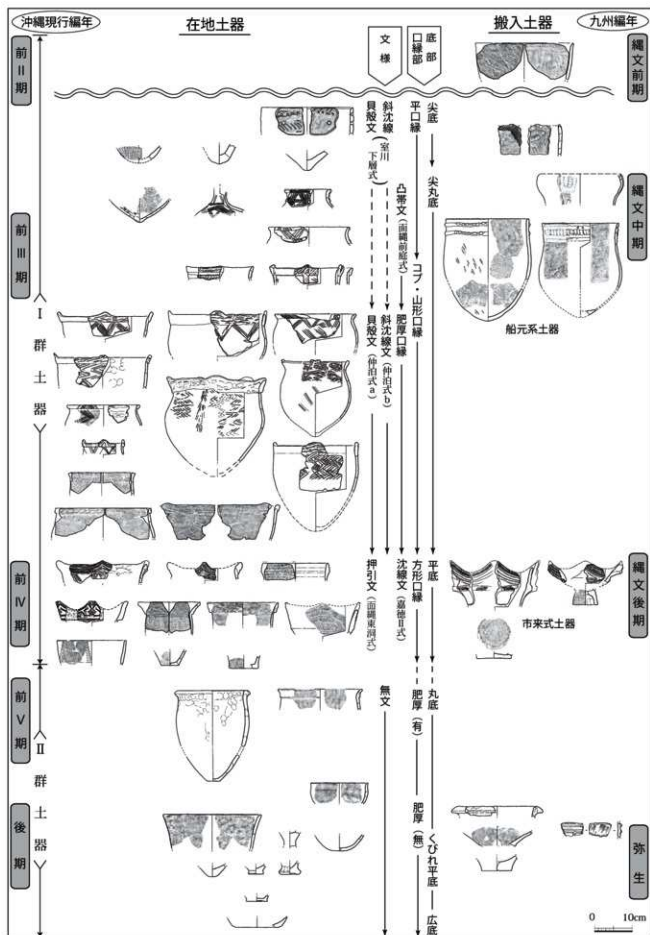
II群土器の出土量は少なく、第39図に示したようにII群土器はI群土器の文様が消え、無文である。口縁部が肥厚する肥厚口縁・カウチバンタ式土器→浜屋原式土器・大当原式土器→くびれ平底土器→グスク土器の時期的変遷が考えられるが、文化層が薄く、その変遷は明瞭でない。搬入土器は口縁部の形状、凸帯文、底部の立ち上がりかやや決れることから、これまで神縄諸島で確認されている弥生中期(須玖式土器)土器の類と思われる、第39図に示したような位置にあたる。



第37図 型式別凸帯文幅・肥厚幅比較



第38図 型式別胴部文様構成比較



第39図 本遺跡出土の土器変遷 (詳細は第二分冊第三章5節を参照)

<石器>

本遺跡では破片を含め615点の石器が出土した。以下の石器について主な特徴と留意点を述べる。

1. 石鏃の出土と形態 2. 石斧の形態 3. 磨石の出土量 4. 石器の素材

最初に石鏃の出土が挙げられる。範囲確認調査(2008年)の際に既に1点確認され、今回の調査で2点となる。本報告の資料は、打製石鏃で凹基無茎鏃に分類され、特徴として石質は輝緑岩を用いている。

サイズの点では、県内で報告された石鏃と比較し、最大長、最大幅と約二倍の大きさを呈す。他の打製石鏃と比べ剥離整形が大まかで、裏面が扁平(他の打製石鏃は断面がレンズ状) 横断面が三角状を呈す。推測の範囲だが、おそらく素材の点で製作が容易ではなかった事に関係があると考えられる。

第2に挙げられるのが石斧で、完形の資料が40点ほど出土した。石斧の種類には磨製両刃石斧や扁平片刃石斧等がみられた。第90図4の石斧は、基部を欠くが刃部の横幅や横断面の厚みから推測すると、野間貝塚のI群に分類された石斧と同種のタイプと考えられる。第91図6～9、第92図12・13第93図17～19の石斧は、県内で報告された石斧と比較し形態、大きさ、特に刃部研磨が顕著で、刃縁が深く基部の側縁まで至っており持ち込みを検討するところである。

又、挟入磨製石斧が半欠品を含め3点出土した。第96図37は形態が扁平を呈し、厚さ1.8cmと薄い石斧は他の挟入石斧の資料になく製作状態も特に良い。この石斧は、土抗SK028からバチ形磨製石斧(第93図17)と共伴して検出された。他2点は小型の資料で若干厚く、前者の石斧を模倣したものと推測される。試掘調査(2005年)でも一部が破損した挟入磨製石斧が出土しており、今回の調査を含め合計4点の挟入磨製石斧が確認されたことになる。

本調査で弥生系土器、弥生式模倣土器の出土も確認され、挟入磨製石斧は挟りの特徴において弥生前期・中期の柱状片刃石斧にみられる挟りと同種のものと考えられる。佐原氏の見解では、片刃石斧を縦斧として使う柄や、「柱状両刃石斧」、「扁平両刃石斧」など形態の異なる事例があると述べていることから、今回の挟入磨製石斧は例外的な石斧と捉え、さらに検討を重ねたい。

第3に挙げられるのが量的に顕著な磨石、敲石類で、磨石としたものは破片を含め300点を越す。大型磨石と判断される破損品には摩耗や風化で角がとれたものは少なく接合可能な磨石が多くみられ実際に接合できた資料もあった。小型、中型に比べ大型のものは研磨が特に顕著で石斧同様に磨石類も、ある程度持ち込まれたのではないかと推測される。

石質については本町で調査した近隣の遺跡と比較し、どの報告よりも石器に使用された岩石の種類が多く素材として35種類使用されていた。岩石は大別して3つに分類され、当遺跡で確認された割合は火成岩16、堆積岩12、変成岩5、鉱物1であった。

本遺跡の石斧に最も多用される石質は輝緑岩、緑色岩が挙げられる。流紋岩製の石器は当遺跡で5点得られ4点が石斧である。流紋岩は火成岩・火山岩の一種で、挟入磨製石斧のうち第96図37は流紋岩を用いていた。磨石の素材で多いものは砂岩、斑レイ岩、輝緑岩、花崗質砂岩、礫質砂岩で、花崗質砂岩に大型と思われるもの、研磨の顕著なものが多いとみられた。

石鏃は、範囲確認調査(2008年)でチャート製打製石鏃、伊礼原遺跡(2007年)でもチャート製打製石鏃の他、石匙、チャート礫が大量に出土し、今回の調査も剥片石器類にチャートが多い。しかし、本調査で出土した石鏃は輝緑岩製である。県内で出土した石鏃の報告でも打製石鏃はチャートの場合が殆どで、黒曜石、石英がそれに次いで多く、輝緑岩を用いた打製石鏃はこれまでに県内で報告例がない。

以上を要約すると石器も土器の出土状況を踏まえた結果、九州の影響や関わりを窺わせる資料がみられ石斧、磨石等、一定数は搬入資料の可能性も念頭に今後も検討を加えていきたい。

(土地)

註1：佐原真下條信行 立平道 蜂屋春美 森本晋 岡村秀典 5・工具 p38<編集>金剛堅 佐原真「弥生文化の研究5 道具と技術 I」

<貝製品>

貝製品及び未製品が443点得られ、貝塚時代前Ⅱ期・貝塚時代前Ⅲ～Ⅳ期・貝塚時代後期にまたがるが、そのほとんどは貝塚時代前Ⅲ～Ⅳ期に属するものである。(第75表)

本遺跡で確認された自然貝は海産の巻貝41科153種、二枚貝25科71種、淡水産3科3種、陸産4科6種の計233種で、貝製品に用いられた貝種はこの13.6%の37種である。その内訳は二枚貝有孔製品11種、貝輪8種、貝玉3種、巻貝製品7種、二枚貝製品、シャコガイ製品、貝鎌がそれぞれ2種、貝札状製品、タカラガイ製品、ホラガイ有孔製品、スイジガイ製品それぞれ1種である。(重複して使用された貝を除く)。

本遺跡の貝製品の特徴

①イモガイ貝札状製品・タカラガイ製品・ゴホウラ製貝輪(背面型・腹面型)など製作工程が想定されるものが得られたこと。

②貝製品の加工にはバリエーションがある。

③貝塚時代前Ⅱ期にゴホウラを加工した製品が出土したことがあげられる。

各製品の製作工程をみるとタカラガイ製品は粗割→細かい打割→研磨→回転穿孔、イモガイ貝札状製品は粗割→すり切り→研磨、ゴホウラ製貝輪は粗割→細かい打割→研磨(平坦か丸み)と一定の規則性が見られ、他の製品も打割(粗・細)→研磨はほぼ同じである。研磨には回転穿孔やすり切り(穿孔・沈線文による加飾)も見られる。しかし、中には自然貝にできた孔を取り込んだもの(図版147)や複雑な加工のもの(第152図98・99)も見られる。

製品の加工をみるとa:貝の原形がわかるもの、b:貝原形の一部、c:貝の原形がわからないものがあり、それぞれ貝の特性を生かしているようである。

a:貝の原形がわかるものは、粗孔のみ(二枚貝有孔製品、ホラガイ有孔製品)、打割調整(螺蓋製貝斧・シャコガイ未製品)、研磨・穿孔(スイジガイ利器)、平面研磨(一面・ソメワケグリ、二面・ソデガイ製品、リスガイ、四面・タケノコガイ)がある。

b:貝の原形の一部または螺塔部を生かしたイモガイ貝玉、円盤状、ホシダカラの外層を生かした(ホシダカラ有孔製品)、突起を生かしたクモガイ・スイジガイ、腹縁を生かしたオオツタノハ・オオベッコウガサ・メンガイ、輪状を生かしたサラサバティラ、体層を生かしたヤコウガイがある。

特にスイジガイ突起の利用は古我地原貝塚(1987)で報告されているが、第145図に示したような利用は本遺跡が初めてである。

c:貝の原形を残さないものにはイモガイの体層(イモガイ貝札)、堅い殻のクロチョウガイ(貝鎌)、厚みのあるシャコガイ製品(第151図97・第152図100・101)がある。

③貝塚時代前Ⅱ期のゴホウラの加工品は名護市大堂原遺跡にあるが、製品の形状を含め、今後、注視を要する資料である。

本遺跡の貝製品は主にイノー内の砂地に生息するアンボンクロザメやホシダカラなどが多く用いられており、奄美諸島とは異なり、イノーの面積が広い沖縄諸島中南部の地域的特徴を示す。また、製作工程が復元できる資料が得られたことは、V層・IV層の時期にこの地域に根ざした人々の存在を窺わせるもので、土器の資料を裏付けるものである。

(鳥塚)

報告書抄録

ふりがな	いれいばるいーいせき							
書名	伊礼原E遺跡							
副書名	桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	北谷町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第31集							
編著者名	山城安生・東門研治・松原哲志・島袋春美・土地千賀子・呉屋広江・相美伊久雄 大城逸朗・黒住耐二・樋泉岳二・土肥直美・藤田祐樹							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	平成22年 2月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
いれいばるいーいせき 伊礼原E遺跡	おきなわけん 沖縄県 北谷町 いへい あざ伊平 こあざいばる 小字伊礼原	473260		26° 19' 05"	127° 45' 41"	H16.12.21 ～ H17.12.28	8,850	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	層序	主な遺構		主な遺物		主な時代
伊礼原E遺跡	集落	貝塚前Ⅱ期	縄文前期	泥炭層・Ⅷ	シルト層 青灰色枝サンゴ礫層 (縄文海進)		流木 曾畑式土器	6050±40 B.P. 4750±50 B.P.
		貝塚前Ⅲ～Ⅳ期	縄文中期～後期	Vs・V	柵列状遺構 (SC003) が址 (SX007) 埋葬人骨 (SX008・SX014)		土器・輝緑岩製石鎌・ チャート多数・骨製 品・貝製品 (タカラ ガイ貝札)	3220±40 B.P. (炉址)
		貝塚前Ⅴ ～ 貝塚後期	弥生～ 平安	Ⅳカ ・ Ⅳ	集石遺構 (SX005・SX006)		土器・挟入石斧・ 貝製品 (ゴホウラ 貝輪・二枚貝有孔)	
		ダスク ～ 戦前	中世～ 現代	Ⅲ ・ Ⅱ	石敷遺構 (SX001) 石列遺構 (SX002)		中国産陶磁器・沖縄産 陶器・本土産陶磁器・ 簪・銭貨・鉄製品	160±30 B.P. (ブタ下顎骨)
要約	<p>本遺跡はサンゴ礁地域の沖積低地における先史時代から近世までの複合遺跡である。特筆すべき事項として、曾畑式土器が単純出土するⅧ層(縄文前期)と室川下層式や面縄前庭式、仲泊a・b式、面縄東洞式、嘉徳Ⅰ・Ⅱ式等が出土するⅤ層(縄文中～後期)との間に無遺物層であるⅥ・Ⅶ層を挟む事が挙げられる。また、Ⅴ層からは県内初事例となる九州の船元系土器が一定量得られた事と、Ⅴ層期に津波による波力による遺跡に及ぶ事によって形成された堆積層(Vs層)が確認された事は、本県における縄文中～後期の研究史に一石を投じるものと考えられる。Ⅳ層(弥生～平安)出土の遺物量は少ないが、挟入石斧、ゴホウラ製貝輪等が出土した。</p> <p>このように、本遺跡では縄文海進以後、サンゴ礁地域における沖積低地の先史時代の生活史を垣間見ることができる。</p>							

北谷町文化財調査報告書 第31集

伊礼原E遺跡

—桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査（平成16・17年度）—

（第一分冊）

編集：北谷町教育委員会

発行年：2010年（平成22年）2月

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098-936-3159

印刷：有限会社ドリーム印刷

〒904-1111 沖縄県南風原町字津嘉山1537-6番地

TEL 098-889-2784

© 北谷町教育委員会 2010 Printed in japan

許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。